398
435

始

特232
764

帝國圖書館藏

館岡俊之助著

日本文學講說 上卷

摘要

日本社發行

昭和十五年 帝國圖書館藏

序

世の多くの國文學史には、知識的理解を目的として、形式的な、表面的な説明を事とする傾向があると思ひます。それも結構ではありますが、それでは日本文學の持つてゐる味はひを讀者に傳へるといふことは出來にくからうと思はれます。本書はこれに對して、讀者の鑑賞を目的として情味を傳へることを第一に心掛けました。趣味情感を本位とする文學の世界に於て、例へば遊覽バスに乘つて東京見物をするやうに型に嵌つた道路を通つて、女車掌の説明をききながら五分十分と各所を歴廻るなどといふことは堪へられぬことであります。東京といふ都會の持つ情感を味はふためには、氣の利いた小父さんと一緒に、銀座や淺草の裏街をうろついて見なければならないと同じやうに、文學の世界に於ても吾々

は自分々々に特殊な新しい心を以て、文學の林の中を漫歩しながら、各作品の中に新味を見出だして行かねばならないと思ひます。

次に本書が心掛けたことは、讀者をして、最も手つ取り早く日本文學の大要に通ぜしめたいといふことであります。この目的から本書は、各時代を二部に分ち、第一部に於ては、其の時代の文學の大勢を概說し、第二部に於ては代表的な中心文學を詳敍するといふ方法を取りました。あらゆる作品を廣く淺く說くのは、多く報告して、結局一つをもろくに味はゝせ得ない憾みがあるためであります。從つて第二部の各時代文學各說に於て最も力を入れたのは、大和時代の古事記と萬葉集、平安時代の源氏物語、鎌倉時代の平家物語等であります。國文學專攻者ならいざ知らず、一般の讀者或は高等專門學校の學生諸君には、これ等の作品に就いて知る所があれば、それで充分だと信ずる者であります。

以上が本書の志した所でありますが、國文學史の研究に入つたばかりの不敏な著者が、果してその目的を達し得たかどうか、甚だ疑はしい次第であります。尙、稚い書生の稚い研究でありますので、先人の敎へをそのまま受け入れた所もあります。種々間違ひも澤山あることと思ひますが、御敎示下されば有難く存じます。

昭和十五年三月二十日

著者識

摘要

日本文學講說 上卷 目次

第一篇　大和時代文學

第一部　大和時代文學概說……三

名稱・範圍——時代區分——展開——特色

第二部　大和時代文學各說……二六

第一章　古事記……二六

成立——組織——梗概・構想——表現——文學的價値

第二章　祝詞……五五

敍事的抒情文學——現存する祝詞——分類・思想・表現

——「大祓詞」

第三章　萬葉集……七〇
成立——組織——用字法——作風——歌人——柿本人麿
——山部赤人——山上憶良——大伴旅人及び大持家持

第二篇　平安時代文學

第一部　平安時代文學概說……一〇一
名稱・範圍——時代區分——展開——貴族文學勃興の原因——特質

第二部　平安時代文學各說……一一四

第一章　竹取物語……一一四
成立——內容——構想・表現——文學的價値

第二章　伊勢物語……一二四
成立——內容——風趣——文學的價値

第三章　源氏物語……一三四
紫式部の閲歷——源氏物語の梗概——構想——文章——源氏物語に對する種々の見解——源氏物語の絶大價値

第四章　枕の草子……一八六
清少納言の閲歷——清少納言の文學的立場——枕の草子の特色——清少納言の人生批評

第五章　古今和歌集……二〇〇
六歌仙時代——古今集の成立・內容——古今集の特色——代表歌人

第三篇　鎌倉時代文學

第一部　鎌倉時代文學概說……二二一
範圍と時代區分——展開——特質

目次

第二部　鎌倉時代文學各説……二三〇
第一章　平家物語……二三〇
時代の背景——國民文學としての平家物語——作者及び成立時代——構想——悲哀美——戰爭の美化——文章——結論
第二章　新古今和歌集……二五二
成立——歌人——歌風・特質——定家と家隆——長所・短所
第三章　西行と實朝……二六六

目次終

第一篇　大和時代文學

第一部　大和時代文學概說

(1)　名稱・範圍

ここにいふ大和時代の文學とは、奈良朝及び奈良朝以前の文學を指すのである。單に古代の文學或は上代文學と呼んでも差支へないのであるが、この時代は帝都が主として大和に置かれたので、國文學史家は大和時代文學と稱して居るのである。

奈良朝の終りまでといふと、平安遷都は桓武天皇の延曆十三年、紀元一四五四年であるから、極めて長い年代である。もし更に神代まで遡るとすれば時間はもつともつと長くなるのである。

この廣い間の文學には、文字の全く存在しない時代の文學も入つて居る。この時代は傳唱文學時代と呼ばれて、文學は口から耳へと語り傳へられてゐた。この傳唱時代の末期になると文字が傳

來して記錄を作ることが始つた。この記錄發生時代を經ると、愈々記載文學時代となるのである。現存する大和時代文學といふものは、全部この記載時代に入つてから文書として出來上つたものである。

即ち大和時代文學の範圍は極めて廣くて、年代からいへば神代から奈良朝の終りまで、文學の展開の上からいへば、全く文字のない時代から記錄發生時代を經て記載時代に入り、更に貴族文學の擡頭期にまで及んで居るのである。

(2)　時代區分

我々はこの長い年代の文學を何期かに區分して考察するのが便利であるが、大體三つの區分の仕方があると思ふ。

第一は前に述べた傳唱時代の文學と記載時代の文學との分け方である。

今日から見れば大和時代の文學はすべて奈良朝に入つてから文獻となつた文學であつて、その製作は記載文學時代に屬するが、その發生は未だ文字が全く存在しないで口唱によつて文學が傳へられた上古にあるのであるから、これを傳唱時代の文學として考察するのが當然である。この期に屬する作品としては古事記・日本書紀・風土記・祝詞の大部分がそれである。

しかしこの傳唱文學時代は極めて長く、その間で全く文字のなかつたのは神代から人代の崇神天皇の頃迄であつて、崇神・垂仁兩朝以後は文字も傳はり記錄が發生したと思はれるから、漢籍が初めて傳來した應神朝のあたりを界として、この時代を前後二期に分けることが出來る。即ち前期は純粹の傳唱時代であり、後期は記錄發生時代であつて、謂はば次の記載文學時代への過渡期である。

次に記載文學時代は文學が文字に寫された時代で、現存の古代文學は悉くこの時代に成つたのである。この時代は傳唱時代にくらべると、年數は短いが、文學の發達は極めて著しい。この時代は更に前期後期に分けると、前期は推古朝から持統・文武兩朝の藤原宮時代に至る十代百十五年間、後期は奈良七代七十五年間となる。前期は國民の自覺期ともいふべき時代で、國史編纂が計畫され、一方には民族的國家的抒情詩が個人的自覺的抒情詩としての和歌となつて急激な發達をした時期である。後期は國史編纂が實を結んで、古事記・日本書紀等の史籍が續々と出來上り、文學としてこの時代を代表する萬葉集の成つた時期である。この時代の文學に屬せしめるものには、萬葉集の外に、宣命・懷風藻等がある。

第二の分け方は集團的文學と個人的文學とである。この區分の關係は傳唱文學と記載文學との關係と同じである。

原始文學の起原・發生の問題は、ここでは觸れないことにするが、文學は集團的生活の中から生まれた文學が、時代が生したといふのが諸家の說の一致する所である。この集團生活の中から發下るに從つて民衆の間に文學に對する自覺が起るやうになつて、初めて個人的文學となつて來るのである。古代の文學をこの立場からみると、古事記などはその編纂者が個人であつても、その部分的な神話・傳說・說話の成立は民族的集團的になされたと見ることが出來る。これに對して萬葉集の如きは、その多くが個人的に作られたものである。この立場から上古の文學を傳唱文學又は集團的文學とし、奈良朝の文學を記載文學又は個人的文學とすることが出來るのである。從つて、前者を貫くものは集團的民族的國家的精神であり、後者に流れてゐるものは個人的精神である。

更に第三の區分の方法は敍事文學の時代と抒情文學の時代との區別であるが、これは大體展開的であるにしても明瞭に時代を分けることは出來ない。卽ち敍事文學時代と目される記・紀の時代にも抒情文學たる記・紀の歌謠があるし、抒情文學時代と目される萬葉時代にも日本靈異記等の敍事文學もあるからである。これを文學發生の見地からみても、敍事文學が先に出來たか、抒情文學が後に出來たかは、にはかに決しがたい問題である。恐らく文學には敍事的要素と抒情的要素とが同時に含まれて居るに相違ないから、各時代に敍事文學も抒情文學も行はれるのは當然である。從つて之は縱の區別よりも橫の分類と見る方が妥當である。

而もこの區分によれば、祝詞・宣命の如きはその性質及び組織の上から、敍事的要素と抒情的要素との二つから成つて居るので、之を中間的存在として、敍事的抒情文學といはなければならないのである。

(3) 展　開

傳唱文學時代

古代の民族は驚異の感情を起す總ての現象の起因を、超人間的存在卽ち神や精靈のなす所と考へた。それと同時に、あらゆる事象を人間と同樣に生命並びに靈魂を有するものと信じた。我が日本民族が太古に語り傳へた神話は、かういふ想像力によつて自然や人生の諸現象を說明した一種の物語である。この神話に次いで發生した民族的物語は歷史傳說であるが、これは著しい歷史的

事件を回顧する心情から生まれたものである。更に之等の神話や傳說の間には、遊離的に介在する多くの說話がある。この遊離說話は獨立的に發生した物語であつて、何等かの機會に神話・傳說の中に織り込まれたものである。

之等の日本民族の間に生まれた神話・傳說・說話は、初めは個々に發生したのであるが、民族の統一が成るに從つて、次第に集結せられて遂に一の體系を備へた國民的敍事文學となつた。

併し統一された國民的傳唱文學が出來上つた後、更にこれを資料として古事記・日本書紀・風土記等の國史や鄕土誌が編纂される迄には、記錄の發達をまたねばならなかつた。即ち國史編纂以前に於ける神話・傳說は民間の古老や語部などの口によつて語り傳へられる長い傳唱時代を持たねばならなかつたのである。

文字が傳はつて何等かの形で記錄が發生したのは、崇神朝以後と思はれるが、併し漢字を用ゐて記錄を作るのは日本人にとつては容易の業でなかつたから、初めは歸化氏族の手を借りたのである。應神朝に歸化した阿知使王及び王仁の子孫が、大和河內の文部を率ゐて朝廷の記錄に從事したのはその著しい例である。その他文筆を以て仕へた歸化氏族は極めて多かつた。日本書紀、仁德紀四十一年の條に、

『春二月、遣二紀角宿禰於百濟一、始分二國郡疆場一、具錄二鄕土所レ出。』

とあるのは、朝廷で記錄を作らしめた最古の記事であるが、更に履仲紀四年の條には、

『始之於二諸國一置二國史一、記二言事一達二四方志一。』

と見えてゐる。これ等によつて、當時既に政治上の重要な事項を記錄することが始つたことを知るが、一方には皇室の系譜や諸家の私記などを記すことも行はれたであらう。そしてかういふ記錄文書で幸に後世に遺存したものは、後の國史編纂の資料となつた。

神話・傳說は上古の敍事文學の源泉であるが、一方これ等の中には古い歌謠を含んで居る。上古の歌謠も亦、民衆の間から生まれたものであつて、もとは集團生活に於て共通の感情を敍べたものであつたが、何かの因緣によつて神話や傳說の中に插入せられ、神や英雄が詠んだものとして後世に傳唱せられたのである。これ等の歌謠は漸次彫琢を經たのであつて、これが國史に記載せられた時には、もはや原形を失ふほどに變化したものもあつたらうと思はれる。

以上の神話・傳說・說話・歌謠は悉く上代民族共通の性情を發揮して居るのであつて、その內容は神を對象として居り、總ての事象を神話化してゐるところに特徵があるが、後の文學のやうに個性の現れたものはない。そして神話・傳說・說話は上古の敍事文學であり、歌謠は抒情文學で

ある。この二種の文學が國文學の萌芽であつて、後の日本文學の母胎となつたのである。

記載文學時代前期

この時期に入つて我が民族の間には國家觀念の發達が見られ、ひいては國民的自覺が起つたために、國民文學は從來の混沌とした民族的文學の域を脱して、種々の部分に分れてそれ〴〵發展の途に就くこととなつた。現存する最古の文獻は、推古朝に作られた聖德太子の憲法十七條、佛典の註疏、金石文などであるが、この期は國民文學の黎明期であつて、未だ純然たる文學的作品は現れなかつた。次の舒明・皇極・孝德・齊明四帝の御代は、推古朝の後を承けて社會各般の文化が著しく發展すると共に、文學の方面に次第に個人の作品が多く現れたことは、萬葉集に舒明朝以後次第に歌數が增加して來てゐることによつても知られる。次いで天智・弘文二帝の近江朝になると、漢詩の流行を見たが、和歌は形式が愈々整頓して、額田女王のやうな特色ある歌人が出るに至つた。

壬申の亂後は皇室の尊嚴が愈々加はると共に、國民精神統一の機運が大いに起り、その結果として、これまで區々に傳承せられた神話・傳說を統一集結して、經國の大本とすべき國史撰定の企てが起つた。卽ち天武天皇の修史事業の御企てがこれであつて、天皇は川島皇子以下諸王諸臣に詔して國史の編纂に着手せしめられ、又別に稗田阿禮に命じて帝皇日繼及び先代舊辭を誦習せしめられた。この天武天皇の二つの修史事業は天皇の崩御によつて共に中絕したが、後の奈良時代に至つて古事記・日本書紀となつて完成を遂げた。

天武天皇朝に起つた國家的精神は、抒情文學の方面にも刺戟を與へて、持統・文武兩朝の藤原宮時代に至つて、和歌は國民的思想感情を高唱するやうになつた。そしてこの期の和歌を代表するものは柿本人麿である。人麿の和歌には、傳統的な神と國家の精神が强調されてゐるが、一面また個人的の種々の感情をも詠んで、奈良時代の個性表現時代の先驅となつて居る。

また敍事的抒情文學といふべき祝詞や宣命の記載法が發達したのも、この時代の末頃である。祝詞はもと言靈信仰から發生した一種の宗教文學であつて、原始的な祝詞は既に傳唱文學時代にあつたのであるが、それ等は殆ど後世に傳はらないで、記載文學時代の制作に成る延喜式所收の廿七篇、他二篇が現存して居るのである。これ等の多くは奈良朝から平安朝初期にかけて作られたものであるが、最も古いものと思はれる數篇は、近江朝若しくは藤原朝に成立したらしく、本來の面目をよく保つて居る。次に宣命は祝詞の系統を引いた敍事的抒情文學であつて、その形式は「公式令」に規定せられてゐる。併し日本書紀に收められたものは漢譯せられてゐて、國文で記

された最古のものは續日本紀所收の文武天皇即位の時の宣命以下の六十餘篇であるから、現存する宣命は後期に屬せしめるのが妥當である。

要するに推古朝から藤原朝に至る百十餘年間は、國家の發達に伴なつて國民的自覺が起つた時代で、當時の國文學には國家的思想と國民的感情とが强調せられて居るのである。この傾向を承けて更に個人的に自覺して個性を發揮するやうになつたのは後期の奈良時代である。

記載文學時代後期

後期は即ち奈良時代である。この時代は外來文化が益々盛に傳來すると共に、一方には奈良奠都が國民の思想上に大いなる刺戟を與へて、學問文藝は愈々發達して、上代文學史上の黃金時代となつた。

先づ初期には天武天皇の修史の御遺志を紹いで、元明天皇の和銅五年には古事記が太安萬侶の手によつて撰進せられ、翌六年には畿內七道諸國にその國の風土記を撰上すべき詔が下つた。次いで元正天皇の養老四年には、是より先、舍人親王等が勅を奉じて編纂中であつた日本書紀三十卷並びに系圖一卷が獻上せられて、ここに初めて大規模の國史の完成を見たのである。これ等のうち文學的作品として最も價値あるものは古事記である。古事記と日本書紀とが上古の諸傳說を國家的思想によつて統一し、集成して居るのに對して、風土記は地方色豐かな古老の所傳を地誌と共に記したものであるが、地方的に分散して居る民間傳說を地方別に記したところに著しい相違があるのである。

奈良時代は國民的自覺が愈々盛になつた時であつて、文學の方面では我が國の文學を支那文學と對等の地位に引き上げようとする機運が起つた。即ち奈良時代の前期には人麿・赤人等の跡を繼いで、山上憶良・大伴旅人の如き傑出した歌人が續々と現れて、各々その特質を發揮して上代和歌の最盛期を現出した。日本文學が初めて個性に目覺めたのはこの時代である。

次いで後期に入ると大伴家持・坂上郎女等の歌人が現れて個性は愈々鮮明となり、形式內容とも漢文學の影響を受けて複雜になり、また優美纖細になつた。當時の歌人は多く都會生活をした貴族階級に屬する人々であつたので、著しく都會化した趣味となり、變化に乏しくなつた。かくて奈良時代の和歌は末期に近づくに從つて、素朴な上代文學の特質を失つて貴族的文學となつて來たのである。

萬葉集に次いで貴重なる國文學は宣命である。宣命は前にも述べた如く祝詞の系統を引いたもので、形式內容に共通する所が多い。そして祝詞は天つ神の語として宣るのに對して、宣命が現つ

神なる天皇の勅命を宣るものとなつてゐる點、及び祝詞が善言吉辭の言靈の活動によつて國家皇室の繁榮を祈請するのに對して、宣命は教訓的な言葉によつて國民を善導しようとしてゐる點などに、時代の推移に伴なふ變遷が窺はれるのである。

奈良時代はまた漢文學の興隆期であつて、支那の詩文集に倣つて詩の撰集や家集を編むことが行はれたやうであるが、殆ど散佚して、今は天平勝寶三年に成つた懷風藻一卷を存するのみである。最後に、上古の傳說・說話の系統を引いた奈良時代の說話文學には、大體二つの系統のものがある。一は上古の神婚說話の系統を引いて、新に支那文學の影響を受けて發生した神仙說話で、萬葉集・懷風藻・風土記等の中に散見する。他は佛敎上の敎訓や奇談を中心とする佛敎說話で、日本靈異記に百十二話を收錄して居る。この二種の說話文學は共に國文學に新しい要素を加へて、平安時代の物語の源流となつてゐる點に於て、特に注目すべきものである。

(4) 特　色

前節までに我々は、大和時代文學の時代區分をして、その時代的な展開の跡を瞥見したが、次に、この時代の代表的文學作品に就いては第二部の各說に於て詳論することとして、大和時代文學全般に現れた特色を考察することとする。

先づこの時代の文學の最大の特色は、後世の文學と違つて殆ど全く外國の影響を受けなかつた時代、また外國の影響を受けることの極めて少かつた時代の產物であるといふこと、言ひ換へれば純日本的、或は準純日本的な文學であるといふ所にある。從つてその中には純粹な日本人の思想や感情が至る所に現れて居るのである。

芳賀矢一博士は國民性十論の中で、我が國民性の主要なるものを論じて、「忠君愛國」、「祖先を崇び家名を重んず」、「現世的、實際的」、「草木を愛し自然を喜ぶ」、「樂天洒落」、「淡泊瀟洒」、「纖麗纖巧」、「淸淨潔白」、「禮節作法」、「溫和寬恕」の十箇條を擧げて居るが、これは多少煩瑣に流れた嫌ひがあるにしても、我が古文學を讀めば、是等の國民性が隨所に窺はれることは何人も領き得る所である。殊にこの時代の文學を通觀して誰でも氣付くのは、「神に對する敬愛の情が深くて且つ人間味に厚いこと」、「自然愛に徹底して居ること」、この二つの點である。

我が古代民族は、神の觀念を固持して心から神に敬愛の念を捧げた。そしてその神は超絕的な存在でなくて甚だ人間的である。我が古代人は神と人間とを隔離することなく人の子として最も優れたものは神となり、神として祭られると考へた。從つて古代人の考へた神は一面に於て極めて

人間味が深く、そこに神格と人格との一致融合が見られるのである。例へば古事記に現れた神々は、神としての性質を具有すると同時に、また人間としての趣をも示して、その代表者は太陽神や、英雄神として國民の崇拜するところとなつたのである。神は人の子の最もすぐれたものであつて、人は神となり得る。人間から神へ向上することが出來る。そして人の子はすべて神に屬し、神のもとにあつて平和な生活を送ることが出來る。かういふ古代人の考へが、先づ第一に我が古文學の上に反映されて居るのである。この特色を最もよく發揮したものは古事記であつて、神の精神は、一面からいへば國家の精神となるからして、建國文學としての古事記はこの時代の代表的作品の一つと成つて來るのである。

次に自然愛に徹底して居る點であるが、自然美を愛することは東洋人の通有性であつて、ひとり日本人だけの特色ではないが、日本に於て特に著大である。

我が國土は秀麗なる風光と溫暖なる氣候とに惠まれて居る。四方海に圍まれた自然の美しさ、四季繁茂する綠の植物、かかる國土に生まれた民族が自然を愛するに至るは蓋し當然といはなければならない。從つて我が國人が自然を愛するのは、他の東洋人よりも、また一段と强烈であつて、日本人の生活は自然と親和し、自然と抱合したところにあるといつてよい。若し日本人の生活から自然を除いたら、いかに淋しく、いかに單調なものとなるかわからないのである。芳賀博士は右の點について由來する所の深い所以を左の如く述べた。

『我日本人が花鳥風月に親しむことは吾人の生活いづれの方面に於ても見られる。上代に於ての衣食住は、多く我國土に繁茂してゐる植物界から材料を取つた。千木高知といふ千木も、太敷立てといふ宮柱も、皆木材であつたことはいふまでもなく、藤葛を以て之をくゝりつけた。いはゆる「綱根ゆるぐ事なく」といふ綱根である。楮衣のシロタヘ、麻布のアラタヘ、之を染めるには草木の汁で、すり衣であつた。正木、日蔭等の蔓草を取つてかつらともし、手綦ともした。外國人のやうに、又蠻人のやうに鳥の羽、獸の皮を着飾つたことは一つも見えて居らぬ。（中略）鹿の角を廊下中に並べておく歐羅巴人の趣味とは違ふところがある。梓、櫨、檀を以て弓を作り、柳篠を以て矢をはいだ。柳は矢の木である。葉盤葉椀は木の葉を編んだものらしく、今の茅卷、柏餅にその名殘を殘して居る。萬葉集の

家にあれば笥に盛る飯を草枕、旅にしあれば椎の葉に盛る

といふ歌で上古時代の風俗も分る。到る處植物の繁茂した國土は、國民に向つて衣食住の材料をすべてそれから取らしめたのである。』

自然に惠まれ、平和の空氣に包まれた日本は、右の如くに自然と融和した生活を古代から持續したのである。

現代に於けるプロレタリアの生活を見ても、花卉の趣味を全然解しないものは一人もない。裏長屋に住む勞働者が、窓邊に一鉢の草花を据ゑて朝夕水をやるのを忘れないのも、また夏の夜店に草花屋が繁昌するのも皆、日本人が自然愛に生きる性情の現れである。かくの如く日本人は自然美の感受性に於て鋭敏である。

この自然愛の深い表現は、萬葉集の至る處に閃いて居る。自然に親しみ、自然の懷に眠り、自然と抱擁するといふ點で、萬葉人は全く自然人といつてよい。彼等の生活は自然そのものである。自然の如く素朴に、自然の如く正直に、自然の如く單純であつた。人と自然とが融合一如するところに、僞らぬ自然禮讃の聲を聞くことが出來るのである。

更に我々は、祝詞・宣命、その他の古文學に於て、我が國民性たる現實、光明、活動、向上、中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、風雅等の諸性質の反映を見ることが出來る。例へば、文武天皇が卽位の際に下された宣命の中に、

『是を以て百官人等四方の食國を治めまつれと任け給へる國々の宰等に至るまでに天皇が朝庭の敷き給ひ行ひ給へる國の法過ちを犯す事なく「明き淨き直き誠の心」もちていやすゝみ〳〵て緩怠ることなく務め結りて仕へまつれと詔り給ふ大命を諸聞食へと詔る。

（『續日本紀』卷一）』

といふ詞があるが、是は、今度新に卽位したについては、都にゐる百司百官より都を離れて國々を治める國司に至るまで、一同、朝廷の御布きなされた國法に違背することなく誠意誠心に忘らず勤め勵めよとの大詔で御座るといふ意である。

我々は此の宣命の中に在る「明き」「淨き」「直き」心といふ三大性を以て、大和民族の特性と稱される諸性質を說明することが出來るのである。殊に三種の神器は此の三大性の標章として遺憾がない。今、左に簡單にその理由を說明することとする。

鏡の性は明、其の德は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は鏡のやうな明き心を以て正しく事物を觀た。從つてその見方は概して公平無私で、赤い物は赤いとして、黑い物は黑いとして、善行に對しては我を忘れて歎美し、惡行を見ては敢然として排斥するといふ傾向があつた。天照大御神は鏡を齋きて我が大御前を見るが如くせよと仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齋かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の詞などに「明き心」といふ語が澤山に用ゐられて

居る。是等はいづれも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據になると思はれるのである。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も一面此の根本性質の結果である。我が國には政治・社會・宗教等の諸方面に亙つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突が無い、無いではないが割合に少く、又いつもよい加減に切り上げて調和するといふ傾きがある。例へば、異つた主義が新に外國から入つて來る。毛色が變つてゐるので、暫くは爭ふが、やがて御互に道理も無理もあることが解ると、馬鹿らしくて爭論が續けられなくなる、そこで騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事此の通りである。まづ儒教が入つて來た。至つて尤もらしい事をいふから早速傭聘して我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ、かくて儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護人となつた。佛教が入つて來た。餘りに奇怪なので暫く押問答がある、やがて說き方の巧妙なのに打ち込むと、何等の芥蔕なく衷心から歸依してしまふ。至尊の御身を以て自ら三寶の奴と名乘らせらるるやうになる。けれども天位の妖僧に歸するを見ては、さすがに默つては居ぬ。かくて遂に兩部習合といふ利巧な調和案が成り立つた。武家の世になつては、佛教を餘興扱ひして、老後の慰め、助命の口實とする樣になつた。德川時代になつては、禪の修行に武士ほど都合よきものはなしなどと、釋迦如來の夢にも見ぬ調和說を唱ふる高僧が現れた。あの位の騷ぎで明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではないだらうか。馬上に天下を得た武將が文藝の奬勵に骨折るのも、群雄割據の亂世に陣中篝火の下に古今集を讀む武將のあるのも、同じ戰國に「敵ぞとて何かは人のにくからむ同じ御國の同じ身なれば」と咏んで敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡くすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、皆一つは事を見ること明らかに、理に從ふこと流るるが如き根本性によるのではないだらうか。

清淨の德は玉に於て絕好の標章を得て居る。淨と明とは似ては居るが、同じくない。其の異ふ趣は丁度鏡と玉との異ふ趣に似て居る。汚穢混濁を忌むことは淸、明、共に同樣であるが、淸はそれ以上に味はひあり溫かみあることを要する。譬へば鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを必要としないで、溫潤の光、圓融の相、澄澈の趣あることを必要とするが如きものである。本來日本人は明らかに事物を看る長所があるのみならず、外物を看るにも自己を發表するにも、一種の味はひある態度を具へて居た。其の明は空白の明ではなくて溫潤、圓融、澄澈の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくて、水晶・夜光珠の明である。我國には古來禊、祓が多く行はれ、廣く用ゐられ、且つ重要視されて居た。祝詞・宣命を初めとして多く

の歌詠諷謠は明き心を現しながら趣味風韻に富んで居た。而も其の趣味や形容が諸外國例へば支那の文學に見る如き張子の虎のやうな誇張の弊がなくて、よく其の實を現し、中味に相應はしい修飾を纏うて居る。むくつけき武人にも戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は冑に香を燒きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それ〴〵相應はしい文學を有つて居る。外國出稼ぎの勞働者が其の日の生活に窮しながらもなほ一二の植木鉢を持たぬはなく、而して是は外國の勞働者に絕えて見ぬ所といはれて居る。大工指物屋の手に成るはかなき家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えぬ裏面まで手を盡くすといふ嗜みがあるといはれる。是等は孰れも大和民族が淸きを愛する根本性の現れたものではないか。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。其の厭ふ所は躊躇、緩慢、首鼠兩端である。曲ること、拗ること、邪なることである。叢雲の劍は其の標章として此の上なく相應はしい。元來直の德の本領は心の明らかに見た所に向つて直前するにある。若し右の三德を一括して之を一體と見れば、明は其の靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明らかに見たる所をば意が直進して實現する、而して知の見方、意の働き方に潔くして言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし愛し」故にその明き心の示す所に從ひ、直前して父母に事へ妻子を愛しむ。君を仰げば「八隅知し大君」、「現つ神」として國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い、故に直前して「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」の獻身的奉公を效す。此の通りである。而して其の君父に事へ妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別、利害勘定の結果ではなくて、直實掬すべき趣があつた。此處が眞淵、宣長等の國學者が感歎し自負して措かなかつた所である。無論何處の國にも、文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の所があつたであらう。又日本民族にも利害勘定的の行爲が無かつたとはいはれぬであらう。又自然直實の行爲に弊害が伴なはぬともいはれないであらう。けれども我が民族の特徵の一面はとにかく此處に在つたやうに思はれる。其の例は遠い昔では須佐之男命、勝ちすさんでは前後を顧みず、皇祖に存分のいたづらして高天の原を震動される、罪さるれば命を畏みて邊土に行かれる、出雲では櫛名田姫の不幸を見て、危險をも顧ず直ぐに八俣の大蛇を退治される、寶劍を得ると之を先に敵なうた天照大神に上られる。行り方がいかにもはき〳〵きび〳〵として直、斷、決の文字そのままのやうではないか。次いでは日本武尊、兄君を搤み批いで手足を引つ闕いて薦に裹んで投げ棄てるといふ亂暴者でありなが

ら、一たび詔を承れば劍に仗り、千里を獨往して東西の兇賊を平らげられた。是等は直きを好む性質が大和民族の心性の基本精髓を成してゐる證據である。

以上は大和時代文學に現れた我が古代民族の持つて居た日本精神に就いての考察であるが、この內容上の特徵の外に、外面的な特徵、卽ち表現、描寫の上からみた古文學の特色は何であるかといふに、それは自然簡樸の一語に盡きると思ふ。

古文學を讀めば我々は子供の言葉を聯想する。子供の言葉は其の思想の樣に單純で、格別な意味も理窟も結構も修飾も無い。しかし其の眞率で無邪氣で作らず飾らぬ所に、一種の言ひ難き簡樸自然の妙味があるのである。古代人は後世に於ては幾十萬といふ夥しい語を用ゐて表す事をば、極めて乏しい語で漠然と言ひ表した。舌足らずの子供が簡單な言葉で自分の考へて居る所を漠然と言ひ表すと同じである。從つて其處には技巧も修飾も何もない。要するに言語の發達の幼稚なのであるが、文學の眼から見ると、その朦朧茫漠たる所に却つて面白味があつて、想像の餘地、含蓄の妙味さへ感ぜられるのである。

要するに大和時代の文學全般の特色は、純粹なる、或は純粹に近い古代日本民族の思想・感情を、自然簡樸なる表現を以て書き表して居る所にあるといふことが出來るのであつて、我々の古文學に對する興味も、日本精神、日本文化の源流である種子的要素をその中から發見するところにあると言はなければならないのである。

第二部　大和時代文學各説

第一章　古事記

(1)　成立

我々は大和時代の文學を二分して、散文の大立物として古事記、韻文の代表作として萬葉集を擧げることが出來るが、萬葉集が自覺的努力に成つた國文學であるに對して、古事記は我が日本民族の間に無意識の中に出來上つた民族的敍事文學である。この中に含まれて居る神話・傳説・説話の成立は極めて古く、それは未だ文字の存在しない時代であつたので、民間の古老や語部によつて久しい間、語り傳へられたのであつた。それが記録發生の時代を經て、奈良朝に入つてから歴史編纂の機運に促されて、元明天皇の御代に初めて文書となつて完成されたのである。

古事記編纂の事情は、太朝臣安萬侶の序文によつて明らかである。

『於レ是、天皇（天武）詔之、朕聞諸家之所レ賫、帝紀及本辭、既違二正實一、多加二虚偽一。當二今之時一不レ改二其失一、未レ經二幾年一其旨欲レ滅。斯乃邦家之經緯王化之鴻基焉。故惟撰二録帝紀一、討二覈舊辭一、削レ偽定レ實、欲レ流二後葉一。時有二舍人一、姓稗田名阿禮。年是二十八、爲人聰明、度レ目誦レ口、拂レ耳勒レ心。卽勅二語阿禮一、令レ誦二習帝皇日繼及先代舊辭一。然運移世異、未レ行二其事一矣。』

この序文に見える帝皇日繼は帝紀ともいつて、皇室の御系譜、皇位繼承の順序を意味するものであり、先代舊辭は本辭又は舊辭ともいつて、上代の神話・傳説・歌謡等を意味するものである。卽ち天武天皇が稗田阿禮に命じて、古記録を誦習せしめられて、一の國史を作られる御計畫であつたのが、御在世の間に完成しなかつたので、更に元明天皇が其の御遺志を繼承せられて、舊辭先紀の錯誤を正して、完全な國史を作らしめられるために、太安萬侶に勅して、稗田阿禮が誦み習つた舊辭を撰録せしめて、獻らしめられたのが古事記である。そして勅命の下つたのが和銅四年九月十八日で、之を獻上したのが和銅五年正月二十八日であつた。

太朝臣安萬侶は神武天皇の皇子神八井耳尊の後裔、多朝臣品治の子で、文武の才を備へ、靈龜二

年氏の長者となり、養老七年に從四位下民部卿で歿した人であるが、彼が當時第一の學者であつたことは古事記の序を見ても明らかに知ることが出來るし、また日本書紀の編纂者の一人であつたことからも想像し得る所である。稗田阿禮に就いてはその傳記が明らかでなく、色々の説があつて、本居宣長は古事記傳に於て男性説をとつて居るが、平田篤胤は古史傳に於て女性説をとつて居る。男とする證の根據は弘仁私記序に「有舍人姓稗田」とあつて、舍人と言へば男らしく且つ國史を編むのは男らしいといふのである。女性説をとるのは、阿禮が新撰姓氏錄によれば天鈿女命の子孫であるからといふのである。この男であるか女であるかは大して重要なことではないが、阿禮に誦せしめたといふのは諳誦せしめたのか、種々の記錄を統一させたのであるかに就いても、また説が分れて居る。從來の史書には、阿禮が久しく誦み習つた舊事傳説を安萬侶が筆記したとして居るが、近時の學者はこれを否定して、阿禮は唯天武天皇が訓まれた古記錄の訓を他に傳へただけで、安萬侶にその訓を讀み聞かせたわけではない。安萬侶は天武天皇のときに整理せられた舊辭を土臺として古事記を編纂したのだとして居る。いづれにしても阿禮が古事記撰錄の資料を供給したことは間違ひなく、その功績は安萬侶と共に沒すべからざるものがある。安萬侶はその材料であるこれ等の舊記をどの程度に修正、補綴したか今は明白でないが、優れた文才を以て、古意・古言を力めてありのままに傳へようと努力したことは古事記によつて推察し得られる所である。

(2) 組織

次に古事記の組織を見ると、序文と本文三卷とより出來て居る。序文は古事記撰錄の由來を述べ、古事記の本質を明らかにしたものである。本文の上卷は神代の卷であつて、神話として、天地開闢に始つて神武天皇御東征の前までに至つて居る。中卷は主として歷史傳説であつて、神武天皇より應神天皇に至る迄、下卷は殆ど全部歷史傳説で、仁德天皇から推古天皇の時代に至る迄である。而して中・下卷には所々に遊離説話が散見して居るのである。

この古事記三卷の中心を貫く主流は、日本建國の事實の提示であつて、古事記が建國文學と稱せられる所以がここに在るのであるが、また傍流としては、政治上のこと、戀の挿話、風俗上の事、各種の傳説等を點綴して居る。これ等は時に脈絡を缺き、前後の連絡が有機的に組み合はされて居ない點もあるが、しかしこれを個々に見ると、それ〴〵特異の色彩、趣致のある物語が多く、古代文化の縮圖たる觀を呈して居るのである。

(3) 梗概・構想

この古事記の文學的價値を説くに當つて、先づ梗概を述べて、その構想を考察すると次の如くである。

天地が創造される最初、高天原に天御中主神、高御產靈神、神御產靈神の三柱の神が現れたが自然に身を隱して了ふ。創造、生成の力を象徴した神々である。次に國土は固定せず海月の如く漂つてゐる時に宇麻志阿斯訶備比古遲神、天之常立神の二神が出現したが、この神たちも自ら身を隱して了ふ。次に神世七代の神々が生まれ、最後に伊邪那岐、伊邪那美の男女二神が現れた。二神は「此の混沌たる世界の上にしつかりした國土を創成せよ」といふ天神の使命を帶びて、天の浮橋の上に立つて、天神より賜はつた天の沼矛を以て滄海を探つたところが、その矛の先から滴り落つる潮は自ら凝つて島となつた。淤能碁呂島が是である。この淤能碁呂島は自ら凝つて形をなした島といふ意味である。二神はこの島に天降つて、初めて夫婦の交を結ばれる。その結果水蛭子と淡島とが生まれたが、女神が先に言葉を發せられた爲に不完全な子であつたので、水蛭子は葦船に入れて流してやつた。そこで今度は男神が先づ唱へて、御婚ひなされて、大八島を初め島々を生み、續いて海川山野木石その他の神々三十五柱を生んだが、伊邪那美神は火之加具土神といふ火の神を生んで火傷せられ神避り給うた。男神は最愛の女神に突然別れたことを悲しみ、妻を死に至らしめたのはこれだと言つて、火の神を十拳劍で一氣に斬り倒した。その際、血が飛び散つて、多くの神々が化成したが、その一人に建御雷之男神がある。

しかし死者は再び甦らない。男神は亡き妻戀しさに堪へかねて、その後を追うて黄泉國に往き、女神を再び現國に連れ歸らうとされる。折柄、女神はそれと知つて男神を出迎へられたが、男神が「お前と一緒に造りあげた國がまだ完成しないから、しかかつた仕事を完成しよう。一緒に現世へ行かうではないか」といふと、女神は既に黄泉國へ來た以上、現世にはかへられぬ、しかし黄泉神に相談してみようとあつて、「其の間私の姿を決して見ないで下さい」と告げて御殿の中へ姿をかくされたのであつた。ところがいくら待つても女神が姿を現されないので、「見ないで下さい」といつた禁を犯して、そつと覗かれると、女神の身には澤山の蛆が涌き、恐しい雷神がとりついてゐた。その有樣に男神は恐れを抱いて現世へ逃げ歸らうと道を急がれた。女神はそれを怒つて、豫母都志許賣なる邪神を遣はして、男神のあとを追はせられたのである。

男神は足の速い豫母都志許賣に何度も追ひつかれさうになつたが、御鬘や櫛の齒をなげつけて、

それから出來た野葡萄や筍に、志許賣が氣をとられて居るうちに漸く逃げのびられた。やつと虎口を逃れた時、女神は尙も黄泉軍や雷神に命じて、男神を捕へようとせられたが、男神は劍を揮つて、群りくる敵を拂ひのけて、幽明の界を異にする黄泉比良坂の麓まで逃げて來られた。そしてそこにあつた桃の實を三つ取つて黄泉軍の方へ投げられた。桃は邪氣を拂ふ作用があるので、その勢に黄泉軍は恐れて退散したのであつた。

そこへ女神が自ら追ひかけて來られて、千曳の石で、黄泉比良坂を塞ぎ、その石を境にして問答の末、男神と女神は離緣することとなつた。女神は尙も怒りをやめず、「貴方が私と緣を切つておいますか」といつた。男神はそれに讓らず、「承知した。それでは自分は千五百人づつ生むことにする」といつて、人類增殖のために盡くすことをほのめかされたのである。

了ひなさるなら、爾後、私は貴方の國の人々を毎日千人づつ取り殺しますが、それでもようござかくて伊邪那岐神は日向の阿波岐原に赴いて、禊祓をして黄泉の穢れを祓はれて、すが〳〵しくなられた。その時身に着けた物を投げ棄てて十二神が化成し、住吉三神その他の神が化成する。そして最後に左眼、右眼、鼻を洗はれると天照大神、月讀命、須佐之男命の三貴子が御生まれになつた。伊邪那岐神は大いに喜ばれて、天照大神には高天原の統治を命じ、月讀命には夜之食國、須佐之男命には海原の統治を命ぜられた。

天照大神と月讀命は、その命を奉ぜられたが、須佐之男命は海原を治めず、八拳髭が胸前に至るまで慟哭し續けられた。その理由を質すと、「私は母神伊邪那美神に逢ひたいのです。海原へは行きたくありませぬ」と言はれた。父神は怒つて須佐之男命を高天原から放逐された。放逐せられた命は姉神天照大神に暇を乞ふために、山川國土を振り動もしながら高天原へ上つて行かれる。その物音に驚かれた天照大神は、弟神に邪心あるを疑つて、男裝して武具に身を固められて、昇天の理由を問はれた。弟神は異心なきことを證するために「宇氣比て子を生む」ことを申し出で、天安河を中に隔ててウケヒをせられた。その結果弟神に二心なきことが明らかになり、高天原に留まることを許された。

しかし須佐之男命は中々溫和しくしてゐられず、そのために天照大神は、一時、その亂暴に呆れて天石屋戸にかくれられた。そこで世界は暗黑となり、あらゆる災が一時に沸き起つたので、八百萬の神々が集つて、天照大神を招き奉る計を凝議し、思兼神の提案に從つて、鷄を多く集めて鳴かせ、賢木に勾玉、鏡、和幣を取り垂らして御幣と爲し、祝詞を禱ぎ白し、手力男神が戸の側に隱れ、天鈿女命が踊り狂つた。その樣を見て八百萬の神達は、高天原も鳴動するばかりに笑ひ

崩れた。大神は不審に思はれて石戸の内からわけを問はれる。鈿女命が「大神よりも貴い神が坐します」と答へ、太玉命が鏡を見せると、大神は愈々不審に思はれて、戸から少し出でました時に手力男神が引き出し奉つた。かくて世界は再び明るくなつた。この事件の結果として須佐之男命は罰を受け、手足の爪を拔かれて、高天原から追放された。

次は挿話であつて、須佐之男命は食物を大氣都比賣神に乞はれた。比賣は鼻・口・尻から種々の珍味を取り出して獻つたので、命は怒つて比賣を殺されると、比賣の體に、蠶・稻種・粟・小豆・麥・大豆が出來た。そこで神御産靈神がこれ等の物を取らせられて種とされた。

茲で舞臺は一轉して、出雲の國の場景が展開する。追放された須佐之男命は出雲の肥河に近い鳥髮に降つた。そこで憂ひに沈んだ老夫婦に逢ふと、彼等は高志の八俣の大蛇が、年々少女を害する話を告げ、今大蛇の犧牲とならうとしてゐる櫛名田比賣のことを涙ながらに話した。勇俠な須佐之男命は、深く美少女と老夫婦を憐み、十分に酒を用意させて大蛇の來るのを待つた。この策略にかかつて大蛇が前後不覺に醉ひつぶれるのを見定めて、十拳劍を拔いて、その呼吸の根を止めた。その折、尾から三種の神器の一である草薙劍を得て、これを天照大神に奉つた。かくて大蛇を退治て櫛名田比賣を助けた須佐之男命は、彼女から戀せられて、比賣を娶り、出雲に定住することとなつた。折柄、空の彼方に雲がむら〳〵と立ちのぼつたので、須佐之男命は、「八雲立つ出雲八重垣つまごみに、八重垣つくるその八重垣を」と歌つた。須賀の宮に新婚の夢を結ばれるうちに、多くの神々が生まれ、その血統を引いて大國主神が生まれた。彼は國土經營に非凡の力量を現し、戰の勝利者、戀の優越者として、その生涯は華やかであつた。

大國主神の事蹟は、先づ戀愛挿話から始る。彼は戀の競爭に打ち勝つたために、兄弟八十神から種々の迫害を受けた。彼等は猪狩に誘つて、燒石で大國主神を火傷させた。大國主の母神が驚き悲しみ、高天原に上つて助命を請ひ、手當をしたので、大國主神は蘇生することが出來た。それを知ると八十神達は、また大國主神を山中に伴なひ、大木の裂け目へ挾み込んだ。母神はまた苦心してその生命を取り止めた。この再度の厄難に懲りた大國主神は、母神の注意によつて根國に、ゐる須佐之男命の許に赴くこととなつた。

根國に行くと、大國主神は須佐之男命の愛娘須勢理比賣と戀に陷ち、やがて結婚したが、大國主神は須佐之男命の恐しい試煉のもとに置かれた。多くの蛇が棲んでゐる土窟や、蜂や蜈蚣のゐる窟に入れられたが、いづれも須勢理比賣の呪によつて救はれた。かうした恐しい試煉が尙も續いたが、大國主神はそこを拔け出さうと決心して、須佐之男命の就寢中、その頭髮を椽毎に結び

付け、すばらしい大石を戸のところに立てかけた後、太刀と矢弓と天沼琴（あめのぬこと）などを持つて妻と共に逃げ出した。しかし天沼琴が樹に當つて、すさまじい音を立てたので、須佐之男命は目を覺まし、髪を解いて、家を引き倒し、二人のあとを追うたのである。

須佐之男命は黃泉比良坂まで來ると、大國主神に呼びかけて「私の言ふことをよく聞け、お前は八十神を征服して國土の神となり、須勢理比賣を正妃として、宇迦（うが）山の麓に宮を建てて住め」と言つた。須佐之男命は大國主神の人物、力量を信じて許したのであつた。それで大國主神は、その命の如く、八十神を追放して宇迦山の麓に新しい宮を建てて國土經營に着手した。

大國主神はその後、稻葉の八上比賣を呼びよせたが、須勢理比賣の嫉妬がはげしく、八上比賣は稻葉に逃げかへつた。しかし大國主神は更に高志（こし）の沼河（ぬなかは）比賣と新しい戀愛關係を結んだ。

其後須勢理比賣の嫉妬が更にひどくなつたので、大國主神は「自分はお前の嫉妬がうるさいから、別れて大和へ行く」といふ長歌を咏んで、出雲を捨てて大和へ出ようと決心した。すると須勢理比賣は「自分は決して良人から離れたくない」と女らしい長歌を咏んでその傍へ寄り添うた。この哀訴に對して、大國主神の心も和らいで、末長く添ひ遂げることとなつた。

この戀愛挿話が終ると、今度は國土經營に關聯した國讓りの話が始る。

當時、天照大神と高御產靈神の詔命を奉じた天菩比神（あめのほひのかみ）、天若日子（あめのわかひこ）は次々に出雲國に降つたが、大國主神の勢力に靡いて、若日子の如きは大國主神の愛娘下照比賣（したてる）を妻として、八年間、高天原へ復命しなかつた。天上では二人の使者がかへらぬので、鳴女（なきめ）と呼ぶ雉を出雲に遣はして、その樣子を探らせた。ところが鳴女を射殺した若日子の矢が、天安之河原（あめのやすのかはら）にゐられる天照大神のもとに達したので、高御產靈神はそれを手に取つて、發矢（はつし）と下界に向けて投げかへすと、矢は忽ち若日子の胸に命中して呼吸が絶えた。

天上では出雲平定について再び會議を開いて、使者として正使建御雷神、副使天鳥船（あめのとりふね）神を任命した。建御雷神は出雲伊那佐の小濱に降つて、劍を波の上に逆さまに立てて、劍尖に坐し、大國主神に「貴方が統治さるゝ葦原中國（あしはらのなかつくに）は、天照大神の御子孫が統治せらるべき所であるが、どう思はれるか」と問うた。大國主神は、その子、事代主神に答辭を述べさせることにしたが、事代主神は「謹んで天孫にこの國土を獻上しませう」と答へた。しかるに同じ大國主神の子の建御名方（たけみなかた）神は國土獻上に極力反對した。そこで建御雷神は、これを科野國（しなぬのくに）の洲羽海（すはのうみ）へ追ひつめた。かくて建御名方神も遂に降參したのである。かくて大國主神は二人の子が國讓りに反對の意志のないのを確めたので、葦原中國を天神に獻ずることに決して、出雲の多藝志の小濱に御舍を造つて隱退

した。

地上が既に平定したので、天孫邇々藝能命が天兒屋根命以下の諸神、五つの部落の首長、五伴緒等を從へて降臨せられることとなつた。その際、天照大神は、邇々藝能命に對して、鏡、勾玉、草薙劍を賜ひ、「この鏡を見ること、わが魂に對するが如くせよ、またわが前にいつきまつる如くせよ」と仰せられた。それから天孫は、「天之石位を離れ、天の八重多那雲を押分け」て、日向の高千穗の久土布流多氣に降臨されたのである。

間もなく邇々藝能命は日向の笠沙の岬に宮を建てて、國土統治の任に當られた。それと共に命と木花佐久夜比賣との戀愛挿話が生まれる。天孫は美しい木花佐久夜比賣をみて、その父大山津見神に所望される。父神は美しい佐久夜比賣に、その姉の醜い石長比賣を副へて奉つた。天孫は醜い姉を返して、美しい佐久夜比賣と一夜婚ひ給うた。然るに比賣はその一夜に孕んだので、天孫は疑はれた。佐久夜比賣は誓によつて身の潔白を證するために、戸無き八尋殿に火を放けて、その中で御產をされたが、火が燃え上つてから消えるまでの間に火照命、火須勢理命、火遠理命の三柱の御子が無事に御生まれになつて、比賣の潔白は證せられた。

末子の火遠理命（日子穗々手見命ともいふ）は山幸彥と呼ばれ、平生山獵を好んでゐたが、ある日、海上で魚を釣らうと思ひたち、海幸彥と呼ばれた兄の火照命の手から强ひて釣鉤を借りて海邊へ出かけた。が、運わるく一尾も釣れず、兄神が大事にしてゐた鉤をもなくしてしまつた。歸つて事情を話して詫びたが、兄神は承知しない。元通りの釣鉤を返すやうにと嚴しく迫つた。火遠理命は止むなく自分の劍を毀して五百本の鉤を作り、兄神の所へ差出したが、元通りの鉤をと承知しないので、思案に餘つて海邊を涙のうちにさまよひ歩いた。その時、鹽椎神が現れて「心配なさるな。これからすぐ海神の宮へいらつしやい。必ず貴方のためによいやうにしてくれるに違ひないから」と敎へて呉れた。

かくて命は海神の宮に着いた。命は清泉のほとりにある青々とした桂樹にのぼり物思ひに沈みながら誰か出てくるであらうと待ちうけた。そこへ海神の娘、豐玉比賣の侍女が玉壺を手にしながら出て來て、何氣なく、水を汲まうとすると、水の上に美しい命の姿が映つてゐたので驚いた。命は侍女に水を乞ひ、頸にかけた珠を解かして口に含みながら玉壺の中へ吐き入れた。珠はどうしてか玉壺に附着して離れない。止むなく侍女はそのまま宮殿にかへつて豐玉比賣に捧げた。比賣は侍女の言葉によつて、珠よりも美しい青年が宮の門近く來てゐるのを知つた。

姫は不思議に思つて自ら門外へ行き、命の姿を仰いだ。命は姫の美に魅せられ、姫も美しい命に

心を寄せ、熱烈な戀が成り立つた。かくて命は姫と結婚して、それから三年の平和な日がすぎた。この間命は歡樂の美酒に醉ふことが出來た。ところが或日、命は、不圖、曾つて紛失した兄神の釣鉤のことを思ひ出して俄に沈んだ樣子になつた。姫は心を痛め、はじめて命から釣鉤の一條をきいた。これを父神に告げると海神は一切の魚族をあつめていろいろ詮議した末、鯛がその釣鉤を呑んで病んでゐるのを知つた。海神はすぐにその鉤をとり寄せ、勇んで命に獻上した。命は初めて蘇生した樣に喜び、愈々上國へ歸ることとなつた。命は海神から鹽盈珠、鹽乾珠を授かり、兄神に復讐して遂に夜晝の守護人とされた。

一方既に身重になつてゐた豐玉比賣は、命を慕うて上國に至り、海邊に鵜の羽で葺いた產屋を造らせたが、屋根をまだ葺き終へないうちに產氣づいた。比賣は夫に本國の形になつて產をするから、產屋の中を覗かないやうにと言つたが、好奇心に驅られた命が、その禁を破つたので、姫は心恥づかしく思つて、子を生み置いたまま海堺を塞いで海宮へかへられた。この御子が鵜鷀草葺不合尊である。この尊と豐玉比賣の妹、玉依比賣との間に出生されたのが、神倭伊波禮毘古尊で、即ち神武天皇であらせられる。

以上が古事記上卷の梗概である。中卷・下卷の梗概はここでは省略するが、中卷に於て注意すべきは神武天皇御東征の御事蹟、それから景行朝の小碓命（日本武尊）の御西征、御東征の條、仲哀朝の神功皇后の新羅御征伐の物語などである。

この梗概を頭に入れて置いて、一篇の敍事文學としての古事記の構想を考察してみると、先づ、その全體を統一づけるものは個人ではなくて、混沌の中から國家が創造され、發展してゆく點がその中心となつて居ることがわかる。國家の發展を中心としてゐるとはいつても、敍事文學の特質たる其の全體の事件を構成させる人物と場所と時間の三要素が備はつてゐるのは勿論であつて、時間からいへば神代及び上代の大部分、人物は神格と人格とがあつて、神格の中では伊邪那岐尊、伊邪那美尊、天照大神、須佐之男命、大國主神の如きが最も中心となる神々であり、人格の中では神武天皇、日本武尊、神功皇后を初め、多くの主なる人物がおいでになる。更に場所からいふと、高天原と出雲、日向、大和が中心をなして居る。そして時間からいつて、神代と人代とは非常な相違があるのであつて、神代は神が主なる行爲者であり、場所も天もしくはそれと交渉を有つて居る。神格と高天原とは人の立場から見ると、超經驗的存在であるから、神代は如何にも神祕的な色調が漂つて居るのである。なほ人代に於ても神武天皇から仲哀天皇の頃までは神祕的情

趣が濃厚であり、神代の性質がまだ殘つて居るのであつて、應神天皇以後になつて餘程現實的となつて居るのであるが、古事記に於ては應神天皇以後は餘り力をこめて扱はれて居ない。從つて古事記には全體に神の精神が貫いて居り、神の信仰が中心となつて居るのである。神の精神は一面から見れば、國家的精神となるのであつて、常に高天原から出發した國家の發展が中心となり、事件の根幹となつて居るのである。

この立場から古事記全體を觀察すると、先づ神代に於ては伊邪那岐、伊邪那美二神の國土や自然や神や人類の創造事件と、天照大神と須佐之男命との交渉事件と、天孫降臨の事件とが三つの中心點となつて居る。その中でも、大神と須佐之男命との交渉は敍事的に見て雄大にして興味ある構想をなして居る。卽ち暴風神たる須佐之男命が高天原に至ると、太陽神たる大神が武裝して而も愛を以て迎へられ、互に誓約をして御子を生まれるが、須佐之男命の亂暴のために大神は姿を隱され、更に岩戸の前の神樂となるが如き、雄大なる背景の下に力と愛、喜びと悲しみとに滿ちた事件を構成して居るのである。

この高天原の二神の葛藤が更に天孫降臨といふ天地にまたがる場面の上に構成される莊嚴なる事件に遷る間に、靜かな肥河の川上に、娘を擁して泣く老夫婦を點出して須佐之男命の大蛇退治となり、更に袋を背負つてとぼとぼと歩かれる大國主神、兄の虐待や須佐之男命の幾度かの試煉に堪へる大國主神を描いて、求婚の事件の苦難や華やかさを示して居るのは物語の展開の上に變化を與へて居る。

天孫の降臨は天地の結合から分離となり、一面には天照大神と須佐之男命との葛藤以來分裂した高天原の神と出雲の神との二つの力の對立が種々の交渉の結果再び統一されたのであつて、神話的展開の頂點を示して居る。

この天孫降臨から神武天皇の御東征に聯絡するのであるが、その間に火遠理命等の海幸山幸の說話等が入つて挿話的興味を與へてゐるのである。

かくて主筋となる莊嚴なる緊張した場面と副事件となる華やかな抒情味のある場面とが互に交渉しながら神代の卷は終つてゐるのである。

次に人代に於ては神武天皇の御東征と日本武尊の四方平定と神功皇后の新羅御征伐とが重要なる敍事的事件となつて居る。そしてここに示されたものは土地の擴大といふ點を通しての力の展開である。この三つの事件には神の力が至る處に現れて超現實的な性質を示しつつ展開するのであつて、一面に英雄傳說的性質を含んで居るが、殊に日本武尊の傳說は描寫も內面的にまで進んで

注意すべきものを含んで居る。併しこれ等に現れた力の展開は神功皇后の時代で一時極點に達して、それ以後は從來の力の擴大を守るに努めてゐるのである。從つてこの政治的武力的發展は一時中止せられて、外來文化をとり入れることによつて、內面的精神的に展開される時代に入るのである。しかしかる點の敍述は古事記には多く力が注がれて居ない。要するに、古事記全體の敍事的構想は混沌の中から國土が創造され、力によつて發展してゆく點を主調として、それが抒情的な愛を主とする事件によつて色づけられて居るところに、その特徴を見ることが出來るのである。

(4) 表　現

次に今迄述べた樣な內容をもつて居る古事記の表現を觀察してみると、その特色として次の諸點を指摘する事が出來る。

第一に表現が具象的である事である。卽ち自分達の環境や感覺を基礎として事物を觀察し表現するのであつて、常に見るもの、絕えず傍にあるもの等を以て譬喩として居る。例へば、天地の未だならざる混沌たる狀を寫すのに、

『國稚く浮脂の如くして、海月なすたゞよへる時に、葦牙の如萌え騰る物に因りて』

と、海國として常に日本人の見て居る海月を以てたとへて居るのである。或は惡神が世に群るのを形容して「さばへなす」といつて居るが、蠅のむらがるのは惡神のむらがるのを想像させたのであらう。是等は實感を現すに極めて適切であるのである。

しかし具象的なものは實感的であると共に、一面には卑近な感じを伴なふものである。卽ちそのために、壯大なるべき國家建設、宇宙の創造が狹小にされて居る感じを一面に與へるのである。

例へば淤能碁呂島建設の敍述は、

『二柱の神天浮橋の上に立して、其沼矛をさし下してかき給へは、鹽こをろ〳〵にかき鳴して引上げ給ふ時に、其矛の末よりしたゝる鹽つもりて島となる。』

とあるが、事件が具象的ではあるが、日常漁夫がなす如き行爲であつて、それを直ちに國土建設にあてはめて表してある所に、國土創成といふ大現象が、やや卑近に見られる憾みがあるのである。

しかし、具象的であつて、實感的であれば、そこに生々とした力を與へるのは當然である。かくして第二には表現の素朴といふことが特色となるのである。古事記は今日の作者が創作する如く、

藝術的意識の下に書かれたのではない。古事記は宇宙創造といふ極めて現實には遠い事象を日常の行爲の如くに描いてゐる。卽ち理想の世界、超經驗の世界を現實化して表現して居るのである。かかる表現は小兒に於て屢々見る所であつて、古事記は純一な童心の文學といひ得るのである。動物が人間と同じ言語を用ゐても怪しまないのは小兒の心情である。この樣な超經驗的事象を經驗的事象として表現する態度は古事記の至る所に見られるのである。國土の建設を解釋するのに、人間の子を出生する經驗的事實を以て說明するのもこれがためである。現實を美化し經驗を超經驗的に表すのが技巧であるならば、かくの如く崇高なるべき世界を、又は超經驗的事實を、日常の世界として表現することは、素朴なる表現といふ事が出來るのである。古事記はこの素朴なる表現を以て記されて居るのである。

次に第三には、古事記の表現には理性的、知的に見れば幾多の矛盾があるといふことである。前にもいつた通り、古事記は藝術的意識のもとに書かれたのではない。構圖とか組織とか釣合ひとかは眼中になかつた。從つて構圖上の手落ちもあるし、釣合ひの取れない所もあるのである。例へば大國主神は須佐之男命の五世の孫になつて居られるのに、一方では須佐之男命の娘須勢理比賣を得んとして須佐之男命より種々の試煉を受けて居られるが如き、それである。しかしかかる部分的の矛盾はあるが、全體に於ては、統一した表現をなして居るのである。

さて最後に第四として、全體からみると事件を敍述するのが主であつて、人物の性格、內面的の描寫には進んで居ない。卽ち描寫といふよりは說話的、敍述的である。之は古事記の如き敍事文學が個人の創作でなくして、民族もしくは國民の創造であるためである。卽ち民族的もしくは國民的な文學である所以はここに在るのである。

以上、古事記の表現の特徵を、具象的、素朴、說話的だとしたが、ここにその例として須佐之男命が、出雲の肥河上で、足名椎、手名椎、櫛名田比賣を救ふ條を次に抄出して置くこととする。

『故避追えて、出雲國の肥河上なる鳥髮の地に降りましき。此の時しも箸其の河より流れ下りき。是に須佐之男命、其の河上に人有りけりと以爲ほして、尋覓ぎ上り往でまししかば、老夫と老女と二人在りて、童女を中に置ゑて泣くなり。汝等は誰ぞと問ひ賜へば、其の老夫僕は國神、大山津見神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂すと答言す。亦汝の哭く由は何ぞと問ひたまへば、我が女は本より八稚女在りき。是に高志の八俣遠呂智なも、年毎に來て喫ふなる。今其れ來ぬ可き時なるが故に泣くと答白言す。其の形は如何にかと問ひたまへば、彼が目は赤加賀智如して、身一つに八頭

八尾有り。亦其の身に蘿また檜榲生ひ、其の長さ谿八谷峽八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に常も血あえ爛れたりと答白す。此に赤加賀知と謂へるは、今の酸漿也。爾速須佐之男命其の老夫に、是汝の女ならば、吾に奉らむやと詔りたまふに、恐けれど御名を覺らずと答白せば、吾は天照大御神の伊呂勢也。故今天より降り坐しつと答詔へたまひき。爾に足名椎手名椎神、然か坐さば恐し、立奉らむと白しき。

爾速須佐之男命、乃ち其の童女を湯津爪櫛に取り成して、御みづらに刺さして、其の足名椎手名椎神に告りたまはく、汝等、八鹽折之酒を釀み、且垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門毎に八つのさずきを結ひ、其のさずき毎に、酒船を置きて、船毎に其の八鹽折酒を盛りて待ちてよとのりたまひき。故告りたまへる隨にして、如此設け備へて待つ時に、其の八俣遠呂智、信に言ひしが如來つ。乃ち船毎に己頭を垂入て、其の酒を飲みき。是に飲み醉ひて、皆伏し寢たり。爾ち速須佐之男命、其の御佩かせる十拳劍を拔きて、其の蛇を切り散りたまひしかば、肥河血に變りて流れき。故其の中尾を切りたまふ時、御刀の刃毀けき。怪しと思ほして、御刀の前以ちて、刺し割きて見そなはししかば、都牟刈の大刀在り。故此の大刀を取らして、異しき物ぞと思ほして、天照大御神に白し上げたまひき。是は草那藝之大刀也。』

(5) 文學的價値

以上、古事記の梗概を述べて、その構想・表現に就いて略述したが、最後に古事記の文學的藝術的價値を考察することとする。

前節の古事記の構想と表現に於て述べた所から自らわかる樣に、先づ第一に、主筋となつて居る英雄的性質と副事件となつて居る情趣的性質とを交錯せしめて、氣分の轉換を行つて藝術的價値を高めて居ること、第二に場面の變化と實感的な表現によつて生々とした感じを全篇に漲らせて居ること、第三に物語は深刻味に乏しいが、その中に常に濕やかな情深い調子を含んで居ること、第四には無邪氣な、愛らしい調子に富んで居ること、等の諸點を擧げることが出來ると思ふ。

本來、古事記の作者は理性的であるよりも、より多く情趣的であり、思索的であるよりも、より多く直觀的であつたために、藝術的に見て、最も成功して居るのは、神代及び人代にかけての各種の戀愛挿話である。これは戀愛心象が作者が最も內部的に立ち入りやすいところであつたためだと思はれる。從つて作者が意識して、技巧に努めなくとも、個々の戀愛挿話はいづれも美しく

纒まつたものとなつて居る。かの「海幸山幸」に於ける火遠理命と海神の女豐玉比賣との戀の情景を次に抄出すると、兄神の釣鉤をなくしたのを悔いて火遠理命が海邊を歩いてゐるところへ鹽椎神が現れて、命の話をきいて海神の宮へ行けと敎へる。

『爾に鹽椎神、我汝が命の爲に、善き議作むと云ひて、卽ち无間勝間之小船を造りて、其の船に載せまつりて、敎曰へけらく、我其の船を押し流さば、差暫し往でませ。味御路有らむ。乃ち其の道に乘りて往ましなば、魚鱗の如造れる宮室、其綿津見神の宮也。其の神の御門に到りましなば、傍なる井の上に、湯津香木有らむ。故其の木の上に坐しまさば、其の海神の女、見て相議らむ者ぞとをしへまつりき。

故敎へし隨、小し行でましけるに、備に其の言の如くなりしかば、卽ち其の香木に登りて坐しましき。爾に海神の女、豐玉毘賣の從婢、玉器を持ちて、水酌まむとする時に、井に光有り。仰ぎて見れば、麗しき壯夫有り。甚と異奇しと以爲ひき。爾火遠理命、其の婢を見たまひて、水を得しめよと乞ひたまふ。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れて貢進りき。爾に水をば飲みたまはずして、御頸の璵を解かして、口に含みて、其の玉器に唾入れたまひき。是に其の璵い、器に著きて、婢璵を得離たず。故璵著けながら、豐玉毘賣命に進りき。爾其の璵を見て、婢に、若し門の外に人有りやと問曰ひたまへば、我が井の上の香木の上に人坐す。甚と麗しき壯夫にます。我が王にも益りて、甚と貴し。故其の人、水を乞はせる故に、奉りしかば、水をば飲まさずて、此の璵をなも唾入れたまへる。是得離たぬ故に、入れながら將來て獻りぬと答白しき。爾豐玉毘賣命、奇しと思ほして、出で見て、乃ち見感でて、目合爲て、其の父に、吾が門に麗しき人いますと白曰したまひき。爾に海神自ら出で見て、此の人は、天津日高の御子、虛空津日高にませりと云ひて、卽ち內に率て入れまつりて、美智皮の疊八重を敷き、亦絁疊八重を、其の上に敷きて、其の上に坐せまつりて、百取の机代の物を具へて、御饗爲て、卽ち其の女豐玉毘賣を婚はせまつりき。故三年といふまで、其の國に住みたまひき。』

素朴な描寫のうちに、如何にも情趣に溢れて居るのである。

次にもう一つ、古事記の文學的價値としてあげなければならないのは、當時の歌謠を巧みに人物及び事件に結びつけて居ることである。古事記には百十餘首の歌謠が入つて居るが、古事記に於ける物語と歌謠とは、渾然、一體をなして居るのである。物語は歌謠によつて情趣餘情を加へ、歌謠は物語によつて有力な背景を得て居る。この二つが相俟つて古事記の藝術的價値を高めて居

るのである。殊に藝術的に最も成功して居る戀愛挿話に於て、その情景を助ける上に最も役立つてゐるのが歌謡であつて、その點から、古事記は一種の歌物語だともいひ得るのである。

例へば大國主神と沼河比賣との戀、須勢理比賣が大國主神の怒りを解いたときの愛、輕太子と輕大郎女の戀なども皆歌謡が主となつて居るのである。須勢理比賣とその執拗な嫉妬を怒つて大和へ出立しようとする大國主神との條を抄出してみると、

『又其の神の嫡后須勢理毘賣命、甚く嫉妬爲たまひき。故其の日子遲神わびて、出雲より、倭國に上り坐さむとして、束裝し立たす時に、片御手は、御馬の鞍に繫け、片御足其の御鐙に蹈み入れて、歌曰ひたまはく、

ぬばたまの　くろきみ衣を　まつぶさにとりよそひ　おきつとり　胸みるとき　は
たたぎも　これはふさはず　邊つなみ　磯にぬぎ棄て　鴟鳥の　あをきみ衣を　ま
つぶさに　とりよそひ　おきつとり　胸みるとき　はたたぎも　こもふさはず　邊
つなみ　磯にぬぎ棄て　やまがたに　求ぎし　茜つき　染木がしるに　染めころも
を　まつぶさに　とりよそひ　おきつとり　胸みるとき　はたたぎも　此しよろし
いとこやの　いものみこと　むらとりの　わがむれ往なば　ひけとりの　わがひけ往なば　なかじとは　なはいふとも　山處の　ひともとすすき　項傾し　ながなかさまく　あさあめの　さぎりに　たたむぞ　わかくさの　つまのみこと　ことのかたりごとも　こをば

爾に其の后、大御酒坏を取らして、立ち依り指擧げて、歌曰ひたまはく、

八千矛の　神の命や　あが大國　主こそは　男にいませば　うちみる　しまの崎崎
かきみる　いその崎おちず　わかくさの　つまもたせらめ　あはもよ　女にしあ
れば　汝を除て　夫はなし　汝を除て　夫はなし　あやかきの　ふはやがしたに
蒸しぶすま　にこやがしたに　栲ぶすま　さやぐがしたに　あわゆきの　弱るむね
を　栲綱の　しろき腕　そだたき　たたきまながり　眞玉手　玉手さしまき　股な
がに　寢をしなせ　豐御酒　たてまつらせ

如此歌ひて、即ちうきゆひ爲て、うながけりて、今に至るまで鎭り坐す。此を神語と謂ふ。』

さながら一篇の歌物語を讀む感じである。古事記に於て歌謡が如何に重要な役割をして居るかがわかることと思ふ。

以上古事記の文學的價値を考察したのであるが、最後に觀點を變へれば、この書は上代に於ける最も重要なる文獻の一つである。卽ち古代國語の寶庫であり、神話・說話・傳說に富み、精靈及び神の信仰、祭神の儀式、生死に關する儀式慣習、禁忌・呪術・宇氣比・卜占・神夢・神託・探湯・拂淨等の宗敎的信仰儀式を豐富に示し、同時に歷史的事實を多分に含有してゐるもので、實に古代に於ける國民生活を活寫したものである。從つてその眞價を明らかにするには、文學作品としての研究は勿論、言語・神話・宗敎・土俗・歷史・社會・民族心理學等の各方面よりの檢討を俟つて、初めて出來得るといはなければならない。

第二章　祝　詞

(1)　敍事的抒情文學

大和時代に於ける敍事文學と抒情文學の雄を、それぞれ古事記と萬葉集とすれば、祝詞は敍事的抒情文學とも稱すべき文學である。敍事文學は事件を中心とし、その說話的敍述を中心として居る點に於て客觀的であるが、この事件の敍述を作品の主要成分としながら、作品の成立の動機に主觀的抒情的性質を中心とする文學を、敍事的抒情文學とする。かういふ文學は敍事文學の如く「彼」の敍述でなく、抒情文學の樣に「我」の告白でなくて、我と汝との對話の形態をとるのである。祝詞は「のりと」であつて、この「のる」といふ言葉は單に「のる」の意でなく、願望もしくは意志をも示して居る。語ることは客觀的敍事的であり、願望は主觀的抒情的である。我が古代民族の間には言葉に靈力があるといふ信仰があつた。これを言靈信仰といふのであるが、

言葉の靈力は人間の吉凶禍福を支配するもので、慶き詞はその靈力によつて人間を幸福に導き、凶しき詞はこれに反し人間を不幸に陷れ得るものと信じてゐた。彼の古事記に於て、黄泉國の伊邪那美神が一日に千人殺さうと言はれたのに對して、伊邪那岐神は日に千五百人づつ生まうと言はれた言葉は生死の現象を決定的に定めたものである。言葉に絶對の威力があるのは、言葉は神の意志表現であると信ぜられるからである。

かくの如く祝詞は言葉に絶對の威力があるといふ信仰の上に生み出されて、神と人間との間の意志傳達をする表現となつたのである。而してそれは他を豫想せずに思はず表現されるといふのでなく、自己の意志を、他を意識的に表現して、それによつて意志の實現を望むために、單なる主觀文學とならずに客觀的主觀文學となり、單純な抒情文學とならずに敍事的抒情文學となるのである。

祝詞の敍事的抒情文學としての性質は、またその組織の上からも見ることが出來る。典型的な祝詞の形式としては主なる部分が二つに別れ、それに序と結びとが附加されて居る。その本文を檢すると、初めの部分は祝詞の奏せられる神を主として其の神の御事蹟、又は大祓の如きに於ては大祓の行はれる理由に就いて敍事的客觀的に敍述して居る。たとへば鎭火祭に於ては伊邪那美神が火神を産まれてかくれられる神話的事件を語つて居るが如きである。そして後半はかくの如き功績ある神に對して之を祝福し、もしくは願望を表示するのである。

而して前半は祝詞の本體からみれば副の部分であるが、ここに建國の由來を語り、罪惡の根源を說くなど文學的にすぐれた部分である。後半は祝詞としては主要なる中心であるが文學的效果は却つて前半より劣るのである。しかしこの兩部分が相俟つてそれに序と結びとが加はつて組織されてゐる所に、祝詞の敍事的抒情文學の性質を見ることが出來るのである。

(2)　現存する祝詞

前節に於て述べた祝詞の敍事的抒情文學の性質に就いての考察によつて、祝詞成立の由來は自ら判明するのであるが、現存する祝詞は、その成立年代は賀茂眞淵、本居宣長、六人部是香等によつて種々論議されたが依然として不明である。今日國文學の對象として論ぜられるものは「延喜式」第八卷所收の廿七篇を主として、これに中臣壽詞（藤原賴長「臺記別記」）、室壽詞（日本書紀、顯宗紀）の二篇を合はせた廿九篇である。

延喜式は延喜五年に左大臣藤原忠平の撰進した百官政務の施行細則で、五十卷より成つてをり、

最初の十卷は神祇に關するもので、第八卷に祝詞が收められて居るのである。しかしここに收められたものは原始的な形態のままのものではないと思はれる。

祝詞がいつの頃から出來たか。それが極めて古い年代だといふことは、彼の天石屋戸の神話に天兒屋根命が布刀詔戸言を奏したことが見え、また國讓りの神話に火鑽詞を白したことが見えてゐることによつて知られる。我が古代民族は前述せる言靈信仰によつて最も善良なる言葉を神前に用ゐるに及んで、漸次祝詞として發達して來たものであらうが、集團的に祭祀を營むに當つて祖先神を祭り、中央集權が確立して國家的祭祀を營むに當つて、皇室の長久、國家の安泰、國民の福祉を祈り、又は御代の長久を壽ぎ謝する等、長年月の間に發達して現存の祝詞にまで發達したものであらうと考へられる。

(3)　分類・思想・表現

祝詞を分類すると大凡五種に分けられる。

一、農祭に關するもの
二、皇居・百官の安穩長久を祈るもの
三、御代の長久繁榮を祝福するもの
四、伊勢神宮の祭祀に關するもの
五、外戚の祖神を祭るもの

この中、農祭に關するものには、豐年を祈るための「祈年祭」、稻の成長を祈禱するための「月次祭」、天災や風雨のないやうに祈る「廣瀨大忌祭」「龍田風神祭」、穀物の成熟を祈り神祇に感謝する「大嘗祭」等。皇居・百官の安穩長久を祈るものには、天皇の宮殿の安泰を祈る「大殿祭」「御門祭」「鎭火祭」、惡靈妖氣を驅逐して宮中の平安を祈る「遷却崇神」「道饗祭」、玉體の安泰、長久を祈る「鎭御魂齋戸祭」、皇族群臣百僚以下の罪穢を祓ひ去つて恙なく奉公し奉ることを祈請する「大祓」等。御代の長久繁榮を祈るものには「中臣壽詞」「出雲國造神賀詞」等。伊勢神宮に關するものには「伊勢神宮」「豐受宮」等九篇。外戚の祖神を祭るものには「春日祭」「平野祭」「久度古開」等、いづれも皇室の繁榮と百官の平安を祈る比較的新しい製作になるものである。

從つて是等のものから祝詞に現れた思想も自ら推定することが出來る。即ち國家的祖先神の加護によつて現實生活の中から罪、穢、災等の人間生活の幸福を脅かす根源を消滅させ、清淨幸福な世界を造り出さうとする思想、もう一つは農作を豐かにして日常生活の福祉を增進せしめ、天皇、

群臣、一般國民の平安、御代の長久を祈願祝福しようとする日本固有の思想が主體となつて居るのである。かういふ思想を素朴眞摯な心情を以て、善言美辭を連ねて藝術的、宗教的に表現したのが祝詞である。

祝詞の內容は神に奏上する言葉であるから、その表現は莊重でなければならない。從つて祝詞の表現技巧の特質は第一に莊重なる格調美の現れて居る事である。莊嚴もしくは莊重は偉大なるものに對して起る感情である。祝詞が莊重の感を有するのは、第一に、神の前でとなへられ、神を中心として作られる文學だからである。更に第二に、表現が抽象的である事も、莊重の感をます原因である。祝詞の文は概念的であり實感に乏しいが、是等の冗漫な實感の乏しい文を讀む時、一種の氣分が作られる。何となく莊重な超現實的な氣分が作られるのである。更に第三に、極めてよく統一された形式、即ち祝詞の技巧も、莊重な格調を與へるに役立つて居る。祝詞の組織が神話的敍述の部分と願望を表した部分とからなり、それに序結が加はつてゐることは前述したが、渾然と統一せられた所に形式美を感じさせる。また部分的にも繰り返しと對句等の技巧が整然と行はれてゐるのである。

この様に祝詞は雄渾莊重なる格調を添へ森嚴崇高なる氣分を横溢せしめる如き表現による特色ある文章を成して居るのであるが、之が神主によつて唱へられる時、一方には素樸な民謠的神樂が奏せられ、ここに神社と神樂と祝詞とが一體となつて上代の神社藝術が出來上るのである。

(4)「大祓詞」

最後に祝詞の中で、最も文學的價値の高いと思はれる「大祓詞」を擧げることとする。

六月晦大祓

集待はれる親王、諸王、諸臣、官百人等諸、聞食せと宣る。天皇が朝廷に仕へまつる、比禮掛くる伴男、手繦掛くる伴男、靫負ふ伴男、劍佩く伴男、伴男の八十伴男を始めて、官々に仕へまつる人等の過ち犯しけむ雜々の罪を、今年の六月の晦の大祓に、祓ひ給ひ淸め給ふ事を、諸聞食せと宣る。

略解　○集待はれる　集り侍るの古言。○諸王「オホキミ」は、もと天皇を初め奉り皇子諸王にもわたる稱であつたが、ここにては親王に對して王のことをいふ。○比禮掛くる伴男　領巾は女の掛けるもの、伴男は共に借字で、「トモ」は部即ち一群の仲間の事、「ヲ」は長である。即ち全體で、領巾をかけて大宮に仕ふる女官と云ふ意で、此處では專ら御膳をまか

なふ采女をいふ。○手襷掛くる伴男　襷をかけて御膳部をまかなふ役人。○靫負ふ伴男、劍佩く伴男　武器を持つて君を護り國を守る武官。○伴男の八十伴男　文官連中、武官連中、式部職、膳部職といふ樣に澤山の役々の人達の一切。

大意　此處に參集された親王、諸王を初め百官の方々聞召せ。朝廷に仕へまつる百官諸有司等の過ち犯した種々の罪を祓ひ淸めむが爲に、今日只今より朝廷に於て大祓の式の御催しがある所、方々謹んで承られよ。これまでが大祓の文の序、次からが本文。

高天の原に神留ります、皇が親神漏岐神漏美の命以て、八百萬の神等を神集へ集へ給ひ、神議り議り給ひて、我が皇御孫の命は、豐葦原の水穗の國を、安國と平らけく知ろしめせと、事依さし奉りき。」かく依さし奉りし國中に荒ぶる神等をば、神問はしに問はし給ひ、神掃ひに掃ひ給ひて、語問ひし磐根樹立、草の垣葉をも、語止めて、天の磐座放し、天の八重雲を、伊頭の千別きに千別きて、天降し、依さし奉りき。」かく依さし奉りし四方の國中と、大倭日高見之國を、安國と定め奉りて、下つ磐根に、宮柱太敷立て、高天の原に、千木高知りて、皇御孫の命の、美頭の御舍仕へ奉りて、天の御蔭日の御蔭と隱り坐して、安國と平らけく知ろしめさむ國中に、成り出でむ天の益人等が、過ち犯しけむ雜々の罪事は、天津罪とは畔放ち、溝埋め、樋放ち、頻蒔、串刺、生剝、逆剝、屎戸、こゝだくの罪を、天つ罪と宣り別けて、國つ罪とは、生膚斷ち、死膚斷ち、白人、胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆蟲の災、高津神の災、高津鳥の災、畜仆し、蠱物せる罪、こゝだくの罪出でむ。かく出でば、天津宮事以て、大中臣、天津金木を、本打切り、末打斷ちて、千座の置座に、置き足らはして、天津菅曾を、本刈り斷ち、末刈り切りて、八針に取り辟きて、天つ祝詞の太祝詞事を宣れ。」かく宣らば、天つ神は天の磐門を推し披きて、天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて聞食さむ、國つ神は、高山の末、短山の末に上り坐して、高山の伊穗理短山の伊穗理を搔き別けて、聞食さむ。」かく聞食してば、皇御孫の命の朝廷を始めて、天の下四方の國には、罪と云ふ罪は在らじと、科戸の風の、天の八重雲を、吹き放つ事の如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津邊に居る大船を舳解き放ち、艫解き放ちて、大海の原に押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌以て、打ち掃ふ事の如く、遺る罪はあらじと、祓ひ給ひ淸め給ふ事を、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ、速川の瀨に坐す、瀨織津姫と云ふ神、大海の原に持ち出でなむ。」かく持ち

出でなば、荒鹽の鹽の八百道の、八鹽道の鹽の八百會に坐す、速開都姫と云ふ神、持ちかか呑みてむ。」かくかゝ呑みてば、氣吹戸に坐す、氣吹戸主と云ふ神、根の國底の國に、氣吹き放ちてむ。」かく氣吹き放ちてば、根の國底の國に坐す、速佐須良姫と云ふ神、持ちさすらひ失ひてむ。」かく失ひてば、天皇が朝廷に仕へ奉る、官〻官の人等を始めて、天の下四方には、今日より始めて、罪と云ふ罪は在らじと、高天の原に耳振り立て聞く物と、馬牽き立てゝ、今年の六月の晦日の、夕日の降の大祓に、祓ひ給ひ清め給ふ事を諸〻聞食せと宣る。」四國の卜部等、大川道に持ち退り出て、祓ひ却れと宣る。

略解　高天の原に神留り坐す　「ヅマリ」は留まるの意、神は崇めたる添詞。○皇　親神漏岐云々　「カムロギ」は高天の原に坐す皇祖の男神、「カムロミ」は皇祖の女神、即ち天皇の親しみ尊み給ふ在天男女の皇祖の神々といふ意。命は借字、御言にて、仰せの意。○我が皇御孫の命　「我が」は男女の皇祖の神、皇御孫は日本國に天降らせられた邇々藝命。○豐葦原の水穗國　土地肥えて草木豐かに生ひ、穀物のみづ〻しく實る國。○國中　國のうち。○荒ぶる　皇命に從はずして亂暴する。○神問はし、神掃ひ　祖神の威光を以て責めただし掃ひ退くること。「問はし」は「問ひ」の延音。○語問ひし磐根樹立　岩石や木の杠のがや〻と物言うて騒がしかつた事。○草の垣葉をも語止めて　垣は借字、片葉といふ程の意、ただ一枚の葉も騒がぬやうになつたといふ事。○天の磐座放し　高天原の住居、座席を離れしめ、天を辭して天降らしむる意。○伊頭の千別　威勢よくかき別けて。○大倭日高見國　今の大和國のこと。日高見國につき、眞淵は、天つ日の空の眞中にあるを日高しといふといひ、宣長は山遠くして打ちはれて平らに廣き地をいふといふ。とにかく見晴らしよき高燥なる地といふことであらう。○下つ磐根…千木高知りて　神武以來大和國に敷き坐せる大宮をいふ。千木は風を防ぐ木、今の神社に見るやうな棟の兩端に長くさし出でて屋根の押へとなるもの。○美頭の御舍　美頭はみづ〻しい、艶ある、美はしい。御舍は御ありか、御殿。○天の御蔭云々　その立派な御殿を天の守護する蔭として、其の中に坐すこと。○天の益人　人口の年々に益すよりいふ。年々殖える數多の國民といふ意。○天津罪と　須佐之男命の天にて犯し給うた罪なる故にいふとぞ。「と」は「とは」なりと眞淵はいひ、宣長は「とて」なりと改めたが、「とは」の方がよいかと思ふ。○樋放　田に水を導く爲の設けを取り放ちていたづらすること。○頻蒔　種子を蒔きたる上に重ねて蒔くこと。○串刺　田の泥の中に串を刺しおく事。○生剝逆剝　生剝は獸の皮を生きながら剝ぐこと、逆剝は生きながら逆さまに剝ぐこと。○屎戸　室にて糞をすること。○こゝだくの　夥しい。○國つ罪　天つ罪に對して、まだ天にて、犯されしことなき罪をいふ。○生膚斷死膚斷　生きた人に傷つ

ける罪、死屍に傷つける罪。○白人、胡久美　白人は白膚俗にいふ白子、胡久美は贅肉、瘡や下り肉などをいふ。○母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪　前なるは先づ母に關係し、次いで其の母の女を犯すこと、後なるはまづ女に關係し、後に其の女の母を犯すこと。○昆蟲の災　蟲類の害を蒙ること。蜂、蝮などの害の類。かやうな災をも昔は罪、穢と見た。○高つ神の災　空なる神、例へば雷などの災。○高つ鳥の災　鳥より蒙る災。○畜仆し　家畜を殺すこと。○蠱物せる罪　まじなひすること、人を呪ふ類をいふ。○天津宮事　高天の原なる天照大御神の朝廷にて行はるる儀式に倣うての意。○大中臣　天兒屋根命より始めて神事を掌る官を「ナカトミ」(中臣)といふ。神と君との間を取り持つ意で、眞淵は「中つ臣」の約まつたのだといひ、宣長は「中取臣」の約まつたのだというて居る。大の字をつけたのは、大君の事に與るための尊稱。此の役をば中臣氏の者が承ることになつて居る。○天つ金木　天つは美稱、金木は握之木の意で、手につかみ得る程の木の事。其の本末を切り、中程の好い所を供ふるの意。○千座の置座に置き足らはす　供物臺として十二分に供ふること。○天津菅曾云々　菅の緒の意。菅の本末を斷ち切つて、中程の處を針で細かに裂いて、それを取り持つて祓ひ清むること。八針はいやはり針、數針、即ち細かに裂く事。○短山　低き山の意。古言。○伊穂理　雲霧の類をいふ。氣膨或は五百霧の略といふ。○科戸の風　風の事を面白く云ひ做したもの、或は神代の風の神級長戸邊命の名より來るといひ、或は「シナト」は元來風の事にて、それを神の名として附けたのかも知れぬと云ふ。○燒鎌の敏鎌　ただ鋭き鎌といふ意。鎌は燒きて鍛ふる故に、しかいうて調子をなしたのである。○さくなだり「さ」は眞に同じく、眞下垂の意だといふ。或は俗にいふ「シャクル」と同じく、斜なる所を勢よく走り下る意といふ説もある。○落ちたぎつ速川　落沸つ。たぎり落つる急流の意。○荒鹽の鹽の云々　大海の沖なる潮流の八方より流れ來り、勢猛にぶつかり會うて旋廻する所に居る神。○かゝ呑む　がぶ〳〵と呑むといふ事。海の底に渦き入るる事の形容。○氣吹戸　氣吹戸主神が諸々の罪穢を息吹き放つ處の限りをいふ。○さすらひ失ひてむ　投りすてて了ふ。○高天の原に耳振り立て聞く物と馬牽き立てゝ　眞淵は馬は耳疾き獸なるゆゑに、天つ神國つ神が祓の詞を聞こしめすにたとへて被物とするなりといつて居る。高天の原は祓の式を行ふ場所をいうたので「牽き立て」にかかる。高天の原の神々に聞えよといふのではない。○夕日の降の　ただ夕方のといふこと。「朝に」といふことを「朝日の豐榮登に」といふと同じ文飾。○四國の卜部云々　此の一節は後世の書き加へだといふことである。卜部は解除の事を掌る職で、伊豆・壹岐・對馬及び京都の四箇處より取る故に四國といふ。

大意　天孫降臨の後もなほ高天の原に留まらせらるる男神女神の皇祖だちの仰せにより、八百萬の神々を召集され、神議の結果、豐葦原の水穂の國（日本）を治むることをば、皇孫に御託しに相成つた。」それに就いて、まづ豐葦原の横道者を掃蕩する必要が起り、皇命に從

はぬ亂暴な神々をば、一々詰問して追ひ拂ひ、草木の一葉だも騷がぬやうに平穩になつた所を見すまして、いよ〳〵雲霧を排いて、皇孫を天降らしめられた。さてかく皇祖の神々より賜はつた國のうちで、大和の國をば上もなき目出度き國と見定めて、莊嚴なる大宮を營み、其の內に坐して平らかに治めさせらるる、國の中には國民が年々に殖えて行く。其の國民が過つて犯す罪を大きく分ければ天つ罪と國つ罪との二いろ、雙方の罪共に夥しく現れ出づるであらう。」かく夥しい罪が現れ出でた場合には、高天の原の御儀式に從ひ、大中臣が、種々の供物を豐かに供へ奉り、目出たき祝詞を朗らかに讀み上げる。」かく讀み上げれば、高天の原に坐す天つ神は、天の岩戸を開き重疊せる雲霧を排して聞かれるであらう、國つ神は高い低いあらゆる山々に上つて煙霞をかき別けて聞かれるであらう。」かく聞かるれば、皇御孫の朝廷を初め、天下全國に一切の罪が無くなるであらう。其の無くなる趣は、疾風の雲霧を吹き掃ふ如く、大船を大海原に押し放つ如く、鋭き鎌もて繁木を刈り掃ふ如く、一切の罪を祓ひ清めさせらるる。」かく掃ひ退くる罪穢をば、山よりたぎり落つる急流の瀨に坐す瀨織津姫といふ神が、大海に持ち出でられるであらう。」かく持ち出づれば、大海の沖の潮流旋廻の眞中に居る速開都姫といふ神が、がぶ〳〵と奇麗に呑み込んで了ふであらう。」かく呑み込めば、風の通ひ路に居る氣吹戸主といふ神が、地の底の根の國に吹き放つてやるであらう。」かく吹き放てば、根の國に居る速佐須良姫といふ神―直樣放り散らす、といふ事を名に負うた神―が、最後にそれをうけ取つて、放り散らして影も形も全く亡くして了ふであらう。」かく放り散らして了へば、朝廷に仕ふる諸官吏を初めとして、天下四方には罪といふ罪が一切無くなるであらうと、讀み上ぐる聲の隈なく聞ゆるよすがに、耳疾き馬を引き立てて、今月今日の夕景に祓ひ清めさせられる事を、參集の方々一同聞食せと宣る。

古來の大和民族が如何に穢れを忌み、清淨さを欲したか、如何に現實的、向上的、活動的であつたかは、此の一篇が實によく物語つて居ると思ふ。

文章は古事記の自然的なるに對して、是は當時の人の技巧の限りを盡くしたものであることは、前節「表現」に於て既に述べたところである。全體を通じて、雅麗にして而も莊嚴なる調子があり、大和民族の抱負を遺憾なくあらはして居る。現存する祝詞の中で最も文學的價値の高いものである。

第三章　萬葉集

(1)　成立

萬葉集は大和時代に於ける代表的抒情文學である。この時代の文學は、萬葉以前は、散文はいふに及ばず、歌といつてもただ興に乘つて情を抒べたものにすぎなかつた。藝術品と意識して骨折つて作つたものは殆どなかつたのであるが、萬葉集に至つて、初めて自覺的努力によつて成つた國文學が出て來たのである。我が抒情文學は古事記、日本書紀に見える歌から端を發してゐるのであるが、萬葉集に至つて抒情詩として行くべき極點に達したといふ事が出來る。

萬葉集の成立に關する文獻としては、古今集の卷十八に、

『貞觀の御時、「萬葉集」はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければよみ奉りける。

神無月時雨ふりおけるならの葉の名に負ふ宮のふるごとぞこれ。』

と見えてゐるし、又古今集の序には、

『昔平城天子、詔二侍臣一令レ撰二萬葉集一。自レ爾以來時歴二十代一、數過二百年一。』（眞名序）

『かの御時よりこの方、年は百年あまり、世は十つぎになむなりける。』（假名序）

とある。

神無月云々の歌は清和天皇の御質問に文屋有季の對へ奉つた歌であるからして、萬葉集は清和天皇の頃にはその成立年代が不明となつてゐたものと思はれるのである。そして又、平城天子の御代に成立したといふ古今集の序も、平城天子とは何天皇であらせられるか不明である。俊成、仙覺等は聖武天皇であらせられるといひ、顯昭は平城天皇であらせられるといひ、清輔は桓武天皇であらせられるとしてゐる。又榮花物語には孝謙天皇であるといつてゐる。これに就いては江戸時代に於ても盛に論議されてゐるが、今日尙不明である。しかし、萬葉集の歌は淳仁天皇の天平寶字三年正月の歌までであるから、ほぼ成立したのは稱德天皇の頃であり、更に平安時代に至るまで改定を加へられて現存の形になつたものと思はれる。

また萬葉集の撰者についても古來幾多の説があつて、山上憶良説、藤原眞楯説、橘諸兄説、大伴家持説、諸兄家持共撰説等がある。是等の中、榮花物語に見えてゐる諸兄が勅命によつて撰んだといふ説が從來行はれてゐたのであるが、平安時代末期の清輔の袋草紙や定家等から家持の私撰

説が行はれ、仙覺は諸兄、家持共撰説をとなへたのであつた。しかるに元祿時代に入つて契沖が萬葉集代匠記に於て、多くの證據を擧げて家持の獨撰にかかるもので、而も私撰であると唱へてから多くの學者は之に據つた。この間に荷田春滿は諸兄の撰に家持の集の混じたものとし、眞淵もこの説に贊して萬葉集に新古二部ありとなした。宣長も大伴家持の二度に撰したものであると全部卷々之考に於て述べて居る。かくて撰者に關しては現在に於ても大伴家持が撰定の上に主に力を注いだことは大體認められて居るが、卷一・二の勅撰説も提出されて居り、必ずしも一人の撰とすることは出來ない。

要するに萬葉集の撰者及び年代に就いてはなほ考察の餘地があるのである。

(2) 組織

萬葉集は二十卷より成つて居るが、その中には仁德天皇の頃より淳仁天皇の天平寶字三年正月元日の歌に至る迄、約四百五十年間に亙る四千四百九十六首の歌を含む大歌集である。この歌數は數へ方によつて相違するが、これは鹿持雅澄（かぢのまさすみ）の萬葉集古義に據つたのである。このうち長歌は二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首である。

作者の上より見れば、上は天皇・皇后・皇太子・皇子・皇女の尊貴より下は庶民から遊女や乞食の下賤に至る迄、凡ゆる有名無名の歌人を含んで居る。而して男子は五百六十一人、女子は七十人である。

しかし實際に於ては孝德天皇の頃より淳仁天皇の頃に至る約百年間の歌が最も多く、大化以前の歌は極めて少數である。また歌人も大部分は宮廷を中心とする大宮人であるから、この意味に於ては、大和時代後期の貴族的和歌集といふことが出來る。但し、他面、極めて庶民的で、階級思想の對立も、上下の差別もなく、すぐれた歌人の作品は力めてひろく網羅しようとしたあとが見えるので、その點、萬葉は眞の國民的歌集だといひ得る。

萬葉集には長歌、短歌、旋頭歌の三つの形體があることは、前に述べたが、後世に於ては長歌は衰へて古今集にも數首見えるだけであり、その他の歌集にも餘り見る事を得ないが、萬葉集には二百六十二首もあり、かつ後世に亡びた旋頭歌が六十一首あるといふ事は、その形式に於て萬葉集の變化に富む所以でもあり、同時に萬葉以後の歌界の趨勢を暗示するものである。この三つの形體は三體と稱して形式上の分類であるが、內容上の分類をみると、雜歌、相聞、挽歌、譬喩歌、四季雜歌、四季相聞の六部に分れて居る。この分類は大體卷十六まで行はれてゐるが、粗雜で精

細には行はれてゐない。しかし古今集以後は四季、戀、哀傷、羇旅、祝賀、雜などに分れたが、これは萬葉集の分類に暗示を得て居る事は明らかである。

其他卷一・二は組織が整然として最も古く、卷五は山上憶良に關係深く、卷九・十六には傳説歌が多く、卷十四は東歌が採錄され、卷二十には防人歌が含まれ、卷十七より二十までは家持關係の歌が大部分を占めて居る。

(3) 用字法

萬葉集に就いて更に注意すべきは、その用字法である。萬葉集は未だ假名の發明を見ない時代の作品であるから、專ら漢字を以て音を表すのであつて、所謂萬葉假名と稱せられる獨得の表現法を用ゐたものである。

即ち音を表すものと訓を表すものと、更にその他のものとがあるが、音を表すものにも、電を伊加豆知と表す「正音」と、安印をアイと訓ずる樣な「略音」とがあり、訓を表すものにも天地をアメツチと訓ずる如き「正訓」と、清明をアキラケクと訓ずる如き「義訓」とがある。更に荒磯をアリソと訓ずる如き「約訓」、蟻で在を表す如き「借訓」もある。更に又「山上復有山」としてイヅ（出）と訓じ、「馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿」をイブセクモアルカと訓ずる如き「戯訓」もある。

是等の種々な使用法によつて表現する所に種々な不便もあつたと想像せられるのである。

從つて後世に至つて萬葉集は難訓の個所を生じて讀み難いものとなつた。それ故に天暦年中、大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城の所謂梨壺五歌仙によつて古點が施され、後一條、後朱雀兩帝の頃に大江佐國、藤原孝言、大江匡房、源國信、藤原基俊等が次點を加へ、龜山天皇の文永年間に至つて更に仙覺が之に新點を加へて後嵯峨上皇に奉り、その後江戸時代に至つて契沖の「萬葉集代匠記」、賀茂眞淵の「萬葉集考」、鹿持雅澄の「萬葉集古義」となつて、その訓釋の事業は集大成されて現代に及んでゐるのである。

(4) 作風

前節までに、表面的な成立、組織、用字法等に就いて略述したが、次に萬葉集の內容を述べるに當つて先づ萬葉集全般の作風を考察することとする。

日本文學の抒情詩方面に於ける萌芽は記・紀の歌謠であつて、それがのびて萬葉集となつたのであるが、記・紀の歌謠は謂はば萬葉集への橋渡しであるからして、その特色は萬葉集の特色の根

源ともなつて居るのである。

概括的に記・紀の歌謡の特徴をみると、丁度兒童が感じた儘を、或は衝動の命ずる儘を率直に述べると同じ様に、いづれも眞情をさつぱりと露したもので、單純素樸の味はひに滿ち、樂天的で情に厚く、一種の雅致ある民族性を隨處に現して居る。修辭上より見れば、その中に用ゐられた詞姿は殆ど譬喩式、反覆式、緣裝式の三種に限られ、詩形の上から云へば、まだ五字七字の型がなり立たないで、三字、四字、六字、八字、九字、十一字等いろいろに交錯して居る。尤も全體の中には五七五七七の三十一文字式の歌が六十餘首もあつて短歌の流行を豫示しては居るが、同時に長歌、旋頭歌、更に連歌、發句、神樂歌、催馬樂等の諸形式を朧氣ながら豫想して居るのがある。要するに眞情的で素人的で、活きた材料を思つた儘にのべ、そして未だに形式の上に定形がなかつたのが記・紀の歌謡の特徴であるが、今、一、二その例を示せば次の様なものである。

第一は下照比賣の作。

天なるや、乙たなばたの、頸ながせる、玉のみすまるの、あな玉はや、谷二わたらす、味耜高彦根。

天稚彦が地上でなくなつた時、味耜高彦根神が、其の妹下照比賣と共に會葬された。ところが味耜高彦根神が天稚彦に非常に似て居られたので、人々が死んだ天稚彦が來たのかと思つた。それを怒つて味耜高彦根神はすぐに飛び去られた。そのあとで下照比賣は人々が人違ひしたのが忌々しくて、今わらはと共に居られたのは「天上のねえ、織女の、頸に掛け流した、纓絡の中の赤玉の、光明赫耀として、谷二つに照りわたるやうに、美貌のかがやきわたる、味耜高彦根神なんだよ」と言はれたのである。

全體の調子が、ただの話をしてゐるやうで、少しも格に囚はれた所がなく、今日の口語詩のやうである。

次は日本武尊が伊勢の尾津の濱の松に寄せ給うた歌。

尾張に、たゞに向へる、一つ松あはれ。一つ松、人にありせば、衣きせましを、大刀はけましを。

尾張の方へ眞直ぐにむいてゐる一本松の可愛きかな。此の一本松、もし人ならば衣をも着せようものを、大刀をも帶かせようものをの意。催馬樂や旋頭歌を思ひ出させる所がある。

更に尊が伊勢の能煩野で篤き病のうちに最後の呼吸を引き取られようとしたときの歌。

をとめの床の邊にわが置きし劍の太刀その太刀はや。

御劍に對する率直なる心情がうかがはれる。

以上が我が抒情文學の種歌となつた記・紀の歌謠の特色であるが、この記・紀の歌謠が次第に發展して、その詩想の上に幾分の複雜味を加へ、技巧の點に相應の精錬を示し、感情の點に一段の豐滿を加へ來つたものが萬葉集の歌である。勿論時代の推移、變遷、進歩のあとが見られ、殊に儒教及び佛教の渡來等によつて影響を受けたが、それは主に外形上に於ける影響であつて、內容上に於ては必ずしもさうではない。萬葉人が修辭・詩形・結構などの工夫に於て、自ら漢文學から取るべきものを取つたことは疑ふ餘地のない事實ではあるが、しかしその眞情的な點に於て、自然、素樸、雄健なる點は、上代歌謠と何ら變らない特色を發揮して居るのである。

正岡子規は萬葉集を禮讃して、萬葉が「誠」の一字を以て貫いてゐるために、理窟に墮せず、虛僞をいはず、直ちに自己の胸臆を攄くものとして、日本歌集の代表的なものとして居る。

『萬葉が遙かに他集に抽んでたる所は、他集の歌が毫も作者の感情を現し得ざるに反し、萬葉の歌はよく之を現したるにあり。他集が感情を現し得ざるは、有の儘に寫さゞるがためにして、萬葉がよく之を現し得たるは之を有の儘に寫したるがためなり、曙覽の歌に曰く

いつはりのたくみをいふな誠だにさぐれば歌はやすからむもの

「いつはりのたくみ」古今集以下皆是なり。誠の一字は曙覽の本領にして、やがて萬葉の本領なり。萬葉の本領にして、和歌の本領なり。我謂ふ所の「有りの儘に寫す」とは卽ち誠に外ならず。云々。』

この子規の言葉は萬葉の根本生命を端的に道破したものであつて、萬葉の作者が、自分の感情を僞らず、誠實に自然・人生を觀照して、すぐに人の胸奥に迫る力をもつた點は、まことに偉としなければならない。日本最古の歌集たる萬葉が、最新の味があるのは、「眞故に新」なるがためである。

今、萬葉集の作風を知るために、代表歌人たる柿本人麿の長歌と山部赤人の短歌と各々一つづつを引くこととする。

第一は人麿が石見の國より妻に別れて上つて來た時に詠んだ歌。

石見の海、角の浦まを、浦なしと、人こそ見らめ、潟なしと、人こそ見らめ、よしゑやし、浦はなけども、よしゑやし、かたはなけども、いさなとり、海邊をさして、にぎたつの、荒磯の上に、か青なる、玉藻沖つ藻、朝はふる、風こそ寄せめ、夕はふる、浪こそ來よれ、浪のむた、かよりかくより、玉藻なす、よりねし妹を、露霜の、おきてし來れば、この道

の、八十隈ごとに、よろづたび、顧みすれば、いや遠に、里はさかりぬ、いや高に、山も越えきぬ、夏草の、思ひしなえて、忍ぶらん、妹が門見む、なびけこの山。

反歌

石見のや高つの山の木の間よりわがふる袖を妹見つらむか。

大意は、「石見の海の角の浦のほとりをば、見るに足る浦がないと、人がいふであらう、見るに足るかたが無いと人がいふであらう、よし、何えいわ、浦らしい浦はないけれども、よし何えいわ、潟らしい潟はないけれども、いさなとる海の岸邊をさして、にぎたつ(地名)の荒磯の上に、眞青な美しい海草が、朝の風に吹かれ、夕の浪にゆられて、打ち寄せるであらう、その美しい玉藻が、浪のまに〳〵、あちらに靡き、こちらに依る如く、我に靡きよつて寢た、かはゆき妻を、我は故里に置いて立ち出でて來たので、此の道の曲り目毎に、幾度もふりかへりつつ行く中に、故郷も大分遠くなつた、越えて來た山もいよ〳〵高くなつた、今頃は故郷に居る妻の、さぞ夏草のやうに思ひしをれて、我を戀ひ偲んで居ることであらう。その妹の居る門が見たいに、汝が間を隔てるので見られぬ、えゝ邪魔な！　靡けよ此の山！」といふこと。反歌の方は、「石見の、高つの山の木の間から、わがふる袖を、故里なる妹の見てゐることであらうか。」といふので、前の長歌の方は、男が女を戀ふる意味を歌つたので、今度は反歌では女の方を思ひやつて歌つたのであらう。

次は赤人の和歌の浦の歌。

和歌の浦にしほみちくれば潟をなみ、葦べをさして田鶴なきわたる

和歌の浦にしほが滿ちて來ると、干潟が無くなるので、鶴が立場を失つて、潮の進むまに〳〵葦の生えた岸の方へ鳴きわたつて來るといふ意で、巧んだ跡は殆ど見えず、想調よく相和してさながら實境を見るやうである。

要するに萬葉集時代の歌人は、素朴野趣を愛して山野を放浪し、古代人の純情を失はず、積極的に、活動的に、その感情を率直に述べ、その思想は樂天的で、雄大、剛健を尚んだ。そして一方には敬神崇祖、忠君愛國、尚武勇略の思想が男性的に純情を以て詠まれて居るのである。そこに後世の歌人に見ることの出來ない特色があるのである。

(5)　歌人

萬葉集の歌人は前にも述べた通り、上は天皇より、下は遊女、乞食に至るまで、上下貴賤の男

女を問はず、あらゆる階級を網羅し、その地域も帝都を中心として殆ど全國に亙つて居て、その年數も約四百五十年の長きに及んで居る。從つて萬葉集の和歌の展開を説くにはいろいろの分け方があつて、或學者は天平以前、天平時代、天平以後の三期に分ち、第一期を代表するのは柿本人麿、第二期は山部赤人、第三期を代表するのは大伴家持として居る。また或學者は大體四期に分けて、第一期を素朴時代として、仁德天皇の頃から天武天皇の頃迄、上代歌謠の後を承けて主として素朴な抒情歌の現れた時代として、額田女王によつて代表させて居る。第二期は完成時代として、大體、持統・文武兩帝、卽ち藤原宮に都せられた時代をいひ、柿本人麿をして代表せしめて居る。第三期は分化時代とし、元明天皇から聖武天皇まで、卽ち奈良時代の前半をさし、山部赤人、大伴旅人、山上憶良、高橋蟲麻呂等を以て代表せしめて居る。そして最後に奈良時代の後半を模倣時代となし、大伴家持、大伴坂上郎女を以て萬葉集掉尾を飾る歌人となして居る。さていかなる時代の分け方をしても、柿本人麿。山部赤人の二歌聖を初め、大伴旅人、山上憶良、高橋蟲麻呂、大伴家持等は集中に於て群を拔く作者達であり、帝では舒明、孝德、天智、天武、持統、元明、元正の諸天皇が歌人として著名な御方々でいらせられる。皇子には有馬皇子、高市皇子がすぐれ、女では額田女王、譽謝女王、石川郎女、大伴坂上郎女等がある。これ等の中で殊に特色を發揮して當代に雄飛して居るものは、長歌に於ける抒情詩人としての人麿、短歌に於ける自然詩人としての赤人、實生活の苦惱を體驗して無限の愛を歌つた憶良、樂天的な人生詩人としての旅人、萬葉掉尾の歌人家持である。

(6)　柿本人麿

萬葉集の各時代の代表的作家の中、最初に擧げなければならないのは柿本人麿である。彼は思想に於ても、感情に於ても、性格に於ても、徹底的に日本的であつて、純正日本人の典型といふべき人物である。彼は敬神崇祖の精神に溢れ、長上を敬愛し、近親に厚く、また自然を好んで各地に旅した。彼は支那文學から長歌の修辭、結構、形式等の上に影響を受けたが、思想的には殆ど影響を受けなかつた。どこまでも純正日本人としての眞情を心ゆくまで歌つたのである。

人麿は持統・文武の兩朝に仕へたが、生歿の年月は不明。誕生地も石見、近江、大和の三説があつて、いづれとも決定しがたい。萬葉集によつて推測すれば、二十歳の頃、宮中に仕へ、持統天皇に從つて吉野に赴いたり、輕皇子に從つて安騎野に宿つたり、又近江の荒れた都を訪ひ、或は筑紫へも下つたやうであり、紀州へも行つたことがある。晚年官位の低い一地方官として石見國

に下り、そこから都へ上つたこともあるが、その任地で死んだやうである。萬葉集に人麿のなくなつたことをば「死」といふ言葉で記してあるところから、位は六位以下の人であつたことがわかる。亡くなつたのは和銅二、三年の頃で、齢は五十に滿たなかつたと思はれる。

萬葉集にある人麿の作品の數は長歌十六首、短歌六十一首、外に「或云」とあるものに、長歌・短歌各二首、それから「人麿集に出づ」とあるものに長歌二首、短歌三百三十八首、旋頭歌三十五首がある。

賀茂眞淵は「萬葉考」のうちで、極力、人麿の作品を賞讃して、「柿本朝臣人丸は古今獨歩である。その長歌の勢は風雨を起して、大虚空の雲に飛行せる龍の如く、言詞は蒼溟に八百潮の湧くやうだ。短歌の調べは、力士の大弓を曳くが如く、深き悲しみを云ふときは、猛者をも泣かしめよう」と述べて居る。彼は短歌の敍景歌に於ては次に出て來る山部赤人に、量・質ともに劣るやうであるが、最もすぐれた特徴は長歌にありとされて居る。彼の作品に就いて注意すべきは、宮廷の歌人として公に詠まれたものの多いことであるが、殊に長歌は大部分さういふものである。彼の長歌に於ける秀拔の技巧は、雄偉、剛健、たるみなき格調をなして居る處に成功して居る。「石見國より妻に別れて上り來る時の歌」は、第四節の「作風」のところで掲げたので、ここでは、

近江の荒都を過る時、作める歌

玉襷、畝火の山の、橿原の、日知の御代ゆ、生れまして、神のことごと、樛の木の、彌繼ぎ繼ぎに、天の下しろしめししを、天にみつ、倭を置きて、青丹吉、奈良山を越え、いかさまに、思ほし召せか、天離る、夷にはあれど、石走る、淡海の國の、さゞなみの、大津の宮に、天の下、知ろしめしけむ、天皇の、神の尊の、大宮は、こゝと聞けども、大殿は、此處といへども、春草の、茂く生ひたる、霞立つ、春日か霧れる、百磯城の、大宮處、見れば悲しも。

反歌

さゞなみの志賀の辛崎さきくあれど大宮人の船まちかねつ

さゞなみの志賀の大わだよどむとも昔の人にまたあはめやも

餘裕ある調子で懷古感を深めて居るところに、他人の模し難き美がある。この外に彼の長歌に於ける代表作としては「日並皇子尊殯宮之時」、「高市皇子城上殯宮之時」、「妻死之後、泣血哀慟作歌」等がある。

更に人麿の短歌の方をみると、彼の國家意識や神の觀念を詠んだものに、

大君は神にしませばあまぐもの雷の上にいほりせるかも

大君の遠のみかどとありかよふ島門を見れば神代し思ほゆ

大君は神にましませばまきのたつ荒山中に海をなすかも

等があつて彼の敬神崇祖の強い信念が現れて居る。

彼の人情を表現したものには、

さゝの葉はみやまもさやにさわげどもわれは妹おもふわかれ來ぬれば

こぞみてし秋の月夜はてらせれどあひみし妹はいやとしさかる

あふみの海夕浪千鳥ながなけば心もしぬに古へおもほゆ

等があつて、熱烈な抒情歌であり、彼の個性が強く泌み出てゐるのを感ずる。

右の外に、自然を詠んだものには、

ひむがしの野にかぎろひの立つみえてかへりみすれば月かたぶきぬ

天の海に雲の波立ち月の船、星の林にこぎかくる見ゆ

ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島かくれ行く船をしぞおもふ

是等の歌には彼の自然に對する的確な把握が認められるのである。

要するに人麿の特色は、純日本人としての信念に終始して、その立場から自然と人生とを見た眞情の披瀝にあるのである。彼が出でて、日本の和歌は眞の文學として獨得の地位を得たもので、古來歌聖と稱せられるのも宜なりといふべきである。

(7) 山部赤人

人麿の次に優美淸徹な自然詩人として山部赤人がある。賀茂眞淵は「萬葉考」のうちで彼を批評して、「山部宿禰赤人は、人丸と表裏して、長歌は言意共に簡である。短歌は巧を爲さず、有りの儘を述べてゐるが、それでゐて自ら絶妙なるわけは、意識高きためで、檳榔毛の車に乘つた貴人が儼とした姿で馳せゆくやうな風が見える」と述べて居る。之に據ると赤人は短歌により多く重きを置いてゐる樣である。事實、短歌の方が抽象觀念に囚はれず、技巧上の缺陷を示さず、獨得の風趣をもつて居るのに、長歌の方は修辭の美だけによつて讀者を牽引しようとする風があつて詩的效果は短歌に及ばない樣である。

赤人の傳記は詳かでなく、萬葉集によるより外はない。赤人の作で年代の明記されて居るのは卷

六にあるものだけで、それによると神龜元年十月、紀伊國での作が最も古く、天平八年六月、芳野での作が最も新しい。その間十三年であるが、赤人は聖武天皇に仕へて、その行幸に從つて紀伊、難波、芳野等に赴いたことがわかる。恐らく五位以下の卑官で、宮廷詩人として用ゐられたものであらう。尙、天平八年以後の作と思はれるものは見えないので、その頃世を去つたものと想像される。

赤人の作品として信ずべきものは萬葉集以外にはなく、萬葉集に見えてゐるものは、長歌十三首、短歌三十七首である。彼については既に大伴家持が「山柿」として人麿と共に並び稱し、古今集の序に至つては、「人麿は赤人が上に立たむこと難く、赤人は人麿が下に立たむこと難くなむありける」といひ、近世では賀茂眞淵が更に激賞したことは前に述べた通りである。自然觀照の獨自なる點と、細かく澄んだ歌調に至つては彼の右に出づるものがなく、現代に於て多くの渴仰者を出だして居る所以である。

赤人の自然觀照の仕方は、自然の懷のうちに抱擁せられて、自然と一如する所にある。卽ち赤人は靜寂な自然の趣を愛して沁々身にしみ、心に味はふといふ風がある。從つて彼は動的自然よりも靜的自然を好んだらしい。

三吉野のきさ山の間の木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥の聲かも

田子の浦ゆうち出でゝ見れば眞白にぞ富士のたかねに雪はふりける

ぬばたまの夜の深けぬれば久木生ふる淸き河原に千鳥しば鳴く

春の野にすみれ摘みにとこしわれぞ野をなつかしみ一夜ねにける

是等の歌の外に、前出の「わかの浦にしほみちくれば…」等、人口に膾炙された歌が多い。彼の自然觀照の態度と獨自の詩趣とは、以上によつてほぼ察せられる。玆にも純日本的な感情の流露があつて、外來思想の影響は殆どみることが出來ない。

(8) 山上憶良

山上憶良の存在は萬葉の異彩である。多くの歌人が或は自然美に詩を求め、或は忠誠の心を歌ひ、或は享樂生活に生きてゐる時、憶良のみはしつかりと大地に腰をおろして、實生活の悲喜哀歡、苦痛、不滿を歌つたのであつた。

憶良は、齊明天皇の六年に生まれた。「續日本紀」に據れば大寶元年正月、はじめて遣唐少錄となつた。その年遣唐使粟田朝臣等と共に、筑紫から旅立ちしたが、風浪のため渡海が出來ず、翌年

六月出發した。留ること二年、慶雲元年七月歸朝したやうである。和銅七年正月、正六位下から從五位下に敍せられ、靈龜二年四月、伯耆守となつた。任終へて歸京し、養老五年正月には「退朝の後、東宮（後の聖武天皇）に侍せしむ」といふ詔を受けた。神龜三年には筑前國司として下つた。天平三年の冬頃歸京したやうであるが、天平五年六月三日の日附のある「老身重病經年辛苦及思兒等歌七首」といふのが最後であるから、恐らくこの年に亡くなつたものと思はれる。年七十有四。

彼は筑前國司となり、政府の命を奉じて渡支した程であるから、始終社會の下積みとなつて居たわけではないであらうけれども、彼の和歌を通して想像するに、大體、一生を不遇のうちに送り、貧苦、病苦、窮乏などを相當に體驗したと思はれる。

彼は生活苦の世界を體驗して、そこから涌き出る悲痛感にひたつたが、その世界から逃避しようとせず、何處までもそれを正視しつつ踏み止つて忍從した。それは彼の妻子のため、また功名に對する夢想のためであり、一面、彼の儒教精神から來た一つの生活態度のためであつた。かういふ點に彼の生に執する根强さ、粘り氣があると同時に、また生活苦に忍從するあきらめの弱い一面もあるのである。しかし彼特有の恬淡さも情味もそこから來るのであつて、かういふ心境は東洋人に共通した傾向であるが、殊にそれは日本的特色の一つであるといふことが出來る。

憶良の歌には大體、長歌十首、短歌六十一首、旋頭歌一首がある。賀茂眞淵は「詞質にして心美だ。久米部の雄裝して殊舞（古代の舞）するやうに思はれる」と批評して居るが、修辭の美、形式の美よりも內容充實を主として、實生活の眞味を表現しようとしたのである。華やかなところはないが、人の心に深く泌み入る力がある。

世間を憂しと恥しと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

慰むる心はなしに雲隱り鳴き往く鳥の哭のみし泣かゆ

術もなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど兒等に障りぬ

かういふ貧窮問答歌その他をみても必ずしもその表現は巧みでなく、美辭佳句の拾ふべきものはないが、一片の眞情が力强く人を打つのである。

憶良等は今は罷らむ子哭くらむその彼の母も吾を待つらむぞ

これは山上臣憶良宴を罷る歌であるが、この憶良はもう退出しよう、うちには子どもも泣いてゐようし、その兒等の母、卽ち自分の妻も待つてゐようぞの意であつて、諧謔微笑のうちに實生活的直接性のある點、よく彼の特色を現して居る。

また彼が不遇、貧寒のうちに、その愛兒に注いだ溫情の歌は、直ちに人の胸奥をゆるがす力がある。

子等を思ふ歌一首　長歌　短歌

瓜食めば、子等思ほゆ、栗食めば、況してしぬばゆ、何處より、來りしものぞ、眼交に、
もとな懸りて、安寢し爲さぬ。

反歌

銀も金も玉もなにせむにまされる寶子に如かめやも

更に、

男子名は古日を戀ふる歌

わかければみちゆき知らじまひはせむしたべの使おひてとほらせ

これは、「世を去りゆく子供が冥途へゆく道を知らぬであらう故、幣物をあげようから、何卒、わが子を背負うて貰ひたい、冥途の使よ」といふ意で、親心の痴にして而も切なる眞の姿を浮べて居る。

最後に、憶良は貧に惱みながらも、深く妻子を思ふために、はかない生にいつまでも嚙りついて居たいと考へて、

水沫なすもろき命もたくなはのちひろにもがとねがひくらしつ

と詠んだ。儒教の影響を受け、佛教思想の一端をも知つた彼が、尙煩惱の人であつたところに、彼の强烈な個性の閃きがあるのである。

(9)　大伴旅人及び大伴家持

驗なき物を思はずば一つきの濁れる酒を飲むべくあるらし
酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ
古の七の賢しき人等も欲りせしものは酒にしあるらし
賢しみと物言ふよりは酒飲みて醉哭するし益りたるらし
言はむすべせむすべ知らに極まりて貴きものは酒にしあるらし
なかなかに人とあらずば酒壺に成りてしかも酒に染みなむ
あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る
價無き寶といふとも一坏の濁れる酒に豈まさらめや

夜光る玉といふとも酒飲みて情をやるに豈如かめやも
世の中の遊びの道に冷しきは醉哭するにありぬべからし
この代にし樂しくあらば來む世には蟲に鳥にも吾はなりなむ。
生ける者遂には死ぬるものにあれば今世なる間に樂しくをあらな
默然居りて賢しらするは酒飲みて醉哭するになほ如かずけり

これは、太宰帥大伴旅人作るところの「酒を讃むる歌」十三首である。是等の歌をよむと、その自由なる表現の中に、現世的な享樂主義と、その底に流れて居る一種虚無的な老莊の香が感ぜられる。

大伴旅人は山上憶良が筑前國司として任地に下つた時には、太宰帥として彼の地にあつたので、この二人は共に風流の交りを結んだ。しかし二人は人生に於ける出發點を最初から異にして居た。憶良が絶えず生に齷齪としてゐたのに對して、旅人は名門大伴家の出身で、一種の特權階級に屬して居たために、彼は最初から貧苦や窮乏は知らなかつた。のみならず官位も累進して從二位大納言にまで達した。彼には憶良の樣に齷齪する必要は少しもなかつたのである。

旅人は支那文化に心醉して、殊に老莊の影響を受けたやうであるが、既に知つた佛教を信賴せず、現世主義を奉じて、刹那の快樂を追はうとした。明日、明後日はどうあらうとも、今日を樂しまう、今日はどうあらうとも、眼前に於ける刹那を樂しまうといふのが、彼の所願であつた。かくて旅人は、酒に於て、最も生き甲斐ある安慰を見出だしたのである。

旅人の作は萬葉集の卷三、卷五、卷八等に主として見えて居るが、酒の歌をみても、如何に旅人がその表現に自在な力量を持つて居るかがわかる。相當複雜な內容を一首一首に毫も苦澁なく自由に表現して居る。

彼の作は何れも老年のものばかりで、若い時代のものは見當らない。しかし性格は、風流快活で、作品はまた流麗明快、老年の人とは思はれないほど若々しい作を殘して居る。ともあれ、我々は旅人に於て上代日本人の樂天的性格の一面を見ることが出來るのである。

かくの如き享樂主義の旅人を父として、その歌才、情熱を受け繼いだものは大伴家持であつた。彼は養老二年の生まれ、官位は累進して天應元年には東宮大夫となり、左中辨を兼ねて從三位に昇つた。しかるに桓武帝の延曆元年正月、事に坐して官を免ぜられ、京外に移されたが、四月に許されて本官に復し、翌年には中納言となつた。ついで三年には持節征夷將軍となつたが、四年八月薨じた。歲五十七。家持は父の薨後は主として叔母の大伴坂上郎女に育てられたので、歌に

ついての趣味・知識は、父と叔母の二人から來たのである。殊に叔母の坂上郎女は才氣煥發の女歌人であつた。かういふ影響の下に家持は歌人として大を成したのである。

家持の呼吸した時代は、奈良朝の文化が漸く爛熟して、歌人達の神經も稍々纖細となり、情熱の力もまた幾分か弱くなつた時代であつた。家持もまたこの環境の影響からまぬかれることが出來なかつたのは仕方のないことである。しかし、賀茂眞淵が家持を批難して「家持は事を能く記して餘韻がない。丁度、行幸の鹵簿を見るやうだ」といつてゐるのは、少しく苛酷に失すると思はれる。

家持の歌には二つの著しく目立つ方面がある。一はデリケートな味のある自然の歌、もう一つは忠義の心、功名の心を詠んだ思想的な歌である。

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯なくも

うらうらに照れる春日に雲雀あがりこころ悲しも獨り思へば

わが宿のいさゝむら竹ふく風の音のかそけきこの夕かも

かういふ歌をよむと、家持の巧緻な手法を知ることが出來て、銀燭のもとにゆらぐ草花を思はせるやうな趣があるが、それと同時に古今集の時代が近づいて來る足音をきく感がする。萬葉人の藝術も行きつく所まで行きつくして、勢ひ理智を混入した新しい世界へ移るより仕方がないと思はれるのである。かくて家持の歌は新しい時代の開幕を知らせる第一鐘であつた。

海ゆかば、みづく屍、山行かば、草むす屍、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじ

家持のこの歌は、彼の忠義の歌の代表的な作品であるが、今なほ我々の忘れ得ぬ歌である。一般士民の胸に共通して働く國民的感情を表現し得た意味で、長く生命を保つことの出來る傑作である。

この外彼の作品を二、三引いて置く。

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く

丈夫は名をし立つべし後の代に聞き繼ぐ人も語り繼ぐがね

劍刀いよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて來にしその名ぞ

以上萬葉集の代表作家に就いて略述したが、眞に萬葉集を味はふには、この他の多くの無名作家や閨秀歌人達の作品も點檢すべきである。

要するに、萬葉集に含まれた眞實性は永遠のもので、その表現及び詩想は獨自の生命を有し、今

尙潑剌たる淸新味を感ずることが出來る。殊に純日本的趣味、純日本的感情の表白なる點に於て吾々を共鳴せしむるものがあるのである。

第二篇　平安時代文學

第一部　平安時代文學概說

(1)　名稱・範圍

大和時代の次に來るものは平安時代の文學である。卽ち、平安京に都のあつた時代の文學であり、同時に武家政治の開かれる以前の文學を云ふ。平安朝とは、桓武天皇が延曆十三年（一四五四）平安に奠都し給うてから、後鳥羽天皇の文治二年（一八四六）源頼朝が幕府を鎌倉に開くまでの約四百年間を指すのであるが、この時代は主に、藤原氏の繁榮時代であつて、謂はば王朝華やかなる時代であつた。我が國史上、何時の時代といへども王朝時代でない時はないのであるが、この時代を特に王朝時代と稱して、平安文學を王朝文學とも云ふ。この時代の末期の源平爭亂時代は、普通歷史の上では、自ら特別の時代をなしてゐるけれども、文學史上では、ただ平安より

鎌倉への過渡期であつて、特に一時期を劃するには足りないのである。

(2) 時代區分

平安文學の時代區分には、三分說と四分說との二通りがあるが、先づ三期に分けるものは、――第一は桓武天皇より宇多天皇に至る初めの百年間、漢文學が隆盛を極めた時代、第二は醍醐天皇より後一條天皇に至る二百年間の全盛期、古今集・源氏物語が出て、歌文共に榮えた時代、第三は後一條天皇以下の百年間、歌も散文も次第に衰へて、武家時代へ移る過渡期である。

次に、四期に分けるものは、漢詩漢文の盛であつた弘仁時代、歌が盛で古今集の出た延喜時代、散文が盛で源氏物語・枕の草子の出た藤氏全盛時代、歷史物が出て歌文ともに衰へた院政時代の四つに分けて、各々百年づつを充てて居るのである。

本書に於ては、初期、全盛期、末期の三期に分けて、更に全盛期を二分して、前の百年を和歌の全盛期、後の百年を散文の全盛期とすることとする。

(3) 展開

第一の初期は、大和時代後期の懷風藻等を繼承して漢詩文の全盛を誇つた時代である。文學史上、この期の中心となつたのは、帝では嵯峨天皇、年號では弘仁である。この當時、模範とされた漢詩文は「文選」と「白氏文集」であり、勅撰された詩文集には「凌雲集」「文華秀麗集」「經國集」等がある。そして文人の代表者は空海と菅原道眞である。

空海の詩文集には「性靈集」があり、詩文論には「文鏡祕府論」があつて、これは日本の修辭研究の魁をなしたものである。道眞は和魂漢才、遣唐使廢止等を唱へて有名であるが、文學の方面では漢詩文を日本化した人であり、文集には「菅家文集」がある。

この時代の和歌は、萬葉集時代に比べて大いに衰へたが、その中に次の古今集時代への橋がかりとなつて活躍した歌人は、在原業平を初めとして、小野小町、僧正遍昭、文屋康秀、僧喜撰、大伴黑主等のいはゆる六歌仙である。尙この頃から目で味はふ文學と耳で聽く文學とは別々に分化するやうになつて、神樂歌・催馬樂といふ歌謠が行はれ始めた。卽ち、和歌が古典的の格式を具へて、考へて書いたのを、目で見るものとなりかかつたのに對して、時人の眞情を卑近な調子に現して謠つたのが神樂歌、催馬樂である。

散文方面では、此の期の末に竹取物語・伊勢物語が現れた。ここに初めて物語が出て來たが、こ

の平安初期の後半頃になると、世の安定と文化の進運に伴なつて、平安人士の思想感情は複雜となり、精緻となつて、短小な形態を有する和歌によつて表現せられるのに滿足することが出來なくなつたのである。自由奔放に遺憾なく思想情緒をのべるためには、もつと複雜な形式をのぞむのが當然である。かくて竹取・伊勢兩物語がその始祖として現れて來たのである。

この物語には二つの系統があつて、一つは神話・傳說の系統を引く作り物語である。竹取物語はこれに屬し、傳奇的、浪漫的な傾向を有するものである。もう一つは和歌の系統を引く歌物語で、伊勢物語がこの祖である。これは現實的、經驗的な戀愛歌、相聞歌が中心となつて發展したものであるから、從つて現實的、寫實的傾向を有する物語である。

要するに、まづ漢文學が隆盛を極め、それが漸次日本化すると共に、今迄衰へてゐた和歌が擡頭し出し、又物語、卽ち小說といふ新文學が芽をふき始めたといふのが第一期の大勢である。

第二の全盛期の前半の百年は、和歌の全盛期であつて、その中心となつたのは、帝では醍醐天皇、年號では延喜、作品では古今集、作家では紀貫之である。貫之は當時の歌壇の先頭に立ち、作歌に、歌論に、日記に、種々の點に於て第一人者たるべき巨人であつた。紀之が古今和歌集序に於ける主張は、前代の業平、小町等が情を主としたのに對して、知を主とし、前代の情餘りあつて詞足らぬ歌に對して、形式と內容と、卽ち言葉と感情とを五分々々に言ひ整ふるといふ所にあつた。この直觀的な歌から反省的な歌となる經過は、古今集の讀人不知の歌、六歌仙の歌、貫之時代の歌の三期によつて見ることが出來るのである。そしてこの古今的傾向は「後撰集」から「拾遺集」に至るまで中心の歌風となつた。

此の時代の散文物語には、分量、趣向及び描寫の技術に於て大分發達した「宇津保物語」「落窪物語」等が出て、竹取時代と源氏時代との橋梁をなして居る。

全盛期後半の百年は假名文の全盛期であつて、その中心となつたのは、政治の方面では藤原道長、作家では紫式部に淸少納言、作品では源氏物語に枕の草子である。和歌の方にも、古今の跡を追うて後撰集・拾遺集が成り、作家として和泉式部があるが、歌集も作家も古今時代に比しては云ふに足りない。此の期は散文全盛時代である。

此の期に出た散文の雙璧は源氏物語と枕の草子である。この二篇に就いては第二部の「各說」に於て詳論するつもりであるが、此の二篇の文學的價値を比較するといふことは、二篇の性質が異つてゐるので困難である。

此の期には尙「狹衣物語」「濱松中納言物語」などがあつたが、大して重要な地位を占め得べき作

品ではない。

最後に、末期の院政時代の文學に就いては、多く云ふべきものがない。當時の散文に於ける著しい變化は、小說が衰へて歷史物が榮えたことである。その主なるものは「榮花物語」「大鏡」「今昔物語」等である。

榮花物語・大鏡は源氏物語あたりの筆致を以て歷史を寫さうとしたもので、文學としての趣味は減じたが、なほ人の心を惹く、優婉な落ちついた文致を有して居る。この榮花・大鏡が一種の趣向を立てて藤原氏を中心とした宮廷生活を描いたのに對して、今昔物語は、和、漢、天竺、古、今のあらゆる階級に關する珍話を斷片的に集めたものである。その文章は質實堅硬になつた點があり、鎌倉文學に一歩近づいたものと見られる。

つまり一たび漢文とわかれて、漢文を壓して興隆した假名文が、再び漢字漢文を取り入れて、玆に武人の男性的生活を寫した鎌倉文學となつて行くのである。

(4)　貴族文學勃興の原因

以上簡單に平安時代文學の展開の跡をみたが、然らばこの平安時代に於ける大宮人を中心とした貴族的文藝、貴族的趣味、貴族生活を基調とした文學が勃興して來た原因は何であらうか。

既に述べた萬葉集は、大體貴族を中心とした歌集には違ひないが、しかしその中には、庶民、遊女、乞食などの歌も收められてゐた。この點から、日本文學は必ずしも貴族中心或は貴族本位のものでなかつたことがわかる。しかるにそのあとをうけた平安文學が、殆ど庶民的傾向を沒却してしまつたのは、要するに當時の民衆生活の程度が低く、貴族が富と權力を握つたのにくらべると、餘りに貧弱すぎてゐたために、文藝に關與する教養も餘裕も機會も得ることが出來なかつたためと思はれる。

當時の民衆の大部分は農民であつた。彼等は概ね無教養で保守的で、文化も低く、また生活狀態も悲慘に近かつた。殊に地方の農民は地方官のために苛斂誅求に逢つて、一層苦しかつた。さうした狀態の前には、文藝も何もないのである。それから商人といつても今日と違つて、殆どあるかなきかの存在であつた。京都などを除くと、すべてが自給自足であつた當時に、商人の生活狀態のよからう筈がなく、その日々の生活が手一杯であつて、文學などに關與する餘裕も教養もなかつたに違ひない。かういふ風に考へると平安時代の文學が貴族中心のものとなつたのは、蓋しやむを得ないことである。

これが貴族中心の文學が平安時代に榮えた社會的事情であるが、更に文學至上主義が新に現出した理由として次の諸點をあげることが出來る。

その一は、京の自然美が平安貴族に與へた影響である。京の山水は生きた藝術そのものといつてもよい。東には三十六峯が雲煙のうちに浮動し、西に嵐山、天王山の翠巒が連なり、北には北山、南には宇治川を距てて奈良丘陵がうねつてゐる。山紫水明、水蒸氣が多いために、朝夕の趣、四季の眺めに變化がある。更に、京を中心として宇治の名勝があり、琵琶湖の風光がある。このやうな自然の詩味は、審美眼に富んだ京の大官人を動かして、その詩興をそゝらないではやまなかつた。そこに文藝勃興の一因がある。

その二は、支那・印度の文化的空氣を呼吸して、貴族の教養が進歩したことである。萬葉集時代には漢文學はまだ十分に利用されず、日本化されてもゐなかつた。それが平安時代に入ると、貴族階級は、儒佛兩文化を前代よりも深く味解するに至つて、そのため弘法大師、小野篁、都良香、菅原道眞、紀貫之などのやうな支那乃至印度の文學、藝術に精通した文人が輩出するに至つた。そして文學的、思想的、藝術的の進展が、後に有力なる閨秀作家を出だして、文學勃興の花を咲かせる一因となつたのである。

その三は、感覺本位、情趣本位の生活が展開されたことである。平安貴族は概ね詩歌管絃の遊に日を費して、彼等の生活の基調をなしたのは唯美思想であつた。彼等は思索せずして感じ、理性の世界に遠ざかつて、只管情趣の世界に浸つた。從つて彼等の最も喜び、熱中したものは戀愛であり、最も愛したものは自然の美である。戀のための藝術、戀のための文學、さういふ傾向のものが彼等の中に出て來たのはこのためである。又自然の美に陶醉して、文學的遊戯に沒頭し、音樂舞踏に親しんで、あらゆる生活を美化しなければやまなかつた。かういふ生活が、文學所產の有力な動機の一つとなつたのである。

その四は、平安時代に於ては有力な文學のパトロンが多かつたこと、これも文學勃興の一因である。朝廷が、直接、間接に文學を保護せられたことはいふまでもないが、殊に一條天皇の治世には皇后定子、中宮彰子が互に競爭して、その周圍に才媛を集めた。定子の方には清少納言、伊勢大輔などが集り、彰子の方には紫式部、和泉式部、小式部などが集つたが、これ等の才媛は何れも文學上に拔群の手腕があつたので、物語に隨筆に、短歌に日記に獨得の妙趣を發揮したのであつた。

最後にその五として、もう一つ逸することの出來ないのは假名文字が發明されたことである。こ

れは平安時代に入つて、文學上次第に日本的自覺が貴族階級の間に深まるに連れて、先づ片假名が出來、續いて平假名が發明され、この簡單利便な假名を使用して、日本獨得の國文學を生まうとする傾向が強くなつた。この假名の發明によつて、在來、支那文學の素養がなければ、何の表現も出來なかつた不便は除かれ、自己の思想・感情を自由に表白し得るの自由を持つに至つた。有力な閨秀作家の輩出は、一面この假名の發明に負ふところが多いのである。

要するに平安時代は正に文學勃興の機運が熟した時代であつて、これ等の諸因に依つて文藝の花が一時に開くに至つたのである。

(5) 特　質

五十嵐力博士は平安朝の時代相を論じて次の如く述べて居る。

『ここに聰明にして情に厚く美を愛する一團の人間があつて、國民中の最高階級に位し、其の國最高の教育を受け、而して其の國特殊の文化が成り立ちかけた時に生まれたと假定せよ。此の時、國民中の他の一團が彼等を保護して、「衣食はもとより政事兵馬の實務に至る迄、煩い事は一切吾等が引き受けるによつて決して心配さるゝな、唯だ〳〵風雅の道に心を潛めて樂しく美はしく世を送りなさい」と云つて、山水明媚なる一廓の土地を其の遊樂の場所に當てがつたとせよ。かくして彼等は生活の苦を知らず、事務の煩を知らず、干戈の慘を知らず、感情文藝の世界にほしいまゝに悠遊して二百年三百年を過ぐしたとせよ。其の結果、一代の風潮が感情本位、文藝本位になるべきは見易き道理である。從つて其の弊が流れて文弱になり、奢侈になり、淫靡になり、婦女子が重んぜられるやうになり、婦女子的の臆病な陰險な謀計が行はれるやうになつて、腐敗墮落を極むべきことも亦爭はれぬ自然の徑路である。

藤原氏專權時代の宮廷生活、公卿生活は、まさしく此くの如きものにして、又正しく此くの如き結果に達した。彼等は支那印度の文明が漸く我が國情と融和して、まさに特色ある文明が成り立たむとする時に當たり、新文明建設の責任ある地位に居りながら、不思議な運命に操られて、現實と懸け離れた內裏雛式の生活を送ることとなつた。彼等は虛位を擁して對人民國土の實務とは殆んど全く相關することがなかつた。大臣、納言は唯だ朝廷の儀式を行ふ爲めの役目、大將中將は弓胡籙に威儀を飾る名儀だけの武官、文官は民情を知らず、又知らうともせず、武官は武事を習はず、戰爭を夢にも見ず、文武を問はずして、

滿廷悉く是れ宮内官悉く是れ風流歌人であつた。彼等ほど自然に遠ざかつた者は無い。彼等は嵐、鴨の山紫水明を賞し、春花秋葉の美を爭つたとはいふものの、脚下なる土地や土地に關した物には一顧を與ふる事をも屑しとしなかつた。露を見て「何の玉ぞ」と問ひ、農産物を見て撫めくもの、大根らしきもの、葱とかいふものなど言ふのが、彼等の間に於ける一種の誇りで、土臭い物は賤、山がつと共に、凡べて「怪」、「賤」の二義を兼ねた「あやし」といふ形容詞の下に却け去らるゝを常とした。彼等は自ら稱した通り、地を離れ實務を離れた殿上人、雲の上人であつた。而して彼等を羨みながら其の地位を奪はうとはせず、甘んじて其の下風に立ち、其の爪牙となり、藩屏となつて、彼等を荒い風にあてず、彼等の逸遊費を負擔して風流を恣まにせしめた者が卽ち地下人等で、彼等は地下人が自覺して自立の念を起こすに至るまで、快く雲上の夢を貪ることを得たのである。』

先に述べた諸原因によつて勃興した平安文學、そしてこの様な時代相を反映した平安文學の特質が何であるかは、ここに詳述するまでもなく、自ら明瞭である。

その主情的な傾向を有する點に於ては同じでありながら、大和時代文學が力强い情緒を主とするに對して、平安時代文學は優美な情趣を主とするところに特質を有する。一は男性的なるに對して、一は女性的であり、前者が素樸、自然であれば、後者は纖細、優艶である。

本居宣長は源氏物語の基調を「もののあはれ」であると明確に論じてゐるが、「もののあはれ」は「あはれ」を主な要素としたしみじみとした情趣である。平安文學はこの「もののあはれ」が發生し、成立し、完成し、爛熟してゆく過程であるとも見ることが出來るのであつて、「もののあはれ」を基調となしたと見るのは、源氏物語の正しい解釋といふべきであり、平安時代の生活や文學の眞實なるものを闡明したといふべきである。

更に平安時代の文學を形態の上から見ると、和歌、歌謠、物語、日記、隨筆、漢詩、漢文等に分けられるが、この中で、新しい形態として特に注意せられるのは物語と日記隨筆とであり、殊に物語は平安文學の中心として、伊勢物語・竹取物語から源氏物語を經て、後期物語に至るまで、王朝文學の粹をなしてゐる。「もののあはれ」の文學觀も、この物語を中心として展開してゐるものである。卽ち形態の上からみた平安時代文學の特色は、物語を中心として、詩歌と日記隨筆とを兩翼としてゐるといふべきである。

第二部　平安時代文學各説

第一章　竹取物語

(1)　成立

竹取物語は我が國に於ける物語の元祖だといはれる。平安時代に入つて假名の發達に連れて現れた我が物語文學には、大體二種の傾向があつて、一は超經驗的な荒唐無稽な興味ある事件を美化して作り上げた傳説系統の物語であり、他は和歌系統の現實的な經驗的な歌物語である。前者はその發生上、傳奇的、浪漫的な特性を有して居り、後者は現實的、寫實的な特性を有して居る。竹取物語はこれ等二種の系統のうち、傳奇的物語の始祖であるのである。

この物語がいつ頃出來て、作者が誰であるか、今日迄、はつきりしてゐない。唯、源氏物語の繪合の卷のうちに、

『物語のいできはじめの祖なる竹取の翁』

とあるのや、その文體の簡古、雄勁なるによつて、平安時代初期の作品であらうと推察せられるだけである。古來種々の説があるが、田中大秀の竹取物語解に、

『源氏物語に、繪は巨勢相覽、書は紀貫之書けりと見ゆれば延喜の以往よりありしなるべし。』

と説いてゐる所から、延喜以前の書だと見るのは妥當であるし、更に、藤岡作太郎氏が國文學全史、平安朝篇に、

『その文章より見ても、到底、延喜以來のものにあらざるべく、さりとて弘仁の詩文全盛の世、假名の弘通もいまだしき時に、かゝるものを見るべくもあらず、貞觀より延喜まで三四十年の間に出來たりと見るを穩當とすべし。』

と述べてゐるが、この説が最も穩當であらうと思はれる。

從つてこの成立年代からいへば、古來この物語の作者が源順だといはれてゐた説は信じ難くなつて、作者については全く不明であるといはざるを得ない。

次にこの物語が古くは「竹取の翁物語」又は「かぐや姫物語」と呼ばれたが、前者は此の物語の冒頭に、

『今は昔竹取の翁といへる者ありけり。』

とあるその翁によつて名づけられたものであり、後者はこの物語の主人公である赫耶姫によつて名づけられたものである。

(2) 内　容

さて、この物語の内容であるが、その梗概は、拙著「文淵點滴」に詳述してあるので、ここでは極く簡單に述べることとする。

昔、竹取の翁といふものが、山の中の竹の幹から身長三寸ばかりの美しい女兒を拾つたが、それを育ててゐるうちに輝くばかりの美少女となつたので、赫耶姫と呼んだ。

姫の美貌が四邊に知られると、青年達が竹取の翁の家へ澤山やつて來たが、姫は容易に顔を見せぬ。多くの者があきらめてしまつた中に、どうしても姫を得たいと熱情に燃えた貴公子が五人あつた。これ等の人々は手を變へ品を換へて求婚してみたが、姫の心は少しも動かない。ばかりか何とかして五人のうるさい男達を追ひ拂ふ手段として五人に一つづつの難題を出して、それをかなへて呉れた人を婿にしようといひ出した。

その難題といふのは、天竺にある佛の御石の鉢、白銀を根とし黄金を莖とし白玉の實のなつてゐるといふ東海の蓬萊山にある珍しい木、唐土にあるといふ火鼠の裘、龍の頸にある五色の玉、燕のもつてゐるといふ小安貝、この五つをそれぞれ割り當てられた五人の貴公子に持參して呉れといふのであつた。

戀に狂つた五人の男達は、初めは「馬鹿々々しい」と怒つてみたが、姫を思ひ捨てることが出來ないで、各々ありとあらゆる手段を使つて、或は贋物を持つて來たり、細工師に姫の望む通りの枝を作らせたりして、姫を胡麻化さうとしたが、結局五人とも失敗に終つて、いろ〳〵の滑稽談を殘して皆失戀してしまつた。

かくて、五人の公達は何れも戀に敗れて舞臺から退いたが、姫の美しさは、いつしか雲の上に達し、時の帝は勅使を遣はされた。しかし姫はどうしても御召に應じようとしない。どこまでも連れて行くといふなら死を以て詫びるといふので、さすが一天萬乘の君もどうすることも出來なかつた。

そのうち三年の月日が流れた。ところがその春の頃から、姫は空に輝く月の姿を眺めながら、物思はし氣な風情を見せるやうになつた。果ては八月十五夜が近くなると涙を流して悲しむやうになつたので、翁嫗等が不審に思つてそのわけを問ふと、姫は初めて今迄の祕密を打ち明けて、自分は實はこの國のものでなく、月の都のものであるが、故あつてこの世へ來たものである。しかしこの八月十五日には、月の都から迎へがやつて來るので、どうしてもかへらなければならない、それが餘り悲しくてかうして泣いてゐるのです、と語るのであつた。

翁の驚きは一方ならず帝に奏上したところが、帝もいたく嘆かれて、十五の日には二千人の兵を翁のもとに遣はされた。ところが愈々十五夜の子の刻になると、翁の家のあたりは眞晝を欺くばかりに煌々と輝いて、大空から多くの天人が雲に乘つて下りて來た。それを見ては多くの兵もただ呆然とそれを眺めてゐるばかりであつた。

姫は翁に記念のために自分の衣を與へ、帝へは心こめた遺書と不死の藥を遺してから、飛ぶ車に乘つて、天上向けて去つたのである。あとで翁は、その不死の靈藥を帝にまゐらせたところが、帝は「姫がなくては、不死の靈藥も用がない」と仰せられて、駿河國にある一番天に近い山へ勅使を遣はして、その靈藥を山上で燒かしめられた。その折、不二と名づけられたその山には當時の煙が今もなほ雲の中に立ちのぼつてゐる。

これが竹取物語の極く簡單な荒筋であるが、いかにも神祕怪奇な物語であつて、童話式、御伽噺式な味があり、童話式ロマンスとでもいつた方が適切である。

我々は古代の文學に於ては、記紀や風土記に現れた多くの傳說を持つてゐるし、大和時代の後期には日本靈異記、更に文武天皇時代には伊與部馬養の手に成つた「浦島子傳」等を見ることが出來るが、これ等のものは所謂傳說であつて、そこには作者の空想、作意といふものが加味されてゐない。つまり小說らしい構成が施されてゐないのである。ところがこの竹取物語は、梗概をよめばわかる通りに、初めて作り物語らしい構成が見られる。そこには實に巧妙な技巧があり、それが、これ迄の傳說との相違であつて、この物語が物語の始祖といはれる所以である。

今、この物語の構想、表現を考察してみると次の通りである。

(3) 構想・表現

竹取物語は之を物語の筋から見て、大きく三つの部分に分けて考へることが出來る。卽ちその一は、月の世界には世にも麗はしい天人天女達が、不死の樂園に生活を營んでゐるといふ思想の、

天界傳説とでもいふべき部分で、かぐや姫はその樂園に咲き亂れた花の一輪がたま〳〵下界に迷ひ下つて來たものだといふ思想を現したこの物語後半の部分、その二は、如何にすべての男といふものは、一少女の容色のために、憐れにも滑稽な、愚かしい振舞をするものであるかといふ事を諷刺したと見るべき前半の部分、その三は分量からいへば極めて少いが、以上二つの部分の局を結んで、盡きぬ悲哀を天に訴へるやうに細々と立ち昇る煙と、その煙を吐く富士の山をもつて來て、傳説的説明を試みた最後の部分とである。この三つの部分が主たる骨子となつて、これ等の順序配列を考へて、極めて順序よく整然と構成されたのがこの物語である。

作者は恐らく月の世界の天女といふことを物語の主要部分として最初に思ひついたものと思はれるが、然しそれを最初に出す事は物語を幼稚にさせ、平板單調にさせて讀者に好奇的期待を持たしめないので、それは避けて、先づ不思議な美しい女を竹の中から見出だすことから、この姫はただの姫君でないといふ感を物語の進むに從つていよ〳〵強く讀者に與へて、そして最後に彼女が月界の天女で、罪を得てしばし下界に下された者であることを述べ、この絶世の天女に昇天された後の淋しさ哀しさを縷々たる煙として表現して、富士山の地名の説明をして局を結ぶといふ順序を取つたものと見ることが出來る。

これは今日の作家の技巧としてみれば、寧ろ平凡で何も取り立てていふに足りないばかりでなく、かういふロマンチックな空想の世界は、到底童話の範圍を脱しないものであるが、これを一千年前の平安朝に於ける物語の祖として見る時に、やはり何人も賞讃の辭を惜しむ事は出來ないと思ふ。殊に最後の、かぐや姫に去られた後の無限の悲哀を、平安の都近くして最も天に近い駿河の國なる富士の頂に、綿々として永久に絶えず立ち昇る煙として表現し、併せてふじの地名を説くあたりの技巧は實に巧妙を極めたものといはなければなるまい。

次に竹取物語の表現であるが、描寫に於ては全體に無駄がなく、文章の簡古雄健なことは評家の一致するところである。今、蓬萊山の話の一節を拔いて置く。

『(前略)舟のゆくにまかせて、海に漂ひて五百日といふ辰の刻ばかりに、海の中にわづかに山見ゆ。船の中をなんせめて見る。海の上に漂へる山、いと大きにて有り。その山のさま、高くうるはし。これや我が求むる山ならんと思ひて、流石に恐ろしく覺えて山のめぐりをさしめぐらして、二三日ばかり見ありくに、天人の粧ひしたる女、山の中より出で來て、銀の金椀を持ちて水をくみありく。之を見て舟より下りて、「此の山の名を何と申す」といふに、女答へていふ。「これは蓬萊の山なり」と答ふ。之を聞くに嬉しきこと限り無

し。此の女、「かくのたまふは誰ぞ」と問ふ。「我名はほうかんるり」といひて、ふち山の中に入りぬ。其の山を觀るに、更に上るべき樣なし。其の山のそばひらを廻れば、世の中に無き花木ども立てり。こがね、しろがね、るり色の水、山より流れ出でたり。それにいろ〳〵の玉の橋わたせり。其あたりに照りかゞやく木ども立てり。其の中に、是れ採りて持てまうで來りしは、いとわろかりしかども、宣ひしに違はましかばと、此の花を折りてまうで來るなり。山は限りなく面白し。（下略）』

(4) 文學的價値

竹取物語は全體として見る時、その文體は如何にも素朴平明であり、その結構は實に巧みであるが、仔細に見れば、一千年前の竹取には一千年前に遡つただけの時代的幼稚さや部分的缺點がないわけではない。

その幼稚さは、よい方面としては素朴簡古の趣となつて現れるが、又一面幼稚な笑ふべき缺點ともなつて現れる。例へば作者は初めから竹取翁を六七十歳の翁と考へながら、所々で都合のよい文句を用ゐようとしてうつかりその年齢を混亂させてゐるが如きそれである。

次にもう一つこの物語の單純幼稚な感を與へる原因は、姫に戀した五人の貴公子が、何うかして姫を己のものにしようと苦心するが、彼等の間には戀の競爭も葛藤も何も描かれて居ない事である。彼等はひとしく一人のかぐや姫を求めて夜となく晝となくその家の周圍をうろ〳〵して居りながらお互同志何等の交渉もなく、反撥もなく、共同の動作もない。この一人々々交渉をもたせずにかく事は、最も單純で容易ではあるが、これらは到底實人生を描いたものといふことは出來ないわけである。こんな點にも竹取の幼稚さがある。

この外數へれば色々の缺點があるであらうし、竹取物語の内容は決して深刻な人生批評とすることは出來ないかも知れない。又そこに深遠な哲理が含まれてゐるとは思はれない。

然し從來の古事記・日本書紀・風土記の類が傳説を傳へたものであつて何等個人的創作になる物語らしいものを有して居なかつたのに對して、多少傳説を取り入れた部分はあつたにしても、とに角、想を構へて筋を組み立てた日本最初の個人的創作になる物語で、個人的創作になるお伽噺の祖といふことも出來るし、假名文學の祖ともいふことが出來、日本文學史上重要なる地位を占めるばかりでなく、過去一千年の試煉を經て來た竹取物語はかなり幼稚な缺點はありながらも依然として不朽の名作としてのその價値を失ふものではないといふべきである。

第二章　伊勢物語

(1)　成立

竹取物語が傳説系統の物語の始祖であるに對して、伊勢物語は和歌の系統を引いた歌物語の最初の作品である。從つてこの二つの物語は、我が國の物語史に、相並んで重要な地位を占めるものであるが、竹取は散文に終始し、伊勢は和歌を主として散文を從として居り、その主眼とするところ、またその趣向、方針を異にして居る。竹取物語が傳奇的でロマンチックなのに對して、伊勢物語は歌を中心とし、而も現實的な戀愛歌が主であるので、勢ひ現實的であり、寫實的性質を持つて居るのである。

竹取の成立時代及び作者が不明なやうに、この伊勢物語の成立年代及び作者も詳かでない。作者については古來數説がある。先づ第一は業平の自作であるといふ説。これは藤原清輔が「袋草子」に述べた説であるが、藤岡作太郎氏も、

『伊勢物語を熟讀せよ。その文の、詞簡にして意幽に、感應の痛切なること、業平の歌と軌を同じくするを見れば、この一篇をまた在五の作と推すも、蓋し大過なかるべし。』

といつて、業平の歌と、この物語と、感應痛切なること軌を同じくしてゐる點から、彼の自作であらうと論じて居る。

第二の説は、業平の作を伊勢が補つたとするもの。第三は業平の日記の樣なものがあつてそれを基礎にしてこの物語を作り上げたとする説、是である。第三の説は本居内遠の「伊勢物語論」などの説であるが、第一の藤岡博士の如く、單に作品の風趣のみによつて作者を推定しようとすることは、往々、見當を失しやすいからして、伊勢物語を業平の自作とするのは早計であつて、寧ろ誰か別の人物が、業平の生涯に同情し、興味を持つて、彼のために代辯したものであらうと見る方が穩當である。

次に伊勢物語の成立した年代は、既に作者がわからぬ以上、これまた分明しないのは止むを得ないが、文體の簡古な上から見て、延喜以前のものであらうといふことに、ほぼ一致して居る。この成立年代の如何は作の價値を上下する點には影響しないから、竹取物語とほぼ同時代のものとして置いてよいだらうと思ふ。

(2) 內　容

本篇は、いづれも「昔男ありけり」といふ書き出しの短篇小話、百二十五段から成り立つてゐる。そしてこの男はみな同一の男であつて、事實に求むれば、在原業平を指して居るのである。各段はみなそれぞれ獨立した小話でありながら、この同一の男を以てこの物語全體を統一してゐると見ることが出來る。又、昔男の「昔」は年代上、距離の遠い昔でなくて、その當時に近い世相の一面を描寫したのである。戀愛を中心とした平安人の氣分、情調、趣味を鋭角的に描寫して居るところが見える。

この物語の作者は業平の生涯に可なり興味を持ち、彼の不遇なる境遇に同情を持つて居たに違ひない。作者は、時には業平以外の種々な男女を描き、或は家婢と戀した男、或は田舍の行商人のこと、中には主從の情誼、母子の眞情などをも描いて居るが、主力は業平のことに注いで、一見、業平を主人公のやうにして書いて居る。これは多情多恨な業平について同情し共鳴したがためと思はれるのである。從つて讀者は在原業平について知るところがなければ、この物語の內容をよく味はふことが出來ない。

在原業平は、平城天皇皇子阿保親王の第五子で、母は桓武天皇の皇女伊登內親王である。天長年間に、兄行平と共に在原姓を賜はつた。貞觀中左近衛權中將、天慶中藏人頭に補せられ、相模美濃權守を兼ね、天慶四年五月五十六歳を以て歿した。彼はまた在五の中將と呼ばれたが、伊勢物語が、源氏物語總角の卷に「在五が物語」と呼ばれ、狹衣物語には「在五中將の日記」といはれて居るのは、之がためである。

當時は藤原氏の專橫時代であつて、藤原氏の出でない業平は榮達することが出來なかつたので、藤原氏に對しては不平不滿を持つて居た。たま〳〵文德天皇は第一皇子惟喬親王に御位をお讓りなされる思召であつたが、藤原良房の女明子の御腹である惟仁親王卽ち淸和天皇が遂に御卽位せられたので、惟喬親王と姻戚の緣ある業平の親王に對する同情は、藤原氏に阻まれた自分の境遇に對する不滿と相俟つて、自ら放縱不羈の生活を生んだのであつた。多情多感なる彼の熱情は、情熱的な歌となり、熱烈なる戀愛生活となつたのである。この業平の自由奔放なる戀愛生活を中心として描いたのが卽ち伊勢物語である。

伊勢物語には和歌が二百九首含まれ、その大部分は業平の作歌であるが、中九首は萬葉集に見えてゐるもの、また古今集・古今六帖・後撰集等の業平以外の作と見られるもの凡そ廿五首ある。

そして第一段の初冠に始つて、最後は業平の辭世の和歌の段を以て終つてゐるのである。この歌物語の形式は既に古事記に於て見られるところであつて、伊勢物語の作者はそれから思ひついたにちがひあるまいが、伊勢の方は、古事記よりも、もつと短い說話が多く、また古事記の如く長歌を挿入したものは見當らない。これは平安期に於ける長歌の衰頽を示して居るものである。また古事記の戀愛挿話は眞摯で線が太いが、伊勢の方は線が細く、感傷的な空氣が濃厚である。玆にも時代の推移を見ることが出來る。

(3) 風趣—文學的價値

伊勢物語は、いづれかといへは、平凡な短い戀愛ロマンスに過ぎない。それでゐて讀者を惹きつける所以はどこにあるだらうか。それは百二十五段の各段が、自然、一人の經歷談となつてゐて、一種の氣分、情趣がそれを統一してゐるからである。卽ち個々に獨立してゐるかのやうに見える說話に、作者の主觀が投影して生命を與へてゐるのである。而もその表現が簡勁素朴、誇張を加へず、修飾を施さず、適度に文章を引き締めて、短歌と相俟ち相倚つて、情趣、詩情を生み出してゐる。表面單純に見えて、存外複雜味を滿へ、印象が强いところに長所を持つ。この點はこの物語の一大特長で、千言萬語を連ねる效果に遙かにまさるものがあるのである。

伊勢物語は前に述べた通り、業平の情事が多く、而も可なり深刻な點に觸れてゐる所もある。作者は戀にからまる謎、戀の祕密を捉へることに深い興味を持つてゐるのである。今、四段の西の對の一節を引いて見れば、

『むかしひんがしの五條におほきさいの宮おはしましける西のたいに住む人ありけり。それをほいにはあらで、ゆきとふらふ人、こゝろざしふかゝりけるを、む月のとうかばかりに、ほかにかくれにけり。ありところは聞けど、人のいきかよふべき所にもあらざりければ、なほ、うしと思ひつゝなんありける。又のとしのむ月に、梅の花さかりに、こぞを思ひ出でて、かの西のたいに、いきて、たちて見、ゐて見れど、こぞに似るべくもあらず。うちなきて、あばらなるいたじきに、月のかたふくまでふせりて、こぞを戀ひてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのゞ〳〵とあくるに、なくなくかへりにけり。』

これは業平の情事であるが、作者は更に、六十九段に於て、業平が伊勢の齋宮と戀に落ち、あわ

ただしい別れをしたことを描いてゐる。短いながら、その戀愛徑路が自然であり、曲折があり、波瀾があり、餘情が多い。この一段が讀者の强い共鳴を得て、伊勢物語の題名を生んだといふ說さへある程である。

作者はかくの如く業平の情事を熱心に取り入れてゐるが、また普通人の戀をも題材として採り入れ、すぐれた戀愛ロマンスを作り出してゐる。例へば廿三段の、

『むかし田舍わたらひしける人の子ども、井のもとに出でゝあそびけるを、おとなになりければ、男も女もはぢかはして、ありけれど、男は此の女をこそえめとおもひ、女も此の男をこそとおもひつゝ、おやのあはすることも聞かでなんありける。さてこのとなりの男のもとより、かくなん

つゝゐつゝ井筒にかけしまろがたけ
おひにけらしなあひ見ざるまに

女かへし

くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ
君ならずして誰かなづべき

かく云ひ〳〵て遂に本意の如くあひにけり。

さて年ごろふる程に女の親のなくなりてたよりなくなるまゝに、諸共に云ひかひなくてあらんやはとて、河内國高安郡にいき通ふところいで來にけり。さりけれど、此のもとの女、あしとおもへるけしきもなく、出だしたてゝやりければ、男、こと心ありて、かゝるにやあらんと思ひうたがひて、前栽の中にかくれゐて、かの河内へいぬるかほにて見れば、此の女、いとようけさうじて、うちながめて、

風ふけばおきつしらなみたつた山
よはにや君がひとりこゆらん

とよみけるを聞きて、かぎりなく、かなしと思ひて、河内へも、をさをさ、かよはずなりにけり。

さてまれ〳〵かの高安にきて見れば、はじめこそ、心にくゝもつくりけれ、今はうちとけて、髪をかしらにまきあげて、をもながやかなる女の、手つから、いひかひを取りて、けてのうつはものにもりけるを見て、心うがりていかずなりにけり。さりければ、かの女、やまとのかたを見やりて、

君があたり見つゝを居らん伊駒山
　雲なかくしそ雨はふるとも

といひて、見いだすに、からうじて、やまと人こんといへり。よろこびてまつに、たびたび過ぎぬれば

君こんといひし夜ごとに過ぎぬれば
　たのまぬものゝ戀ひつゝぞをる

といひけれど、男すまずなりにけり。』

これを延長すると、立派な短篇小説が出來るのである。

この外、八段には有名な東下りがあり、更に作者は、母子の至情にもふれて、八十四段には、涙ぐましい場面を描出して居る。

『昔男ありけり。身はいやしながら、母なむ皇女（ひめみこ）なりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しば〳〵えまうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるほどに、師走ばかりにとみの事とて御文あり。驚きてみれば、こと事はなくて、

老いぬればさらぬ別のありといへば
　いよ〳〵見まくほしき君かな

となむありける。これを見て馬にも乘りあへず參るとて、道すがら思ひける。

世の中にさらぬ別のなくもがな
　千代もと祈る人の子のため』

ほんの短いものではあるが、印象的に描いて居る所に心を惹くものがある。そして最後は、

『昔男わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、
　遂に行く道とはかねて聞きしかど
　　きのふ今日とは思はざりしを』

と、有名な業平の辭世の和歌を以て終つて居るのである。

要するに伊勢物語は情熱的抒情的な業平の人物を中心として、その情熱生活の展開を眺める所に無限の興味があり、獨自の文致を以て、平安時代の戀愛相を如實に描いたところに價値があるといふべきである。學者によつては、徳川時代の西鶴などもこの物語の影響を受けたと説いて居るのである。

第三章　源氏物語

(1)　紫式部の閲歴

我々はここで平安時代文學の代表作であり、國文學史上の傑作である源氏物語に就いて論ずることとなつたのであるが、先づその作者たる紫式部の出身、閲歴を述べることとする。

紫式部は文筆學問に長じた藤原爲時―越前守正五位下―の娘で、その幼少から聰明であつたことは、書に心入れたる親が「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸福なかりけれ」と常に歎いたといふ日記の記事を見ても知ることが出來る。

初めは藤式部と稱せられてゐたが、後に紫式部と號せられた。式部は父爲時の官位式部丞から來たのであらうが、藤式部が紫式部になつたに就いては古來多くの説がある。しかし紫の上の事をすぐれて書き出でたるゆゑ紫式部と號せられたといふ河海抄の説が最も有力である。

生歿に就いては未詳であつて、これにもいろいろの説があるが、父爲時の年齢關係及び兄と姉とがあつたといふ事實から、圓融天皇の天元元年に生まれたとする説が有力である。歿年は長和五年とする説、その他があるが、長和五年とすると享年三十九歳と推定されるのである。

式部の家は閑院左大臣冬嗣六男の良門を遠祖とする名門であつた。同門の中には文人歌人として名ある者が少くない。曾祖父兼輔は堤中納言と稱せられて、延喜時代に歌人として令名があり、祖父の雅正、その弟清正、叔父の爲頼、皆優れた歌人であつた。父の爲時は、歌人としてよりも寧ろ詩文に長じてゐて、又儒學の造詣が深く、その作詩は「本朝麗藻集」に數十首載せられてゐる。又兄の惟規も歌人として有名で、「惟規集」は彼の歌を集錄したものと見られて居る。母は右馬頭藤原爲信の女で、冬嗣の一男長良を遠祖とする名家である。かかる父と兄とを持つた彼女が「史記」などを學習して、支那文學の知識にも造詣があつたのは當然である。

式部は二十二歳の頃、左兵衛權佐、藤原宣孝と結婚した。そしてその翌年、長保二年には二人の間に女賢子が生まれた。この賢子は後に正三位太宰大貳高階成章に嫁して大貳三位と改めた。しかし式部の結婚生活はまことに果敢なく、結婚の翌々年長保三年四月には、夫宣孝と死別しなければならなかつた。その結婚生活が幸福であつただけに、その淋しさはまた深く切なるものがあつた。一度は出家せんとまでしたが、幼い賢子をかかへては如何ともすることが出來なかつた。

この生活の懊惱と夫への追慕とが、畢生の大作「源氏物語」を製作させた動機の一つとなつてゐることは看過出來ないことである。其後五、六年宮仕へするまでの寡居生活に於て、源氏物語の一部は染筆せられたのである。そして寛弘五年頃には、少くともその或部分は世に流布してゐた。それは既に宮仕へして寛弘五年十一月若宮（後一條天皇）の御五十日の祝儀が行はれた日、この日の宴に醉つた左衞門督公任から「あなかしこ、此のわたりに若紫やさふらふ」と戯れを受けたとある日記によつて、此頃既に少くとも若紫の卷は世に知られてゐたことがわかるのである。彼女が藤原道長に見出だされて、一條天皇の中宮上東門院彰子に仕へたのは、寛弘四年十二月二十九日で、年三十歳であつた。その後晩年まで宮中に仕へたのであるが、これによつて、彼女が當時宮廷生活の樣子に通じ、華やかな社交界を知つたことは、源氏物語を書くに當つて相當役立つたことと思はれる。從つて、源氏物語の成立は詳かではないが、夫に死別した後、寡居生活の五、六年の間に筆を執り、寛弘の初め頃には一部を書き上げて、宮仕への間も筆をつづけて可なりの年月を要して完成したものといはれる。

式部の性格についてはいろ〳〵の批評があるが、飽くまで內省的な性格であつたと思はれ、表面は靜かに振舞つたが、また感受性の人一倍强い性格であつて、このために內面的には絕えず自己批判に苦しみ、かなり複雜な生涯を生きた。この性格と作品との間には、極めて緊密な聯關があるのであつて、式部の偉大な文學への貢獻は、その生得的な性格の必然の所產であつたといふ事が出來るのである。

(2)　源氏物語の梗概

さて、この紫式部によつて書かれた源氏物語の特色、價値を檢討するに當つて、先づその梗概を敍して見る。

一

いつの帝の御代であつたか、女御や更衣や、帝の御側に居る婦人の數多居る中に、身分はよくないが、類ひなき容色によつて君寵を一身に集めた麗人があつた。賜はつた室の名によつて桐壺の更衣といふ。程なく御胤を宿して玉の如き皇子を生んだが、人々の嫉み憎しみの積りか、皇子の三歳になられた年、重い病氣に罹つて、やがて果敢なくなつた。帝の御落膽の御樣子は見奉る者の袖にも露おくばかり。それからは、いづれの后妃がたの方へも絕えて御見舞ひなさらず、唯々

涙にひたつて明かし暮して居らせらるる。后がたの中には、これを見て、死んだ後まで人に迷惑をかけることかと、亡き人を怨むもあつた。其のうちに皇子は次第に生長される、生長されるにつれて、その光り輝くやうな容顔は、いやましに其の美を増して來る。これより先、正后弘徽殿の女御の御腹に一の宮が生まれさせられたが、此の若宮の貴やかさには比べやうもない。從つて帝も若宮をのみ愛して、一の宮に對する御心むけが甚だ淺かつたので、弘徽殿方の人達は太子の位が、もしや若宮に落ちはせぬかと頻りに心配し出した。丁度其の頃高麗の國から、えらい人相見が來たので、試みに皇子を公卿の子の分にして見せられると、相者は驚いて、「これは帝王の位に坐る相のある人だが、帝位に上れば天が下の亂れとなるであらう、但し帝王輔佐の位に居らば結構な行末になりさうに見える」といつた。帝も思ひ合はせられるふしあつて、皇子に源姓を賜はつて臣下に列せしめ、公卿中第一位の左大臣の女葵の上を配して、左大臣に皇子の後見を託された。此の皇子が即ち此の小説の主人公で、「源氏」「光君」「光源氏」等の名によつて、長く美男子、好色漢、わけ知りの本尊と崇められた人物である。「ひかる君」といふ名は高麗人のめでてつけたものだといふ。

帝は桐壺の更衣を亡つてから、他の后だちには見返りもせずして、獨り悲しみに耽られたが、たま〳〵先帝の四の宮が、顔容桐壺の更衣に生き寫しと薦むる人があつて、早速入内の御沙汰が下り、故人の愛はやがて此の新しき女御に注がるることになつた。これを藤壺の女御といひ、出家されてからは薄雲の女院といふ。かくて、帝は頻りに藤壺の方に通はるる。時折は源氏をも伴なはれて、「母なき子に憐みをかけ給へ」「亡き母上によく似て居られる、母と思うて懷き親しめ」なぞと言はれることもあつて、藤壺は源氏を可愛い子と思ひ、源氏も藤壺を懷しい方と慕つたが、此の準母子の愛が、いつしか男女間の戀愛と變つて、源氏は白熱の愛を以て藤壺に迫る、藤壺も情に絆されて否みおほせず、遂に源氏が不義の胤を宿すやうになつた。

源氏十六歳の頃には、已に好色の名が事々しく噂に上るやうになつた。位は已に中將になつて居られたが、内裏に居勝ちで葵の上の方へはめつたに行かれぬ。葵の上は綺麗で氣高くて、おとなしい方であつたが、冷やかにかしこまつて固くなつて居るだけで愛嬌が無いので、とかくに足が遠くなつたのである。五月雨の晴れ間なき頃であつた。源氏が物忌に籠つて内裏に居られると、左大臣の方よりつれ〴〵御慰めの御相手にとて、葵の上の兄なる頭の中將があがつた。中將は源氏の心許した友で、好色道の仲間又競爭者であり、源氏と同じく北の方を外にして餘處あるきに忙がしかつた男である。燈の下に兩人書物など展げて見て居る中に、話頭はいつか例の好色沙汰

に移つて、「あなたには珍しい艶書を澤山に御持ちであらう、目の養生に御見せ下され」といふ。「普通のは見せてもよいが、極祕の珍な奴は、たやすくは見せられぬ。お前にこそ振つたのがあらう、それを見てから、我が厨子も快く開かうよ」などといふ事から、謂はゆる雨夜の品定めが始つて、「難のない女はめつたに無いものと、やう〳〵悟りました。文字や歌が一寸巧いなどいふのは隨分あるが、その文字や歌が、どの位出來るかと改めて調べて見ると、滿足なのは殆ど無い。親許に居て神妙に取りつくろひ、藝能も多少敎へ込まれて、世の噂に並ならぬ優れ者と傳へられたのも、さて添うた上で見劣りのせぬ者はありませぬ」と中將がいへば、源氏は「女を上中下の三つの品に分ければ、どんな女をどう位附けしたものか。素生は高いが零落れて人氣なくなつたのと、地下人の公卿などに成り上つたのと、優り劣りはいかが」などいはるる處へ、左馬ノ頭、藤式部ノ丞といふ二人の好色者が來た。それより甲論乙駁「おちぶれたのと成り上りとは、共に中の品に置くべきもので御座りませう」。「有りがひなく荒れ果てた葎の門に、思ひがけぬ可愛いのを見つけたは乙なもので」。「父や兄が惡さげに肥え太つて居る其の女に、品よく才藝のあるのを見つけたのも面白いもので」。「一家の取締り夫の身のまはりの事などには、至つて氣が利いても、夫の公向きの苦樂をば一向合點せぬので、外であつた事を話しても無益と默つて居ながら、なほかれに一通りの才があつて、思ひ餘る事の相談も出來るならばと、馬鹿らしくもなり、泣きたくもなつて、外方を向いて思ひ出笑ひなどして居ると、『何が可笑しいの？』などと附かぬ事をいうて、げつそりして居るなどは口惜しくはあるまいか」。「いや品によらず、貌によらず、ねぢけた心が無くて實貞なるものを生涯の友とするに限る」。「いや某は曾て素直で氣の沈んだ可愛らしいのと契つて子まで生ませたが、其の女、中ごろ仔細あつて影を隱し、其の後更に消息がわかりませぬ。どうなつた事かと、始終案じられ申す」。「某前方さる博士の娘と慇懃にして御座つたが、或日訪れると、折ふし不快だといつて、物を隔てて、『近頃風病で極熱の草藥を服し、口が臭いによつて對面いたしませぬ』と言つた、畠は畠ながら、極熱草藥の學者がりには、いやはや恐縮仕つて」などと、善き方、惡しき方、取り〴〵に擧ぐる中にも、源氏は始終藤壺一人の有樣を思ひ續けて、世に藤壺の女御ほど圓滿な方はないと思ふにつけても、それが父帝の女御かと思へば胸のふさがるを覺えた。其の中に、此の物語がどちらにきまるともなくして曉になつた。

二

雨夜の品定めは此の作全篇の大元締で、これに現れた女人觀は、概ね後に現れる女性に照應して

來るのである。さて五月雨が晴れると、源氏は久し振りで左大臣の方へ行かれた。葵の上が例の立派な打ち解け難い容子をして居られるので、少々うんざりして居られると、夕暮になつて女房達が、「今夜は內裏から此の御殿の方角が塞がつて居ります」といふ。「それでは我が邸の二條の院も同じ方角である。何處へか方違ひせねばなるまいが、何處がよからうぞ」と言はれると「御出入の紀ノ守の中河の家は如何で御座りませう」といふ。それがよからうと、早速紀ノ守を召して仰せ付けられる。紀ノ守は「中河の家は、あやにく父伊豫守の後妻などが移り住んで混雜して居りまする、萬一失禮などがあつては」と迷惑がつたが、源氏は「其の人近いのが却つて面白い。女遠き旅寢は物恐しからうに、ただ其の女どもの几帳の後に寢ませよ」といふ調子の粹な仰せに事きまつて、早速牛車して中河に出かけられた。種々の饗應があつて夜が更けると、人々は皆寢む。源氏は伊豫守の後妻なる空蟬の事が氣にかかつて、まどろみもせずに居ると、程近く女の聲で、我が噂であらう、「成るほど綺麗な御方だ、畫ならば親いてはつきりと拜まうものを」といふのが聞える。空蟬らしい。その中に同じ女の聲して「中將（女房の名）は何處に居る、淋しいに此方へ來ぬか」といふと、他の女房の聲して、「中將は湯あみに參りました、やがて戻りませう」といふ。源氏は此處ぞと、徐かに空蟬の室に入つたが、上なる搔卷を推しやるまで、女房の中將が戻つたと思うて居たらしい。「中將を召されたによつて、人知れず思ひ焦れた甲斐があつたと喜んで參つた」と言はれると、びつくりして、物におそはれたやうに悸えたが、鬼神も荒だつまじき御姿を見れば、聲も立てられず、「人違ひで御座りませう」と息の下にいふを、「思ふ事をば少し話したいによつて」と抱きかかへて、我が室へと行かれる。折しも中將は戻つて來たが、此のさまを見て驚いて居ると、源氏は「夜明けに迎へに來い」と命じて、悠然として空蟬を我が室に連れ込まれた。

源氏は終夜口説いた。空蟬はたうとう從つた。けれども一度從つただけで、其の後は全く源氏の切なる戀を却けた。對空蟬の件は此の小說に現れた源氏の最初の好色沙汰で、源氏が五十餘年の生涯中、彼の戀を却けたのは、此の空蟬と槿の君と、唯二人だといはれる。

曉になつて源氏は左大臣の邸に歸つたが、昨夜の不成功が悔しくて堪らず、空蟬の弟の十二三歲なるを手懷けて案內させ、夜に紛れて再び中河の家に入つた。折しも、空蟬は紀ノ守の妹なる軒端の荻と碁を打つて居たが、空蟬は側面を見せて細やかなる姿が品よく見え、軒端の荻は正面を向いて胸をあらはし、色白く粒々と肥えて花やかに愛嬌がある。其の中に勝負もついて、空蟬が軒端の荻に今夜は一緒に此處に臥めと勸める樣子。やがて寢に就くと、若い方はいぎたなく直ぐ

に舟を漕ぎ始めた。源氏は様子を窺つて、子供の導くままに几帳の帷を引き上げて入られると、空蟬は衣服のけはひの著しさに源氏と悟つて、しづかに臥房を滑り出でる。源氏は心づかずに近よつて見ると、思ふ人とは違ふ様子、心やましくはあるが、此のままに歸るも本意なく、又かくまで逃げる空蟬を追ひまはすも甲斐なきわざと諦めて、睡つて居るのを起されると、やうやう目を覺まして淺ましく呆れたが、世の中を知らぬにしては存外に洒落れた性質で、さまでは思ひ惑はず、かくて源氏は思ひかけぬ花を手折られたが、空蟬に對する希望は終に失敗に終つた。

此の頃源氏は六條の御息所へ足繁く通はれたが、其の序に、五條のあたりに住む乳母の病氣を見舞はれたことがあつた。と見れば、隣りに小さな洒落れた家があつて、折しも簾を透して若い女の影が見え、その家の前の垣根には、白い夕顔の花がやさしく笑みの眉を開いて居る。源氏は例の物好みに、隨身をやつて一房所望されたが、花を載せて捧げた扇や歌、

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる花の夕顔

の面白さに、床しくなつて、乳母の子惟光に女の素生を探らせられると、それが頭の中將が雨夜の品定めにほのめかした女で、子まで生んだ仲ながら、中將の北の方の迫害を恐れて、此の假の宿に身を潜めて居るのであつた。段々通うて見ると、重々しい方は無いが、柔和であどけない所に何とも云はれぬ愛嬌がある。かうして居る中、知らぬ間に他へ移ることもあらば、尋ぬるよすがも無くなるであらう。寧その事、我が二條の院へ迎へ取らうか、とにかく此の五條の假の宿を連れ出してからの事と、八月十五日の夜、「何處か物靜かな所へ出かけて長閑に語らはう」といはれると、「氣味がわるい」といふ。「何、狐でもえいさ、まア瞞されて御覽よ」といふ調子で、車に合乘して邊近くの兼ねて知る寺院に連れ込まれた。これが後の人の夕顔と呼んだ女で、此の時供したのは右近といふ腰下一人である。寺に着いて間もなく夜は明け離れる。今迄は夜のみ逢うて居たのが、晝の光に相見て、女は男の品高きに驚き、男は女の可愛らしさの彌ましたのを感じた。源氏は「隔て心のつれなさに今迄明かしもしなかつたが、今日は御互に名乘らうではないか」といはれると、「どうせ漁師の子ですもの」と答へる容子のあどけなさに、此の溫和な心持を、嫉妬深き六條の御息所に幾分たりとも持たせたいと思はれる。さて憧れ心地の樂しみに日を暮して、其の夜半の事、源氏の夢に妖しき女が現れて、「我を、餘處にしてかかる女を寵し給ふ、恨めしさよ」といふかと思ふと、恐しい權幕で傍なる夕顔を搔き起さうとする。愕然と目を覺ませば、燈火は消えて陰森の氣が堂を壓して居る。夕顔は小さくなつて魂も消え入るばかり。源氏は驚いて、太刀を拔いて、枕もとに置く、右近を呼び覺ます、手を打つて宿直人を召す。其の中

に寺僧が紙燭を持つて來たのに照らして見ると、夕顏の枕上に夢に見たと同じ女が、面影に見えて忽ち消え失せた。夕顏はと寄つて見れば、身はただ冷えに冷えて息は疾くに絕えて居る。

三

源氏は此の意外な出來事に逢うてから、瘧病をわづらつて、加持呪ひなどいろ〳〵に手を盡くされたが、おこたらぬ。其のうち、北山に高德の行者が居つて祈禱の效驗著しき由を聞いて、早速行かれたが、此處で圖らず、紫の上を得られた。

紫の上は此の作の女主人公で、後に源氏の正室となる人、紫式部の理想婦人と稱せられる人である。これ迄源氏は藤壺の女御に人知れぬ思ひを寄せて、道ならぬ戀のほむらに胸を焦がして居たが、此の北山に籠つた折、僧坊の傍なる小さき庵に、藤壺の宮によく似た十歲ばかりの少女の居るのを見た。尋ねて見ると、似て居るも道理、藤壺の宮の兄君式部卿宮の娘で、仔細あつて祖母君が養つて居るのと解つて、「親のつもりで育て上げませう。行末永く連れ添ふつもり、何卒われらに賜はりたく」と懇望して歸られたが、歸ると間もなく、藤壺の宮が病の爲に里邸に下つて養生さるることとなつた。源氏は今、藤壺に似た少女の紫の上を得て一分の慰めは得たものの、十歲にも足らぬおぼこ娘の行末が待遠しい、處へ藤壺の里邸退出は、又と得られぬ機會である。源氏の戀は餘と燃えた。世間の手前も、我が名譽も、良心の呵責も、父帝への憚りも、此の餘の中に一切燒き盡くされて、心の中は藤壺床しさの一念ばかり、御側附きなる王の命婦を媒にして頻りに迫る、其の中に、藤壺も遂に情に絆されて、重き身となられ、皆人の芽出度い〳〵と壽ぐ間に、獨り暗愁に淚を呑んで一日々々と過さるる。月滿ちて擧げられたのは源氏其のままの玉の御子であつたが、帝は事實を御存じなかつたらしい。此の御子が卽ち後の冷泉帝で、此の事を知つて居るのは王の命婦と夜居の僧都と、只二人だけ、而して此の事は、其の後常に源氏藤壺の心を腐蝕して、其の言行に哀愁の影を投げることになつた。

其の年の秋、紫の上の祖母君が亡くなられた。孫女の事をば懇ろに源氏に賴んで逝かれたので、源氏は父式部卿からの迎への來る先を越して、紫の上を二條の邸に迎へ取り、親子の格で、手習、和歌、琴を初めよろづの藝能を敎へ込み、其の成人を一日千秋の思ひで待つて居る。

さて其の後に源氏の關係した女性の主なるものは、末摘花、源の典侍、花散里、朧月夜の內侍、明石の上などで、是等の女性との遭逢をば、いろ〳〵の季節、いろ〳〵の場合、いろ〳〵の土地、いろ〳〵の境遇に絡んで巧みに寫してある。末摘花は故常陸の宮の姫君で、家道衰へて荒れ果て

た屋敷の破屋に果敢なく世をすごして居られたが、物恥ぢする内氣な性質ながら貞實な所があつて、初めは一向源氏に親しまなかつたが、一たび身を任せてからは堅く源氏を信頼するやうになつた。源氏が須磨の謫居に引き續いて途絶えて居た場合に、細き煙も立て兼ねて、奉公人が日々に暇を取る、身寄りの者が邸宅を賣れ、家傳の什器を賣れと勸める、羽振りよき姉が一緒に夫の任地へ下れと强ひる。その他いろ〳〵と説き迫られても、父の遺品は手離されぬ、源氏の見放し給ふ筈がない、というて一向聞き入れず、遂に源氏に迎へ取られるやうになつた。此の姫君、貌醜く、殊に鼻の尖頭が著しく紅いのを、夜のみ逢うて心づかなかつた源氏が、曉に見出だして淺ましがつた所や、初めは侍女代作の歌で無事に間に合はせて居たのが、後に似もつかぬ歌を詠んだ可笑味などが巧みに寫してある。此の末摘花は源の典侍、近江の君と共に作中の三滑稽と云はれる。哀的滑稽の好例である。源の典侍はお白粉で皺を隱すといふ沙汰過ぎた老嫗で、これが内裏の花の宴の御引けに源氏に挑む、折しも、前から典侍に關係のあつた頭の中將が來合はせて、殿上人風の穩やかな鞘當てがある。これも息つぎの一滑稽。花散里は桐壺帝の女御、麗景殿の妹の三の君、内裏ではかなく源氏に逢うた名殘り、長く其の關係を續けることになつた。氣焰は揚らぬが、穩やかな嗜みのよい婦人で、後に源氏の邸に迎へ取られて、兒女教育の任に當ることになる。

源氏が二十歳の頃、桐壺帝が位を下りて、源氏の兄君一の宮が帝位に卽かれた。朱雀帝と申す。太子は藤壺腹の皇子（實は源氏の御子）と定まつて、源氏の大將が其の御後見となつた。其の頃葵の上が懷妊された。同じ頃、先帝の女三の宮が齋院（加茂の社の神主）に立たせられて、四月御禊の儀式があつた。公卿だちが數多美々しく裝うて供奉さるる中に、源氏も特別の宣旨によつて供奉さるることになつた。これを聞いて、見物人が四方八方から集り、棧敷、物見車が隙なく立ち連なつて、一條の大路は錐を立てる隙も無い位である。葵の上も女房たちの供車を數多從へて行かれたが、左大臣家の威勢に恐れて皆人席を讓る中に、古びた網代車二輛、高く止まつてどうしても避けぬのがあつた。六條の御息所の乘物である。其の中、供人共が一つ言ひ二つ言ふ間に喧嘩は次第に大きくなつたが、多勢に無勢、御息所の車は散々に打ち摧かれ、人の情の借車にやう〳〵恥を包んで歸られた。

さる程に、葵の上の產月も次第に近づく中に、物怪に取りつかれていたく惱まされた。聖僧だちの加持祈禱も更に效驗がない。其の中次第に昂じて、遂には頻りに加茂の車爭ひの遺恨を口走るやうになつたので、初めて六條御息所の生靈の祟りなることが明らかになつた。人々淺ましがつ

たけれども仕方がない。其の中に弱りに弱つて、男の子を産むと、やがて果敢なくなられた。此の子が卽ち夕霧である。

源氏は御息所の執念深いのを見て今更に氣味惡くなつた。葵の上に現れた樣子から推すと、先に夕顏を取り殺したのも、正しく御息所の生靈である。かう思ふと、ぞつとしてそれからは自然に足が遠くなつた。御息所も思ひ當る事の無いではない。此の頃は源氏を慕ふにつれて、嫉妬の情が抑へても抑へきれず、ふら〳〵となるかと思へば、夢のやうな淺ましき樣を見て、我に返ることが屢々ある。源氏の通はれぬも、その爲であらう。あゝ恥づかしい、寧そ我から避けて逢はぬやうにしようと、後には源氏が訪はれても、事に託けて逢はぬやうになつた。其の後、源氏を思ひ切る爲、女の齋宮になつたのに伴なうて伊勢に下られたが、再び都に歸つて、死ぬる前に女を源氏に託し、女に對する源氏の親切が親子の關係以上に進まぬやうにくれ〴〵も賴み入つて歿られた。此の女が卽ち冷泉帝（源氏の子）の女御、秋好の中宮で、年頃になられてから、源氏は屢々好色心をほのめかしたが、遂に果さずして女御に進むることになつたのである。

葵の上の忌が明く間もなく、紫の上との新枕があつた。源氏二十一歳、紫の上十四歳の年の冬で、紫の上は今まで親と崇めた人の理なき振舞に驚かれたが、これより長く正室の地位に立つて鴛鴦の睦まじき契りを重ねられた。其の翌年、桐壺院崩御の事がある。藤壺はやがて三條の宮に移られ、翌年落飾して女院となられた。薄雲の女院と申す。

四

源氏が藤壺の宮と道ならぬ契りを結んでから、二人とも人知れぬ苦悶に胸を痛めた中にも、藤壺は殊に淺ましき行ひに愧ぢて、桐壺院の御心が痛はしく、我が子の東宮が源氏に似たのを見るのもつらく、從つて成るべく源氏と顏を合はす機會を避けて居られたが、源氏はなほ藤壺を戀ふるあやにく心を制することが出來ず、隙を窺うては五月蠅く附き纏ふ。殊に、桐壺院が崩れまして三條の宮に移られてからは、物狂はしきまでに烈しくなつた。或時の如きは强ちに迫られて急病を起される、人々が驚いて馳せ集るといふ騷ぎに、源氏は逃げ場を失つて塗籠（土藏）の中に隱れ、翌日の夕暮になつて漸く逃れ出でたなどといふ事もあつた。源氏の不謹愼なる好色沙汰は啻にこれのみでない。葵の上の父左大臣と仲惡の右大臣（弘徽殿の女御の父）に朧姫といふがあつて、それがいつかの花の宴の朧夜に、大內で源氏と怪しい契りを結んであつたが、其の後隙を窺うては其の仲らひを續けて居る。本來右大臣家の望みは、此の姫を新帝の女御にしたいといふに

あつた。從つて源氏の爲に其の目的を破らるるのは甚だ本意でないので、源氏との仲を割き、弘徽殿の後見で、新帝の內侍に進めたが、內侍も源氏も、兩人ながら思ひ切ることが出來ぬ。其の中に、內侍が瘧病を患つて養生の爲に里邸に下つた。源氏はこれを好い機會にして頻りに通つたが、內侍の居間に一夜を過しての或曉、俄に恐しい雷雨があつて、人々頻りに慌て騷ぐ、源氏は狼狽して御帳の內に人目を避けると、折しも右大臣が見舞はれて、「烈しい雷雨で驚かれたらう、心地は如何」など問ふ間に、御帳の裾より男の帶の出て居るのが目にとまる。怪しいと思ふ中に、手習ひした疊紙の落ち散つて居るのを認めて、取り上ぐる序に、几帳の內を見れば、つゝましからぬ樣子して寢て居る男があつて、紛ふ方もなき源氏である。淺ましく、目ざましく、心病ましけれど、直面に顯すわけにも行かず、そのまま疊紙を取つて弘徽殿に參り有りし次第を語られる。これを聞いた太后の腹立ちも一通りでない。源氏の君を初め左大臣一家の我儘も餘りと云へば甚だしい。葵の上を今帝に奉らせむとすれば、引き違へて源氏の君に添はす、朧姬を源氏の君に妻はせむとすれば先を越して葵の上を添はせる、それさへあるに、女御にも成さうと思ふ朧姬を、我等の目を偸んで弄ぶとは何事ぞ。察するに、源氏の君の今帝に快からず見ゆるは、必ず東宮（源氏の子）の御代を急がるるのであらうといふやうな事になつて、それよりは源氏の爲に安からぬ事が日に〳〵加はつて來た。

桐壺院在世の中は源氏の勢に並ぶものもなかつたが、院崩御の後は、政權が全く右大臣家に移つて、左大臣方は火の消えたやうに衰へる、これと共に源氏の威勢も亦もとのやうでなくなつて來た。殊に朧姬との關係が原因になつて、世の中が益々煩はしくなつて來る。此のままの都住居は朝廷に恐れあり、身の爲にもなるまい、暫く都を遠ざかつて謹慎の意を表さうと、紫の上をはじめ人々に別れて、世を須磨の海邊に避けられた。それより都を偲びつゝ佗しい生活を續けらるる中に、翌年の三月一日から三日間にわたつて恐しい暴風雨がある、剩へ源氏の住居に落雷して、此の世も盡くるかと疑はれた。此の嵐の最中に都からの見舞があつて、都にも同じ大風雨のあつた事、怪しき天變といふので仁王會の行はるるといふ事、參內すべき公卿だちが悉く引き籠つて居るので政事が絕えたといふ事がわかつた。此の暴風の和いだ夜の夢に故院が顯れて、「早く此處を去つて神の導き給ふ所へ行け」といふ諭しがあつたが、之と同時に明石の入道にも早く舟艤ひして源氏を迎へよといふ神の告げがあつた。明石の入道は世を拗ねて明石に退隱して居る者で、其の愛娘に明石の上とて絕世の美人がある、それを大事にかしづいてやんごとなき貴人に奉ることを生涯の念願にして居る者である。入道は夢の告げがあると、早速源氏を須磨から迎へて明石

の上を奉つた。明石の上はやがて懷妊する。かくて明石に居ること一年餘にして、七月に歸京の宣旨を賜はつた。仔細は源氏が都を避けて以來、天變地異が打ちつづく、二條の太政大臣（もとの右大臣）が薨去する、弘徽殿が重い病に罹らるる、剩へ帝までが重い眼病を煩はせられて、治療の手を盡くさるるけれども效がない。是等の災禍も畢竟源氏近流の祟りであらうといふ噂のある中に、故桐壺院が帝の夢に現れて源氏を厚遇すべき旨の仰せがある。かくして、源氏は都を去つてより二年にして芽出度く都に召し還さるる運びに至つたのである。

五

源氏の都還りは二十七歳の夏で、これよりの源氏は一段分別ある大人として現されて居る。其の後の梗概を一層かい摘まんでいへば、翌年卽ち源氏二十八歳の年に朱雀帝讓位あつて、御年わづかに十一歳なる春宮の御代となつた。冷泉帝と申す。承香殿女御腹なる朱雀院の皇子が春宮にならせられた。此の御代がはりにより、又々權勢に大變動を生じて、前年權大納言であつた源氏は一躍して內大臣となり、致仕の左大臣は六十二歳の老齡を以て攝政太政大臣になり、頭の中將は權中納言になつた。三月明石の上が女子を產まれる。これにて源氏の子は冷泉帝に夕霧に明石姫の三人となつた。冷泉帝の御卽位間もなく權中納言（もとの頭の中將）の女君が入內した、弘徽殿の女御といふ。次いで六條御息所の女君、前齋宮が源氏の養女として入內された、秋好の中宮といふ。此の秋好の中宮に對しては、前に朱雀院の淺からぬ思召があつたが、源氏は其の裏を攝いて、引き違へて新帝に奉つたのである。これより中宮、女御の後見に關する源氏と權中納言との競爭が始り、幼帝が繪を好まれるといふので、源氏も權中納言も頻りに古今の名畫を集めて繪合はせの會をする。初めは勝負も見えなかつたが、最後に源氏自筆の須磨の繪卷が出たので、皆人感に入つて遂に中宮の勝となつたなどいふ事がある。それから、源氏の子夕霧が頭の中將の女雲井の雁と馴れ睦んで、從兄妹同志の親しみが遂に戀愛の關係に進んだのを、中將が女を春宮に奉る下心があつたので、二人の仲を割く。その爲に中將と母大宮との不和まで起つたが、雲井の雁が戀のやつれに、中將も力なく二人の契りを許す。許されて後、二人の仲は元のやうに濃やかではなくして、夕霧は從兄弟たる柏木右衞門督の寡婦落葉の宮を追ひまはし、なほ其の他に源氏の養女たる玉鬘や、紫の上にまでも思ひを寄せるといふ事がある。空蟬が夫の任地の常陸から都に上る途中、逢坂の關で源氏に逢うて、歌の贈答がある、其の後剃髮して尼になるといふ事がある。明石の上が姫君を具し、都に上つて大井の里に住む。間もなく、姫君の出世の爲に紫の上の

養子にせよと源氏に勸められ、涙を呑んで姫君を手離して、二條の院に渡す。其の後明石の入道が一片の手紙を殘し、世を捨てて山奥深く行方知れずになつたといふ哀れな物語がある。源氏三十一歳の時、藤壺入道の宮が薨去さるる（三十七歳）。其の折に、冷泉帝が夜居の僧都より源氏の子たる事を聞かされるといふ事がある。冷泉帝源氏の邸へ行幸の事がある。源氏が夕顔の子玉鬘を得た變化に富んだ話がある。三十四歳の時、六條の院を營んで、今まで關係した多くの情人等を膝許に住ませるといふ事がある。管絃の御遊を初めとして蹴鞠、賭弓、節會、船遊、住吉詣、法華經供養等、平安朝的の優雅なる催しの記事が度々ある。明石の女御が春宮に上らるる事がある。源氏が朱雀院の女三の宮を迎へてから、紫の上の境遇が一變する。後、女三の宮を頭の中將の子柏木右衞門督に犯されて懊惱するといふ事がある。六條御息所の怨靈が紫の上に取り憑いて縡切れさするといふ事がある。源氏が内大臣、太政大臣を經て遂に太上天皇の待遇を受け六條院と稱されたが、五十一歳の時紫の上に先だたれてから、哀れを極めた生活を送つて、やがて薨去するといふ事がある。其の他いろ〳〵の物語がある中で、最も人の感を惹くのは、玉鬘を養ふ顚末と、夜居の僧が冷泉帝に祕密を語る所と、女三の宮に關する事とであらう。

源氏は夕顔を失うてから、その優しい氣立と果敢ない最後とを思ふにつけ、六條院に移り住ませた誰れ彼れを見るにつけ、彼の女無事にあらばと偲ぶことが度々であつた。で、彼の夜以來我が邸に使うてゐる侍女の右近に、夕顔が遺兒の在處が、若し知れたらばひそかに知らせよと、兼ねて命じておいたが、二十年近く經つて源氏三十五歳の時、右近が長谷詣での序に、偶然その玉鬘を見出して、之を源氏の手許に養ふといふ物語は……夕顔が亡くなつてから間もなく、玉鬘の乳母の夫が太宰の少貳に任ぜられて筑紫の肥前へ行つた。少貳夫婦は玉鬘を任地に伴なひ、我が子の分にして數人の實子と一緒に護り育てたが、玉鬘十歳の時に、少貳は重き病に罹り、姫君をば必ず都に具し奉れと遺言して亡くなつた。それより年經るに從ひ、姫君は母君の愛らしさに父君の品格さへ加はつて輝くばかりに美しくなる。近國の身分ある者共が之を聞いて、我れ先にと妻問ひする。乳母は五月蠅がつて「容色はとにかく、生まれつきの片輪で人には見られぬ、行く〳〵は尼にするつもり」などいふと、「少貳の女は片輪さうな、可惜ものを」など言ひはやして遠退く中に、太夫の監というて、近國名代の荒くれ武者、これが一人執念く附き纏うて手を引かぬ。後には少貳の子等を語らうて内外から攻め立て脅し立て、

更になおぼし憚りそ。天が下に目つぶれ足折れたまへりとも、某はつかうまつり止めてむ。國の中の佛神はおのれになむ靡きたまへるなど誇り居たり。（玉鬘の巻）

御案じに及ばぬ、片輪は某直して御目に懸けませう。國中の神佛皆それがしに靡き居るを御存じないか」といふ調子で、强もてに迫つて來る。何とも拒ぎ切れぬやうになつたので、乳母は少貳の長男なる豐後の介と女等と共に、密かに玉鬘を伴なひ筑紫を逃れて都に出でたが、早速父君頭の中將に通ずるよすがもない。思案に餘つて大和の長谷の觀音に詣でて祈願を籠めたるところ、圖らずも右近にめぐり逢うたので。

それより源氏は父の頭の中將には內々に、玉鬘をば我が女分にして邸內に養つた。源氏の娘と信じて通ふものの多かつた中に、頭の中將の子息等も居て、後に同父の兄妹と解つてきまりわるがつた滑稽がある。夕霧が、初めは實の兄妹と思うて神妙にして居たが、事情がわかつて、前に手を出さなかつたのを悔いる所がある。又頭の中將が玉鬘を我が子と知らず、源氏に競爭するつもりで、隱し女に生ませた近江の君といふ女を養ふ。近江の君は癡愚で、早口で、それがいたく父中將の心を痛ましめたが、春心がついてからは尙侍になりたいというて、頻りに親兄弟にせがむ。或時の如きは夕霧の美貌に見惚れて、公卿達の居並んで居る中で、しなだれかかる哀れな滑稽がある。

危き事やのたまひ出でむと突きかはすに、此の世に目馴れぬまめ人（夕霧の事）をしも、「これぞな〳〵」と愛でて、さゝめき騷ぐ聲いとしるし。人々いと苦しと思ふに、聲いと爽かにて「沖つ舟よるべ浪路にたゞよはゞ棹さしよらむ泊り教へよ。」

玉鬘に心を寄する男は數多く、遂には源氏まで好色心を動かしてあつたが、最後まで蹈み止まつた競爭者は螢の兵部卿宮と髭黑の大將との二人で、勝は遂に髭黑の右大將に歸した。その爲に右大將の北の方が嫉妬騷ぎを起して、大將が玉鬘の方へ出かける折に火鉢を投げつける、大將の留守に眞木柱姫といふ大將の愛女を連れて里方に歸る、大將が眞木柱を訪ねても逢はせず歸さぬといふ悲劇がある。とにかく玉鬘は髭黑大將のものになつた。

藤壺の宮薨去の折、夜居の僧都が人目無き時を窺つて、帝が源氏の胤にまします事、此の祕密を知る者は僧都と王の命婦との外に無い事を密奏した。帝は聞いて淺ましき己が宿世に驚かせらる。之と共に源氏を臣下扱ひするのを空恐しく感ぜられて、成らうことならば、帝位を源氏に讓らうとも思はせられたが、これも出來ず、遂に源氏に准太上天皇の待遇を與へらるることになつた。これが一つ源氏の心を痛めた上に、更に一つ源氏の心を根柢から振盪したのは女三の宮對柏木右衞門督の關係である。朱雀院（源氏の兄君）の御子數多あらせらるる中、院は殊に三の宮を不憫に思され、出家するにも此の宮のみが心がかりとあつて、其の後見を懇ろに源氏に託された。

源氏は據ろなく御受けして六條の邸に迎へた。それから正妻の地位は自然に女三の宮に移つて、紫の上の重みが無くなる。從つて源氏との關係も今迄の水も漏らさぬ充實した情合とは違つて、何となく空虛な所が出來、隔てがあり、遠慮があり、取り繕ふ所がある樣になつた。

目に近く移ればかはる世の中を行末遠くたのみけるかな。（若菜の卷）

紫の上の境遇は此の歌の中に歷々と讀まれる。かくして紫の上は、義理にも忍んで源氏を女三の宮の方へやらねばならず、源氏は朱雀院への義理を申譯にして紫の上を慰めるといふ、かやうな長閑ならぬ關係を續けつつも、例の好き心で、幼い女三の宮を惡からず思つたが、玆に頭の中將の長子に柏木右衞門督といふがあつて、最初、女三の宮を朱雀院に懇望した關係から、今以て未練を殘して、折もあらばと窺つて居る。其の中、櫻の花盛りに、六條院の庭內で蹴鞠の催された折、宮は簾の陰から若殿原の遊ぶ樣子を見て居られたが、忽ち唐猫の小さいのが大猫に追ひかけられて逃げ出づるはずみに、簾の側が顯はに引き上げられる、透かさず見入つたのは右衞門督で、これよりは現にも夢見る心地、やがて病にさへ罹るやうになつた。せめては似寄つた人を見て慰むこともやと、女三の宮の姉君落葉の宮を北の方に迎へたが、生憎なる戀心は如何にしても抑へられず、遂にお附きの小侍從といふを媒にして、强ちに宮に通じた。此の事あつて以來、宮はこれが心がかりで快々として樂しまれぬ。丁度此の頃、紫の上が大病で、源氏は一つの胸を兩方に惱まされたが、その中に女三の宮懷妊の噂を耳にされた。怪しいと思つて居られる中、或日、女三の宮を訪れると、小侍從が慌てて立ち去る、あとに宮が濕つた樣子をして居られる、ふと褥の端から、淺綠の薄樣の卷紙が出て居るのに氣がついて、取り上げて見れば、美はしい男文字の艶書で、紛れもなき右衞門督の筆である。源氏は愕然として應報の恐しさを感じた。其の間に夕霧が紫の上や女三の宮に野心のある素振りさへ見えるので、油斷も隙もない中に、やがて女三の宮の御產があつて、柏木に似た薫大將が生まれた。源氏は之を見るにつけても、故桐壺院の御心がひし〳〵と思ひ當る。故院が我と藤壺との關係を知つて居られたであらうか、知りながら我に生き寫しの冷泉帝を實子扱ひされたのであらうかなど、思へば思ふ程空恐しく、人知れぬ煩悶苦惱の休まる時がない。その中に右衞門督は此の事を思ひ惱んで惱み死する。女三の宮も世を厭うて出家される。剩へ紫の上までが重き病に罹つて、頭をおろす。やがて果敢なくなられる。それより源氏は懊惱又懊惱、四季の移りかはるを見つつ悲しみに悲しみ歎きに歎いて、遂に五十餘歲を一期として薨去された。

六

源氏の君の生涯は、名だけあつて內容なき第四十一帖「雲隱」の卷に終つて、次の卷より以下の主要なる人物は、男では薫大將に匂ノ兵部卿宮の二人、女では桐壺院の八の宮の三人の姫君である。「橋姫」以下「夢の浮橋」に至る十帖を「宇治十帖」といふ。舞臺が八の宮の住居なる宇治に轉じたからである。

薫大將は女三の宮の罪の子、匂ノ兵部卿宮は明石の女御腹の皇子である。さて桐壺院の八の宮は宇治に退いてわびしく世を送られたが、出家の志はありながら、二人の姫君に心惹かれて果し得なかつた。薫の大將も、佛道に志し、さる阿闍梨の紹介で八の宮に逢はれたが、その中、八の宮は病に罹られ、姫君たちを大將に託して薨去あつた。（大將が八の宮を訪うた折に、老女辨の君から故柏木右衞門督と女三の宮との關係を聞いて驚く哀れな物語がある）。其の後が例の好色沙汰になつて、大將は姉姫の大君を慕うて頻りに迫るけれども、大君は亡き父宮をのみ慕うて大將には從はず、自ら中の君を大將に進める。大將は中の君を匂の宮に讓つて更に大君に迫る。かれこれする中に大君は果敢なくなる。かくて大將は大君には死なれる、手に入るべかりし中の君は已に人の物になつて居る、悔しさ昂じて、折にふれては意中を中の君にほのめかす。中の君は思案に餘つて遂に異腹の妹浮舟の君を進める。大將は浮舟の君が大君に似て居るのを喜んで、宇治に住ませて置いたが、匂の宮がこれを嗅ぎつけて密かに通じた。浮舟の君は二人の間に板挾みとなつて、宇治川に身を投げたが、救ひ上げられて後、遂に小野に籠つて出家した。大將は聞き傳へて消息を送つたが、使が一向要領を得ずに歸つて來たので、事の案外なるに失望して、これは必ず、我が前に姫を宇治に隱し住ませたと同じやうに、誰か小野に隱し居ゑたのであらうと推したといふことである。

源氏物語は、このやうにして結末を告げて居る。作中に現れる人物は約三百人、主要なる人物だけでも三十人に餘るのである。

(3) 構　想

その梗概を讀めば分る通り、源氏物語の構想は、大別して前後の二部に分けることが出來る。第一は光源氏を主人公とする正篇四十四帖であつて、第二はその子薫中將を主人公とする續篇宇

治十帖である。前者には光源氏をめぐる華やかな宮廷生活が描かれ、そこに桐壺更衣、藤壺、弘徽殿女御、六條御息所、空蟬、軒場荻、夕顔、葵、末摘花、花散里、五節君、明石の上、紫の上、朧月夜内侍、大輔命婦、朝顔齋院、秋好中宮、明石中宮、雲井雁、近江の君、女三の宮、落葉の宮等の多種多樣なる性格の女性と、さまゞの戀とが物語られてゐる。そして場面は京都、須磨、明石である。後者は薫君の沈んだ淋しい生活が描かれてゐて、舞臺も前者が華やかな宮廷が主であるに對して、これは靜かな宇治の山莊であり、宇治の姫君、浮舟等の女性が配せられてゐる。この二大部分を更に區分して考へると、正篇には先づ若き日の源氏が描かれ、この部分は主人公の系譜と、盲目的な奔放な戀愛生活が中心となつてゐる。次に失意の青年時代が描かれ、家庭生活の破綻、戀愛による過失と罰が語られ、ここに奔放な戀愛の當然の歸結が明らかにされる。次に第三として榮華を極めた壯年時代が描かれ、舊交のあつた女性の幸福な落着が說明される。ここまでは前半生であるが、これ等の後に源氏の後半生が描かれる。後半生の前期は理性と感情の鬪爭に生きる中年時代であつて、ここには玉鬘、雲井雁を女主人公として若さと戀とを次の時代に讓らねばならない源氏の憂鬱な生活が描かれてゐる。そして更に後半生の後期は、事、志と違ふ淋しい晩年期の生活であつて、そこに女三の宮と柏木との關係、夕霧と落葉の宮との關係、紫の上、源氏の薨去等が描かれて結末となつてゐるのである。

次に薫君を主人公とする續篇の方は、先づ少年時代に於ける薫君と匂宮との對立を描き、次に青年時代に於ける宇治の姫君達との關係が物語られ、最後に壯年時代に於ける浮舟との交渉が述べられてゐるのである。

源氏物語の構想は大體上述の樣なものであるが、作者は前後五十四帖に於て、變轉きはまりない人間の一生の運命や、社會の大きな動きを描かうとしてゐる樣に見えるのである。單にある人のある事件を描寫する小規模の小說ではない。この雄大な構想は超自然的な八犬傳などは別にして、寫實小說としては、我が小說史上はおろか、外國にもその例は稀であると思はれる程である。

(4) 文　章

次に源氏物語の文章に就いては、「紫家七論」の著者、安藤爲章を初め、多くの批評家、註釋者によつて、殆ど無條件に「文章無雙」といふ讃辭を捧げられた。現代に於ては「源氏は惡文だ」と批難する者もないではないが、缺點がないとはいへないとしても、大體に於て「文章無雙」の讃辭を捧げるのは當然だと思はれる。

源氏物語が文章として偉大なのは、第一其の洗煉推敲を極めた點にある。言葉が内容に調和して寸分の無駄がなく、法則に合して而も法則に縛られぬ點、萬代に範を垂れたものといへる。その例を擧げると、冒頭の第一節。

『いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。初めより我れはと思ひあがり給へる御方々、目ざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程それより下臈の更衣たちは況して安からず、朝夕の宮仕へにつけても、人の心を動かし、怨みを負ふ積もりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里邸がちなるを、いよ〳〵飽かずあはれなるものにおもほして、人のそしりをもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御待遇なり。

譯　いつの帝の御代であつたか、女御、更衣など后妃方の數多御附き申して居らるる中に、さまで貴い身分の者ではないが、際立つて羽振りのよい方があつた。初めから我れこそと高く止まつて居た方々は、怪しからぬ者と癪に障つて、いろ〳〵に譏り妬まるる。同じ位、或は一段下の更衣達は、尙更安心が出來ぬ。かくて朝夕御つとめをするにつけても、これを見て氣をまはして怨む者が澤山ある、其の怨みの積つた爲か、段々病氣がちになり、從つて心細く親里に下り勝ちにして居ると、帝はいよ〳〵たまらなく可愛ゆい者に思召されて、世の陰口にも御遠慮なく、うつけ帝の例話にも上りさうな御待遇であつた。』

一見解りにくい文章であるが、繰り返して讀むと無駄がない、而も省略したところに、想像の餘地があつて却つて面白いのである。

次に込み入つた人情を細やかに寫した例として、若菜の卷、女三の宮の降嫁によつて紫の上の境遇の一變した所を抄出する。

源氏が紫の上にむかつて「朱雀院への義理で女三の宮を訪はねばならず、從つて自然御身の方へ無沙汰になつた」と申譯あつて、極りわるさうに頬杖をついて紫の上の傍へ寄り伏されると、紫の上は御硯を引きよせて、

『目に近くうつればかはる世の中を行末遠く頼みけるかな。

古事など書きまぜ給ふを、取りて見給ひて、はかなき事なれど實に道理にて、

命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬ中の契りを。

とみにもえ渡り給はぬを、いとかたはら痛きわざかなと、そゝのかし聞え給へば、なよよかにをかしき程に、えならず匂ひて渡り給ふを見出だし給ふも、いとたゞにはあらずかし。

年頃さもやあらむと思ひし事ども、今はとのみもて離れ給ひつゝ、さらば斯うにこそはと打ちとけ行く末に、あり〳〵てかく世の聞き耳もなのめならぬ事の出で來ぬるよ。思ひ定むべき世の有樣にもあらざりければ、今より後もうしろめたうぞ覺しなりぬる。さこそつれなく紛らはし給へど、侍ふ人々も思はずなる世なりや。數多物し給ふやうなれど、何方も皆此方の御けはひには、片さり憚る樣にて過ぐし給へばこそ、事なくなだらかにもあれ。おしたちて斯ばかりなる有樣に消たれてもえ過ぐし給はじ。又さりとて果敢なき事につけても、安からぬ事のあらむ折々、必ず煩はしき事ども出で來なむかしなど、己がじし打ち語らひ歎かしげなるを、露も見知らぬやうに、いとけはひをかしく物語などし給ひつつ、夜更くるまでおはす。斯う人のたゞならず思ひたるも聞き惡しと覺して、「かく是れ彼れ數多ものし給ふめれど、御心にかなひて今めかしく優れたる際にもあらずと、目馴れてさうゞ〳〵しく覺したりつるに、此の宮のかく渡り給へるこそ目やすけれ。猶ほ童心の失せぬにやあらむ、我れも睦び聞えてあらまほしきを、あいなく隔てあるさまに人々や取りなさむとすらむ。等しき程、劣りざまなど思ふ人にこそ、只だならず耳立つ事もおのづから出で來るわざなれ、忝く心苦しき御事なゝめれば、いかで心おかれ奉らじとなむ思ふ。」などのたまへば、中務中將の君などやうの人々、目をくはせつゝ、餘りなる御思ひやりかなどいふべし。昔は只だならぬ樣に使ひならしたまひし人どもなれど、年頃は此の御方に侍ひて、皆心よせ聞こえたるなゝめり。他御方々よりも、如何に覺すらむ、もとより思ひ離れたる人々は、中々心安きをなどおもむけつつ、訪ひ聞こえ給ふもあるを、かく推し測る人こそ中々苦しけれ。世の中もいと常なきものを、などてかさのみは思ひ惱まむ、など覺す。餘り久しき宵居も例ならず人や咎めむと、心の鬼に覺して入り給ひぬれば、御衾まゐりぬれど、實に傍ら淋しき夜な〳〵經にけるも、尙ほたゞならぬ心地すれど、かの須磨の御別れの折覺し出づれば、今はとかけ離れ給ひても、唯だ同じ世のうちに聞き奉らましかばと、我が身までの事は打ち措き、惜らしく悲しかりし有樣ぞかし。さて其の紛れに、我れも人も命堪へず成りなましかば、言ふかひあらまし世かはと覺し直す。風うち吹きたる夜のけはひ冷やかにて、ふとも寢入られ給はぬを、近く侍ふ人々、怪しとや聞かむと、打ちも身じろき給はぬも、猶ほいと苦しげなり。夜深き鳥の聲の聞こえたるも物哀れなり。わざとつらしとにはあらねど、かやうに思ひみだれ給ふけにや、かの御夢に見え給ひければ、打ち驚き給ひて、いかにと心騷がし給ふに、鳥の音待ち出で給へれば、夜深きも知ら

ず顔に、急ぎ出で給ふ。いといはけなき御有樣なれば、乳母たち近く侍ひけり。妻戸推しあけて出で給ふを見奉り送る。明けぐれの空に雪の光見えて覺束なし。名殘までとまれる御香ひ、やみはあやなしと獨言たる。雪は處々消え殘りたるが、いと白き庭の、ふと差別見えわかれぬ程なるに、「猶ほ殘れる雪」と忍びやかに口吟び給ひつゝ、御格子打ち敲き給ふも、久しくかゝる事無かりつる習ひに、人々も空寢をしつゝ、やゝ待たせ奉りて、引き上げたり。「こよなく久しかりつるに、身も冷えにけるは、畏ぢ聞こゆる心のおろかならぬにこそあめれ。さるは罪もなしや。」とて、御衣引きやりなどし給ふに、少し濡れたる御單衣の袖を引き隱して、うらもなく懷かしきものから、打ちとけて、はたあらぬ御用意など、いと恥かしげにをかし。

譯　紫の上は今まで人々に敬はれつつ正室の地位を占めて居られたが、昨日に變る今日の境遇に心細くなつて、硯を引き寄せて「目前にかく迄變る情ない世の中を、行末遠く頼みをかけた果敢なさよ」といふ意味の歌を書いて、なほ君寵の衰へた昔の例など書き混ぜつつ、今の我が身に思ひ寄せて居られる。源氏がそれを取つて見て、はかなき慰み書きながら、道理至極と、紫の上の心を思ひやつて、其の側に、「命は絶ゆるとも、世に類ひなき吾等が契りの絶ゆることがあらうや」といふ意味の歌を書いて、早速立ち去るには忍びぬ樣子を、紫の上は氣の毒になつて、早く女三の宮へ渡り給へと勸められる。やがて源氏がなよやかなる裝束にえならぬ薫物を香はせて、女三の宮の方へ渡らるる。それを見送る紫の上の御心地、げに一通りの事ではない。紫の上は源氏の好き心を思ふにつけ、萬一、新たな好色沙汰でも出來はせぬかと、年來心配して居られたが、源氏が、もう此の年齢になつてはと、其の方には一向かけ離れて居らるる樣子に、さては此のまま御心の變る事も無いであらうと心安く打ち解けて過ぐる中に、現在此の通り、人聞きも恥づかしい事が出來した。これではとても安心の出來る世の有樣ではない、行末が案じられると、世の中を頼み少く思はれるやうになつた。さて紫の上は此の事をば氣にも留めぬげに紛らはしては居られるが、御附きの女房などが、思ひかけぬ世の中ではある、君の御寵愛を受ける方々は數多あるやうではあるが、紫の上に對しては、いづれも一目おいて遠慮して居らるればこそ、今まで穩かに過ぎて來たといふものの、こんな情ない有樣に蹴おとされて、そのまま御過しになる事は決してあるまい。又其のまま大人しく御過しになつたとて、事あるたびに面倒が起きるに相違ない。ね、屹度さうだよ」などと、銘々勝手に語り合うて嘆いて居るのを、紫の上は露程も見知らぬ風をして、夜の更けるまで物語などして居られた。さて紫の上は、今度の一條を、女房どもの斯樣に只事ならず話し合ひ、思ひ合ふのを心外に思召されて、「君に添ふ者はこれかれ數多あるやうなも

のの、一人として御心に合ふやうに當世めいた優れた者のないのを、物足らず思うて居られた所に、今度三の宮の御越しになつたこそ此の上なく相應はしい。御若ければまだ子供心も失せぬであらう、どうぞ睦ましく御物語もしたいものと思うて居る所を、心なく隔てがましく思うて居るやうに取りなす者もないとは限らぬ。同格の者、或は位の劣つた者に對してこそ耳障りな嫉妬沙汰も自然に出て來るものだが、三の宮は、恐れ多くも朱雀院の皇女といひ、心苦しき御事情もあると見えれば、どうかして、氣を置かれ申さぬやうにしたいと思うて居る」など言はれると、中務、中將の君などいふ女房たちが、目くばせして、これはまた餘りな御思ひやりなどいふであらう。此の中務や中將の君などは、もと源氏が一方ならず目をかけて使ひ馴らされた女房であつたが、近年は紫の上の方に仕へる事になつて、かく御同情申して居るものと見える。下風に立たるる外の方々に比べて、紫の上の如何ばかり心憂く思はれることであらう。元來重くも見られず、源氏の御寵愛の事などを思ひ切つて居る人は、却つて心安いものを、今迄重く見られただけに、紫の上の御心根が痛はしいなどと、好意で慰める人もあつたが、紫の上はまた、かやうに推量さるる我が身こそ却つて苦しい、どうせ頼みにならぬ無常の世を、何のくよ〳〵思ひ惱むに及ばうか、なぞと考へらるる。

源氏のいまさぬ淋しさに、思はず夜を更されたが、いつまで寢まぬのも、例ならずと人の怪しむであらうと、引け目ある身の心の鬼に自ら思ひ込んで、臥戸に入つて夜着を纏はれた。

眠られぬままに思ひつづくれば、女三の宮の降嫁以來、源氏に離れて傍ら淋しき幾夜を過したのは、ただならず悲しいが、いつぞやの須磨の別れの事を思ひ出づれば、かの折には、今は、遙かにかけ離れて居ても、せめてはただ同じ世に無事に在すとだに聞きたいものと、我が身の事は擱いて、只管君の身をのみ大事に惜しく戀しく思つて居てあつたではないか。若しあの騷ぎの紛れに、我れなり君なり、悲しみに命堪へずして果敢なくなつたならば、言ふ甲斐ある世と言はれようか。それに比ぶれば今の境遇も慰むる由の無いではないと思ひ直さるる。風ふく夜の冷やかで早くは寢つかれぬを、近く居る女房共の怪しむであらうと、身じろぎもされぬ心遣ひ、いかばかりの苦しさであらう。

さる程に、深夜の鷄の聲の聞ゆる哀れさ、紫の上は故らに源氏を恨まれたのではないが、かやうな切なる物思ひの通じたのか、それが源氏の夢に入ると、驚いて心騷がされ、漸く鳥の音を待ちうけて、まだ夜深きをも知らず顔に急ぎ出でらるる。女三の宮がまだ幼いので、乳母たちの間近く附いて居たのが、源氏の妻戸を抑し開けて出でらるるを見送り奉る。曉の空ほの白きに雪の光が添うて、空か雪かと紛らはしい。源氏の立ち去られて後も、空燒の名殘りいみじく薫つて、「春の夜のやみはあやなし梅の花……」の古歌も思ひ出でらるる。源氏は紫の上の方に歸らるると、庭には雪が所々に消え殘つて居るが、白い庭の、庭か雪かわからぬ樣なるを見て、「子城陰處猶殘雪」といふ白樂天の詩を口吟みつつ、格子を叩かるる。久し

くかやうな餘所泊りも無かつたこととて、女房共が空寢をして、暫く待たせてから格子を引き上げた。源氏は「久しく待たせられたので大分身が冷えた、しかしかく待たせて油を取るのも、女房たちが御身を畏れて大事に仕ふるからであらう。罪も經いわ」といひながら、紫の上の衾をかきやらるると、涙に濡れた單衣の袖を引き隱して、實は心底懷かしい辯に、容易くは打ちとけられぬ用意など、恥づかしげに見えて面白い。』

此のなよ〳〵とした文體は、大宮人の閨怨を寫すに相應はしく、辭句が優艶であつて、無駄がなく、而も委曲を盡くしてゐる點、皆歎稱に値するのである。

源氏物語の文章の第二の特色は優美艶麗を極めた點である。これは內容の性質及び時代思潮の勢力のしからしむる所であつて、此の點から、源氏及び平安朝の文章を、

單調に過ぎて變化がない。優美艶麗はあるが、勁健、莊嚴、飄逸、雋辣等の趣味が全く缺けてゐる。

と難ずる人があるが、それは當時の作家の趣味が全くそれ等の方面になかつたのであるから、蓋し止むを得ないことである。

更に第三の特色として著しいのは、朧寫式な點、卽ちぼかし式、ほのめかし風な點である。源氏一篇の中心材料は男女の情事であるが、この男女の情事を初め、刺戟性の事件を寫す場合には、殊にこのぼかし式の筆法が用ゐられてゐる。ただに刺戟性の事だけでなく事物の何たるを問はず、此の樣式を用ゐるのが文章を美しくする所以であるといふのが、源氏の作者を初め平安朝の作者一般の考へであつたのである。これの引例は省くこととするが、此の筆法は源氏の作全體に亙つてゐるのであつて、文中の主格省略なども其の一現象と見られる。源氏は、多くの人物を殆ど固有名詞なしに寫して居り、官位による名前は讀者を迷はせ、人物の年齡なども甚だ漠然としたものであつて、拔き讀みの出來ない厄介な小說であるが、それは此のぼかし式の筆法の然らしめたものである。

最後に源氏物語の文章に於ける修辭法であるが、これは古來の註釋家、批評家によつて、よく論ぜられた所であつて、安藤爲章は紫家七論に、

『全體は傳にして又おのづから序の體あり、跋あり、記あり、論あり、書ありて、諸體備はれり。彼の帚木の卷の品定めは殊に奇妙なるものなり。爲章曾てその章段をあらため侍りける時に、序して云ふ、論破あり、論承あり、論腹あり、論尾あり、麁より細に入り、俗より雅に赴き、繁より簡に歸し、波瀾、頓挫、照應、伏案などいふ、唐の文法おのづか

ら備はり、其の氣脈は悠揚として寛裕に、其の文勢は圓活にして婉曲なり（是れ品定めのみならず一部にわたり其の意をつくべし。史記莊子韓柳歐蘇にひとしかるべし。女の筆にては珍らかにあやしく、式部は實に古今獨歩の才といふべし。』

と評し、賀茂眞淵も其の「新解」の總考に於て、同樣に生張本、伏案、頓挫、小段、大段等を同じ論てゐる。更に萩原廣道は、其の「評釋」に於て、源氏の文章を見て、「その法則の嚴かなるに驚く」といつて、その法則について左の如く説いてゐる。

『その法則のやうは如何にといはむに、まづ一部にわたりて一部の法則あり、一卷毎に一卷の法則あり、一段毎に一段の法則あり、一章毎に法則あり、一句毎に法則ありて、いさかなる事の末々まで、怪しきまで足らひたる法則あり。其の一部にわたる法則といふは、時世年月の移るを經とし、人の事のゆきかはるを緯として、物語の趣を作りなすに、時世年月の移りゆく經の方にては、まづ桐壺の帝の大御代、其の次に朱雀院の帝の御代、その次に冷泉院の帝の御代、其の次に今上としるしたる帝の御代と定めおきて、其の中間に必ず物語のなき空しき年をおかれたる、是れ法則なり。又源氏の君の齢をおひて、生まれ給へるよりおほよそ五十年餘の事を五十四帖に書きつらねて、右の御代々々に相協へ、その御代ざまの趣によりて、此の君の上に盛衰のある樣を書き分けられたる、是れ法則なり。…… 光源氏の君といふを立てゝ一部の主とし、それに對へてかゞやく日の宮（藤壺中宮）を取り出でたる、是れ光と赫とを對へたる正對の法なり。然れども藤壺の宮の事は祕事なる故に、其の所緣に御女姪の紫の上を取り出でたる、是れ藤の花のゆかりに紫といへるにて、いはゞ藤壺の宮のかはりの如きものなれば、始終源氏の君に相偶ひたるは、すべて此の紫の上なり。これ奇對といふべし。…… さてその光君の御末を語るに、薫大將と匂兵部卿宮とを並べあげたる、是れ光のなごりに匂ひと薫りとを取り出でたる、是れはた正副の對法にて、且つ源氏の君の面影をうつしたる照應なり。』

其の他、照對、間隔、伏線、抑揚、緩急、反覆、省筆、餘波、諷喩、餘光などを擧げて論じてゐるのであるが、しかし修辭上からみれば、源氏の作者はただ人情の哀れを、美しい磨き上げた文章で人の氣に障らぬやうに寫さうとしたのであつて、種々の文章のあやは自然に流れ出たものである。源氏には後世の作に見るやうな、先づ修辭論を知つて之を應用した跡がない。內容を離れて文章だけが遊んで居る所がない。その點まことに紫式部は文章道の三昧境に達して居たといふべきである。

このやうに源氏物語は趣致に富んだ名文であるが、文章上の缺點がないとはいはれない。例へば優美の單調、脚色の單調、臚寫の過度、事の繁雜に過ぐる事、などを擧げることが出來るのであるが、これ等の缺點の多くは長所に伴なつたものであつて、これを善美な方面に比較すれば、白璧の微瑕であつて、その偉大なる價値に累するには足らないのである。

要するに源氏物語の文章は、その優美なる點、法格に合した點、豐かな詞藻が自然に自由に使ひこなされた點、假名文章の美を盡くした點に於て、後世の模範たる文章といふべきである。

(5)　源氏物語に對する種々の見解

古來、源氏物語は種々の批評を受けた。由來、有名な大作は是非、褒貶が烈しいものであるが、源氏物語もこの運命を免れることは出來なかつた。その時代により、その人によつて種々の見解が述べられたが、その主なるものは、佛理體現説、勸懲説、誨淫説、歴史代理説、物の哀れ説等である。

源氏物語には作者の主義理想といふものが明らかには現れて居ない。これがかかる矛盾した諸々の觀察の加へられた原因である。源氏の中には、作者が溫淑な控目な婦人を理想としたことや、田舍武士を卑しんだ事などが窺はれるが、大體から見て作者の文學上の主義主張が現れて居らず、又豫め人物中の一人に同情を寄せて、他を惡しざまに書くなどといふ事はない。作中の人物が、いづれも世の無常を觀じて出家を床しき樣と信じて居る。榮華を極めた人も最後には皆悲哀を感じて、加持祈禱や佛いじりに耽つてゐる。かかる點からみれば如何にも佛理を寫したものとも見える。男女關係の描寫に力を入れてゐる點からみれば、如何にも誨淫亂俗の書とも見える。前に人を辱しめた者が、後に他人から同樣の辱しめを受けて苦悶の中に世を終る、作全體に因果應報を示した跡が現れてゐる點から見れば、如何にも勸善懲惡を旨としたやうにも見える。又作中の事柄が當時の史實にも嵌まりさうな所を見れば、歴史代理の説が現れるのも尤もかも知れない。しかしこれ等の諸見解の中で、本居宣長の「玉の小櫛」に於ける源氏物語論が最も優れたものである。宣長は源氏を稱して、次の如く述べた。卽ち、

『こゝらの物語書どもの中に、此の物語は殊に優れてめでたき物にして、大かたさきにも後にも類ひなし。先づこれより先なる古物語どもは、何事もさして深く心を入れて書けりとしも見えず、たゞ一わたりにて、あるは珍らかに興ある事を旨とし、おどろ〳〵しき樣の事多くなどして、いづれも〳〵物のあはれなる筋などは、さしも細やかに深くはあらず。

又これより後の物どもは、狹衣などは、何事ももはら此の物語のさまをならひて、心を入れたりとは見ゆるものから、こよなく劣れり。其の外も皆殊なる事なし。たゞ此の物語ぞ、こよなくて、殊に深くよろづに心を入れて書ける物にして、すべての文詞のめでたき事は更にもいはず、世に經る人のたゝずまひ、春夏秋冬折々の空の景色、木草の有樣などまで、すべて書き樣めでたき中にも、男女その人々のけはひ心ばせを、各〻こと〳〵に書き分けて、ほめたるさまなども、皆その人々のけはひ心ばへに從ひて一ト〻やうならず、よく分かれて現の人に逢ひ見る如く推し測らるゝなど、おぼろげの筆のかけても及ぶべきさまに非ず。さて又萬よりもめでたき事は、まづ漢文などは、世に優れたりといふも、世の人の、事に觸れて思ふ心の有樣を書ける事は、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく淺きものなり。すべて人の心といふものは、漢文に書けるごと、一かたにつきぎりなるものにはあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかくと、くだ〳〵しく女々しく亂れあひて定まり難く、さま〴〵の隈多かるものなるを、此の物語には、さるくだ〳〵しき隅々まで、殘る方なく、いとも委しく細かに書き表はしたる事、曇りなき鏡にうつして向ひたらむが如くにて、大かた人の情のあるやうを書けるさまは、やまともろこし、いにしへ今、行くさきにも類ふべき書はあらじとぞ覺ゆる。又すべて卷々の中に珍らしくおどろ〳〵しく、めさむるやうの事はをさ〳〵無くて、初めより終りまで、たゞよの常のなだらかなる事の、同じやうなる筋をのみ言ひて、いと長き書なれども、よむにうるさく覺ゆることなく、倦む事はなくて、たゞ續き床しくのみぞ覺ゆるかし。已れ教へ子どもの爲めに、はやくより此の物語を讀み解きて聞かする事、あまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、かばかり長からぬだに、說くに倦む心もまじるを、これはさしも長き書にて、年月をわたれども、いさゝかも倦む心出で來ず、度ごとに始めて讀みたらむ心地して、珍らしくをかしくのみ覺ゆるにも、いみじく優れたる程は知られて、返す〳〵めでたくなむ。』

これを現代の文藝批評家の用語に換へれば、在來の物語に現れる人物が類型的であるのに反して個性を書き分けた事、在來の物語が事件趣向の奇拔を狙つたのに反して人情を寫し、平凡、自然の事柄を寫した事、漢文一流の粗漫な形式的文章に反して心理變遷の過程を精細に描いた事、これがこの物語の特色だといふのである。言葉は古いが、時代を超越した卓見であつて、誨淫の書といひ、教訓の書といひ、佛理を現した作といふやうな愚說などの、足許にもよられぬ大批評である。

(6)　源氏物語の絶大價値

我々は古來現れた源氏物語に對する諸見解の中で、本居宣長に於て初めて眞の批評を見た。源氏は世に出てから六百餘年にして知己の批評に出會はしたといつてもよいのである。

宣長の批評は超時代的であつたが、源氏は更に時流を超越して居る。そしてその主なる點は、現實的、自然的、平凡的、精寫的な方面にある。これ等の特色は近代文學の特色であつて、源氏は實に近代文學の趨勢を豫想したとさへ見られるのである。勿論、最近文學の用語たる是等の言葉をそのまま源氏に加へることは出來ないが、源氏は八百年前に於て、昔風に現代文學の趨勢を暗示して居た。源氏全體には、悲哀な調子が泌み亙つてゐるが、現代文學に於ける所謂近代的悲哀に對して、之は古代的悲哀ともいふことが出來るし、現代文學の意識的悲哀に對して無意識的悲哀といつてもよいのである。

源氏以前の文學、例へば竹取、落窪、宇津保等の物語はいふに及ばず、後に出た軍記物、御伽草子、淨瑠璃、小説等が概ね神話的、傳奇的、空想的、架空的であつて、事件の珍奇を主として、讀者の好奇心に投ずるのを主としたのに比べて、源氏は驚かれるほど其の面目を異にして居る。

源氏に書いてある事柄は、當時の公卿社會には實際有り勝ちの事で、驚くに足りない自然事、平凡事であつた。そして其の有り勝ちの自然事、平凡事を、當時現用の口語體を以て、本居翁の謂はゆる「くだ〳〵しき隅々まで殘る方なくいとも委しく細かに書き表した」のである。當時の公卿達が身につまされながらこれを耽り讀んだのは、丁度今日の青年が新しい文學を耽り讀むのに似て居たであらうと思はれる。そして傳奇的趣味を喜んだ平安朝以後の讀者が源氏を好まないで、又理解しなかつたのは、丁度馬琴弦齋張りの脚色好みの舊時代の人が自然主義派の小説を見て、此の平凡事がこれで藝術か、と怪しむのに似て居る。尤も生活狀態のがらりと變つた後代の讀者には、當時の宮廷生活や、情事の續出や、物怪の祟りや、加持祈禱などの騒ぎが、如何にも不自然らしく見えるであらうが、それは違つた生活の色眼鏡をかけて見るからの話であつて、これが當時の實際であつた事は、榮花、大鏡、其の他の歴史物を見ても明らかな事である。

藝術は本來自然を眞似て出來たものであるが、藝術に一種の型が出來ると、其の型にとらはれて、自然をば藝術に似て居る如く見るやうになる。吾々が、景色が畫のやうだと言ひ、人事を見てそつくり芝居に成つて居るなどといふのが、卽ちそれで、そしてこれがやがて藝術の生命の無くなつた事、自然を觀る眼が先人の型に捕へられたことを意味して居る。源氏物語は、作者にも讀者

にも斯様な先人的悪癖の附かなかつた時代に出來たので、作者が直ちに人生を見て自家獨得の文章に表したものである。

我々が源氏物語に於て更に驚かされるのは、源氏が世界最古の小説の一つたる事である。「小説（ノヴェル）」といふものを譬喩物語や傳奇の類と區別して「人情展開の過程を寫した物語」と解すれば、英國の小説はリチャードソンの「パメラ」(Richardson's "Pamera") が最初だといはれる。それは西紀一七四〇年であつて、今より二百年以前である。西洋に於ける寫實小説の元祖といはれるボッカッチョの「デカメロン」(Boccaccio's "Decameron") の公にされたのは、西紀一三五三年、即ち今より凡そ五百九十年前である。支那、印度には無論、源氏以前に此の意味の小説はなかつた。從つて約一千年以前に一女性の手によつて成つたこの源氏物語は世界最古最大の小説かも知れないのである。少くとも世界最古最大の小説の一たる事は疑ひなく、正に我が文學史上の寶典といはなければならない。

要するに紫式部及び源氏物語は、描寫――即ち文章に於ては時代の樣式を完成したものであり、文學の本領を發揮した點に於ては、時代を超越したものである。其の現實的、自然的、平凡的、精寫的な點に於ては、世界最古の小説でありながら、八百年を隔てて、近代文學と呼應して居る所がある。そして內容と形式と、天然と人事とが如何にもよく調和して居り、平安時代を平安朝の樣式で描いたものとしては、何人も此の上に出ることの出來ない程に、立派な完備した傑作である。

第四章　枕の草子

(1)　清少納言の閲歴

その作品の性質は異るが、平安時代に於ける散文の雙璧として源氏物語と並び稱せられる「枕の草子」の作者、清少納言は、「後撰集」の選者であり、「梨壺の五歌仙」の一人である清原元輔の女である。曾祖父は清原深養父、「古今」「後撰」の作者としてこれまた著名な歌人であつた。清少納言はこの聲望高かつた父祖の名を辱しめないために大いに努めるところがあつた。彼女の事蹟は餘り明らかでなく、枕の草子以外に有力な資料がないが、幼少より記憶力が強くて、才學拔群だつたことは「女房作者部類」六に、

『清少納言七歳にして手をよく書き、十三歳にして令義解を講じ、廿歳にして哥人の間となれり。』

とあるによつて知られる。

彼女が宮仕へをはじめて、皇后定子のもとに用ゐられたのは、大體、正暦三年頃からと考へられ、年は三十歳位と思はれる。そして長保二年十二月、定子のおかくれになるまで、まめやかに仕へ、宮からもいたく寵愛された。その間、花々しい社交空氣に接することが出來たのは勿論である。しかるに定子の父、道隆が薨じて、道長の權力が盛となり、その女彰子が後宮に立つに及んで、定子の勢が全く衰へ、宮に參る者さへなくなつた。しかし清少納言のみは節を改めず、常に誠實をつくして仕へた。かくて皇后定子は、不遇のうちに世を空しくせられたが、その後、少納言は鬱々として里に籠り、敢て他に出仕しようとはしなかつた。

彼女には紫式部のやうな引込思案のところがなかつた。爲さんとする所を爲し、言はんとする所を言ふ、これが彼女の特色であつた。彼女が四納言と稱せられた源俊賢、藤原公任、同行成、同齊信等を初めとして、當時の著名な文人と交り、堂々として縱横の奇才を發揮した事情は枕の草子の至る所に見えてゐる。彼女は鋭敏な感受性を持つてゐたが、それと同時に磊落疎放な性質も大いに持つてゐた。「中關白記」に「大酒不二女所爲一云々」とあつて、彼女が大酒家であつたやうにも見えてゐるが、それは別としても、彼女は男まさりの氣丈夫な女性であつて、人を人とも思は